

---

# パンツ脱いたら通報された

烈火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パンツ脱いだら通報された

### 【Nコード】

N6663Y

### 【作者名】

烈火

### 【あらすじ】

俺はただ頭にパンツをかぶりながら散歩をしていただけなのに市民の平和を守るためとかなんとか言っちゃって、市民である俺を逮捕するとはこれいかに。あれだぜ？俺自身は無職だけど幼馴染なんて凄いんだからな。19歳になっても少女で押し通してる凄いい人なんだからな。……まったく、管理局の人は話も聞かないのか……。これで逮捕されるの何回目だよ。

## 1・俺、無職

「時というものは残酷なものである。9歳でロリロリでツインテールで天使のような幼馴染も昔は“魔法少女”といわれみんなに可愛がられたものだ。バリアジャケットだって小学校の制服を参考にしたらしく9歳という年齢も相まってそれはそれは可愛らしいものであった。しかしどうだろう……10年の歳月が過ぎ、その幼馴染も随分とかわってしまった。あの純粹無垢だった幼馴染はいまは19歳にもなるのにいまだに“少女”と信じて疑わないらしい。本当に俺と3年間高校に通ったのかと疑いたくなってくるほどである。髪型にしてもそうだ、いつもはサイドテールにしているのここぞというときにはツインテール。確かにツインテールはかなりの萌えポイントであるがいがなものかと思う。極めつけはあのバリアジャケットである。あれっていまだに小学校の頃の制服をモデルにしているみたいだし正直コスプレにしかみえない。いいのか、管理局。おまえらのエースこれでいいのか？」

「ニートの人には言われたくないんだけど……」

一人さびしく家でゲームをしながら、幼馴染のことについて考えているとどうやら口から出ていたらしくたったいましたが帰ってきたであろう高町なのはに聞こえてしまった。ここ、俺の部屋なんだから……

「というか、この家は私とフェイトちゃんが一緒に借りたんだからね。あまり変なことしないでね？」

「変なことって、なのはやフェイトの下着を洗濯すると見せかけて実は俺の部屋に隠してるとかのこと？」

「ちょっとまって、いまの議題について3時間ほど話し合おう」

「オーライオーライ、まずはその魔力弾を消してくれ」

ちよつとした冗談のつもりだったが、意外になのはは怒ってきた。

「もう……そういう冗談は禁止だつて言ったでしょ？ まったく、高校を卒業してもかわらないんだから……」

「19歳にもなつていまだにいちごパンツ履こうとする奴に言われたくないよ」

「ちよつとなんで知ってるのッ!？」

なんかすんごい勢いでこちらに近寄りその情報を流したのは誰かと問い詰めてくる。地味に首が絞まって痛いのですが……。それにいちごパンツの件なら桃子さんが嬉しそうに話してましたよ。

みなさんお察しかと思いますか、この可愛らしい女性、高町なのはと俺は幼馴染である。俺の親となのはの親 土郎さんと桃子さんがとても仲がよかったのである。その関係上、小さい頃から二人でよく遊んだり、なのはで遊んだりしていまもそういった関係が続いている。

「そういえばなのは、何しに来たんだ？ 今日19時に帰ってくるとメールがきたのを覚えているんですが」

「うん、その予定だったんだけどちよつと帰りが遅くなりそうだから」

らそれを伝えようと思って」「

「そんなことでここまで？ あいかわらずやるのがすげえな。え〜っと、帰りが遅くなるっていうとあれか、はやてが設立した部隊のこと？」

「そうそう、機動六課だよ。ようやくスタートしたし少しの間だけバタバタしそうなんだよな〜」

「いつもバタバタしてるじゃん。俺からバタなのなんて愛称で呼ばれてるし」

「うるさい。まあ、そういうことからだからちよっとの間だけ遅い帰りが続きそうなんだ。ごめんね！ 夕食用意しようとしてたんでしょ？」

「べ、べつにあんたたちのために作ろうなんて考えてないんだからねッ！？」

申し訳なさそうな顔でなのはが謝ってくるもんだからとりあえずツンデレ系で返してみることにした。恐ろしいほどに無表情でこちらを見返している。ゾクゾクするぜ……！！

「まあ、事情はわかったよ。ほんじゃ、夜に食べても次の朝に胃がもたれないような夜食置いておくから適当にフェイトと食べておいてくれ」

「ふふっ、ありがと。それじゃ私行ってくるね」

「あいよー」

なんだかわからないが笑顔でお礼を言われたあと、なのはは手を振りながら俺の部屋をあとにした。そして丁度、玄関が開いて閉じられる音を確認する。さてさて……スーパーにでも買って食材買って作るとなるとどうもやる気が沸いてこないんだよな。一人分つ

10畳ほどのフローリング部屋に、ベットや本棚、クローゼット、机、パソコン、テレビなどの生活感あふれるものが並んでいる。クローゼットから適当に服を着てサイフをジーンズのポケットに突っこんでから部屋を出た。

「あ、そうだ」

部屋を出たところであるとあることを思い出して戻る。机に置いてある写真立ての中で静かに微笑んでいる女の子に向かって優しく挨拶をした。

「行ってくるぜ、初 ミクちゃん」

ミクちゃん、無職だけど頑張るからね

## 1・俺、無職（後書き）

どどもども、烈火です。基本的に息抜き投稿にはなりますが、きちんと仕上げていきたいと思えます。

一話あたり2000文字くらいを目処にしていますのでさっくり読めるかと。

## 2・ちょっといい

「しまった牛乳買うの忘れてた」

夕食の買い物も終わり、さっさとカップ麺を食った俺はなのは達が帰るまでの間をゲームしながら過ごしていた。画面内ではポニーテールの女の子が頬を赤らめながら俺の名前を愛おしそうに呼んでいるところであっただが

「牛乳がないとなのはが怒るもんなー。どんなに頑張ったところでフェイトの胸には勝てないというのに。あーでも行きたくないなー」

その場でぐずぐずすること3分、とりあえずゲームをセーブしてしようがなく牛乳を買ってくることにした。落ち度は自分にあるんだししようがないよな。

「あ、そうだ。このひよつとこ仮面を装着していかないよ」

机の上に無造作に放り投げられていたひよつとこのお面をつける。そういえば昔はこれで泣いているのはに追い打ちかけたっけ。

ひよつとこのお面をつけた俺は寝間着に黒のコートだけを羽織り家を出た。

このとき、素直に牛乳なんか買ってこなければあんなことにはならなかったのに……

「あ、あの！　なのはさん！」

「ふえ？」

ポツキーを食べながら仕事をやっている、新人であるスバルが声をかけてきた。スバルは熱血という言葉がよく似合うボーイッシュな女の子だ。いまはまだ経験も足りないけど磨けば光る素質をもっている。ちなみに私の直属の部下にもあたる。

「どうしたの、スバル。もしかして書類仕事でわからないこともあったかな？」

「いえっ……その……あの……」

やはり上司と喋るのは緊張するのかスバルはちよつと言いにくそうにしていた。その気持ちは私の体験してるからよくわかるよ。自分より立場が上の人や目上の人と話するときって緊張するもんね。

なのははスバルが何か言うまで優しくほほ笑んで見守ることにした。やがて意を決したようでスバルはその口で大きな声でとんでもない爆弾発言をなのはにかました。

「なのはさんとフェイトさんが男の人と同棲してるって本当ですかっ！？」

「ぶっ！？」

思いもよらない発言になのはは唾を飛ばした、というか噴出した。

そして慌てたようにスバルの口を塞ぐか時既に遅し。その場で残って仕事をしていた面々は面喰らったような顔をしてなのはとフエイトのほうを交互にみていた。みるとフエイトのほうも驚きのあまり書類にいちご牛乳をこぼしたようで慌てて拭いている最中であつた。

「あのッ、本当なんですかなのはさんッ！もしそうだとしたら私はどうすればいいんですか!？」

どうすればいいのかはこつちが教えてほしい。なのははそう思った。一応、なのはの身内ならば彼のことを知っているのだが……いかんせん此処はつい先日できたばかりの部隊であり、そんな周辺のことの話よりもまずは書類などを片付けることが優先だと思つていたのだが

「って、ちよつとまつて！ どうしてスバルがそんなこと知ってるの!？ 誰から聞いたの!？」

「そ、そうだよ！ 私もなのはも喋つてないんだからこの中に犯人はいるはずだよ！」

いちご牛乳まみれになつた書類をドライヤーにかけながらフエイトはこの場で仕事をしていた知人たちを振り返つた。

ヴィータ・シグナム・シャマル・ザフィーラ・はやて・リンフォースの計6人に視線を走らせるフエイト。そして一人の女性に目を止めた。

「は、はやてだね！」

「ちょっとまちいな！？　なんでいきなりうちって決めつけるん！？」

「だってはやてはなのはのポッキー食べようとして回避されてたじやん」

その一言ではやての体が固まる。　どうやら凶星のようだ。

「ちょ、ちょっとまってーな！　いずれわかることなんやし、1年間ともに過ごす仲間なんやで？　やっぱりあまり秘密にするものどつかと思って、私はスバルに言ったんや。　うちもスバルがあんな行動に出るとは思ってなかったんよ」

「ほんとうに?」

「ほ、ほんとや!」

立ち上がりながら必死に弁解するはやて。　なのはとフェイトはそんなはやてに疑惑の目を向けながらもひとまず落ち着くために座ることにした。

「まあ、いずれわかることだからいいのはいいんだけど……ねえ、フェイトちゃん」

「うん……それはいいんだけど……」

二人して溜息を吐く。

そのとき、フェイトの袖を誰かが引っ張る。　フェイトが引っ張られたほうに目を向けると自分の子どもたちであるエリオとキャロが

立っていた。

「どうしたの二人とも？」

「あのフェイトさん。もしかしてひよっこさんのことですか？  
キャラがそう聞いてくる。」

「えーっと、うん。ひよっこさんだね」

苦笑いしながら答えるフェイト。確か自分が高校生のときに二人とも別々に彼に合わせたんだっけ。彼は『宇宙一カッコイイ俺が会いにいったらその子たちが惚れてしまうではないかっ』とか何とかいいながら、そばに置いてあったひよっこのお面をかぶって会いにいったんだ。それが二人にも受けたのを覚えている。意外と彼って子どもには優しいところがあるんだよね。そうそうその他にも思い返せばいろんなことが

「僕もひよっこさんに女の子がいつぱいであるゲームももらったことは覚えてますよ」

「わたしはメイド服をもらったこと覚えてます」

いろんな悪夢よみがえってくる

そう、確かに彼は渡していた。もちろんメイド服は私が回収、ゲームのほうはその場でたたき折ったことを覚えている。

『おいおい……そんな男大丈夫なのか？』

どこからかそんな声が聞こえてくる。……そして言い返せない自分が悲しい。というかもっと言ってほしい、あわよくば誰かに説教をお願いしたい。お兄ちゃんとはなんだかんだで仲がいいし、ユーノに至ってはしょっちゅうメールしてるみたいだし。母さんはお買い物まで一緒にいく始末。ほんと、誰かに止めてもらいたい。

とりあえず、ざわざわしだしたみんなを落ち着かせるためになのはと二人で説得してみよう。

フェイトは目配せでなのはに合図して、みんなに着席を促した。

「君、その手に持っているブラを渡しなさい」

「そうやってクンカクンカする気だろう。貴様に嗅がせる匂いではない！ 去れ」

迂闊だった……。あ のとき、家を出るときに気付くべきであった。

フェイトのブラを装着してたことを

何かがおかしいと思っていた。まず店内に入ってから他の客が俺のことを露骨に避けていた。そして店員もどこかに連絡をしていたのだが……もちまえのポジティブさで地下アイドル（大嘘）の俺が来たことで騒いでるのかと思いきや……まさか管理局員のおっさんに通報していたとはな。やることがえげつないぜ

「君ね、いまの自分の状況わかってる？ 俺も捕まえたくないの。」

今月で君のこと何回捕まえたと思ってるの？　こつやって俺と君が職務質問するの何回目か知ってる？　今月で10回目だよ？　なんで3日に1回は君のふざけたひょっとこお面を見なきゃいけないのわ」

「奇遇ですね、俺もなんで3日に1回の割合でおっさんと密室で過ごさなければいけないのかとずっと思っていたんですよ」

「それは俺だって同じだよ。　いまからお姉ちゃんたちと遊ぶんだからさっさとこい」

おっさんは溜息をつきながら俺のほうににじり寄る。

そもそもなぜ俺がこんな目に合わなければいけないのか？　俺はひょっとこのお面をつけて黒のコートを羽織って、間違えてフェイトのブラをつけて牛乳を買いにきただけなのに。

おっさんの足に合わせてこちらも下がっていくと、電柱のところに不審者の張り紙が貼ってあった。

『不審者に注意！！　黒のコートを羽織り、奇天烈なお面をかぶった下着泥棒が多発しております！　住民の皆様はみつけたらこちらの番号までご連絡お願いします！』

「ほーっ……なるほどね。　こんなところに同志がいるとはな。　もっとも下着泥棒はしないけど」

そしてこいつのせいで俺はおっさんと密室で夜を過ごすことになる

んだな。

俺は名前もしらない、顔も知らない相手に向かって呪いをかけることにした。

2・ちよつとこい(後書き)

あのふざけた顔が結構好きです

### 3・おっさんと過ごす夜

「はい、それじゃ椅子に座ってー」

健闘むなしくおっさんに捕まった俺は交番へやってきた。そこではおっさんと二人きり。みなさん、ちょっとだけ考えてほしい。深夜におっさんと二人きりだぞ？ なにか間違いが起こるにちがない。……そう、いつもは俺に冷たい態度をとるおっさんだつて深夜の密室という魅惑増量世界によつてその皮を脱いでしまっただけだ。

「あのかな……いつもはお前に冷たい態度をとってるんだけどよ……」

「ちょ、まてよ。俺ら男同士なんだぜ……？」

「そんなことわかってる……！ だけど、俺のこの胸の高鳴りは抑えられないんだよ！」

「おっさん……！」

「……今日はまた随分と頭がおかしいな。どした、なにか嫌なことでもあつたんか？」

おっさんが菩薩のようなほほ笑みでこちらをみていた。なんか死にたくなってくる。

「いえ、持病が発症しまして。もう大丈夫です」

「そっや。まあ若いときは色々あるもんだからな。恋しかり友

情しかり」

「おっさんが言うときモイですね。そういえば、おっさんは結婚してましたよね？ 娘さんもいた気がするんですが」

とりあえず話題をそらしてなのはたちが帰ってくるまでの間、退屈しのぎにおっさんと話しをすることに。

「おー、しとるで。 娘は二人おる。 長女が16歳で次女が7歳や」

「離れてますね〜。 でも長女はいい年ですから恋人の一人や二人いるんじゃないですか？」

「やっぱお前もそう思つやる!!」

いきなりおっさんが身を乗り出しながらこちらに近づいてきた。近寄るなハゲ

「どうも最近おかしいんや！ 家に帰ってくるのだって19時やし、この頃は化粧もしとる。 それに服だってミニスカートやニーソとか萌え萌えで受けていいのを買ってくるようになったんや！ これは絶対男がある！ 毎日毎日学校でプレイしとるんや、絶対そうや！ もしかしてお前か！ お前がその男なんか！」

「落ち着けよおっさん、後半好きなシチュエーションが混じってるぞ」

まあ、確かに学校でのプレイは興奮するよね、うん。 しかしおっさんが娘さんをこんなに溺愛してるとは……、どことなく土郎さん

を思い出す。 土郎さんもなのはこのことになるとおかしかったからな。 授業参観のときや合唱コンクールのときだってはしゃいでたし。 父親というものはそういうものなんだろうか。

「だけど娘さんも17歳なんですよ？ だったら19時に帰ることや化粧なんて当たり前じゃないの。 ミニスカやニーソだって可愛いから履こうと思ったただけかもしれないじゃん。 あんまり心配なら娘さんに聞けばいいだけの話だろ？」

「……この頃、口をきいてくれないんだ……」

「……ごめん」

頭垂れながら絞り出すように呟いたおっさんはとても小さく見えて、たまらずそう返してしまう俺であった。

「つまりや、その同棲まがいなことをしている男性はなのはちゃんとフェイトちゃんの奴隷みたいなもんなんや」

『なるほど〜』

フェイトちゃんと二人で説明すること30分、身振り手振りを加えながら話していたのだがどうやらちゃんと伝わらなかつたらしい……

「やっぱりそうですよね！ なのはさんは女の子が好きなんですから、好き好んで男と同棲するなんておかしいと思っていましたんです。」

やはり奴隷用として置いておいたんですね！」

嬉々として私の手を握りしめながら離さないように話すスバル。  
この子の中で私がどういった位置に存在しているのかとても気になるのだが……聞いたらず想通りの答えが返ってきそつで聞けない。

「ち、違うつてばスバル！ わたしやフェイトちゃんが管理局の仕事で忙しいから家事をお願いするかわりに住まわせてるだけだつて！ほんと奴隷みたいない扱いなんて断じてしてないから！ ねえ、フェイトちゃん！？」

「そ、そうだよ！ どちらかというとな隷より主みたいだよ！」

確かにそれは間違つてないかも。我が物顔で家を占領してるし。

いつも間にか家を改造してコスプレ部屋とか撮影スタジオ作るうとしてたし。あの奇行に慣れてきた自分もアレだけど。

「そんな……だつたら私はなにを信じて1年間頑張ればいいんですか！」

むしろ何を信じていたのかこの娘に問い詰めたい。

「やめなさいよスバル。なのはさんたちも困つてるでしょ。それになのはさんたちは大人なのよ？ 男性と同棲くらいするわよ」

「そんな、ティア！？ ティアまでそんなこというの！ ティアだつてなのはさんたちのこと信じてたじゃない！」

「ええ、信じてるわよ。けどね……だからつてなのはさんたちに当たつたら元も子もないでしょ？」

スバルの肩に手を置きながら優しく説得していくオレンジ髪をツインテールにした女の子、ティアナ・ランスター。この娘もスバルと同様私の直属の部下にあたる。魔力は低いが冷静な判断力と視野を広くみる目があり努力を怠らない娘である。将来の夢はフェイトちゃんと同じ執務官らしいが、きつとこの娘なら立派な執務官になってくれるにちがいない。げんに、暴走しているスバルを正気に戻そうとしているし。

「だからその男性のほうをコロコロすれば私たちのなのはさんは戻ってくるのよ」

「その手があつたか！」

訂正、この娘も暴走していた。　　というかい加減私の疑惑もどうにかしてほしい。

「あのね、二人とも。　　一つだけいいかな？」

「はい、なんですかなのはさん」

「ちょっとまってください、こういうことは部屋に入った後にいうのがセオリーなんだと思うのですが……」

「うん、そんな不安そうでありながら羞恥に悶えている表情なんてしなくていいよティア。絶対には思っていることと正反対のこという自信があるから。　　あのね、私はべつに女の子だけを好きってわけじゃないんだ」

「な、なのはその言い方だと……」

「え？」

フエイトちゃんがオロオロした様子で話しかけてくる。 なにか間違ったこと言っただかな？

「なるほど、男性も女性もどちらもいけるといっわけですね。流石なのはさん……これがエースというものなんです……！」

「私勘違いしてました……！ やはり女の子もいいですけど、それなりに男性の方もお付き合いしないとダメなんです！」

「とりあえずいままでエースのなんたるかをわかってもらわれたら困るんだけど！？ 二人とも私が言ったことちゃんと理解したの！？」

質問しようとした私だが二人ははしゃぎながら席に戻る。

「ねえ、フエイトちゃん」

「うん、言いたいことはよくわかるよなのは」

顔を見合わせて、ひしつと抱き合いながら二人で呟く

「「なんでわたしたちが女の子好きになってるの……」」

こんなの絶対おかしいよ

「ただいま〜って、なんだ二人ともまだ帰ってきてないのか」

おっさんを慰めた後、速攻で帰ったのだが二人ともどうやら帰宅していないらしい。日付だって変わったというのにまだ帰ってきてないなんてお兄さん怒っちゃうぞ。

「と、いうわけで疲れているであろうあいつらを溺れさせるために風呂を沸かしました。温度は38°で二人をバカにするためにアヒルの遊び道具もいれておきます」

小さい子どもの遊び道具であるアヒルくんが何故この家にあるのかはわからないが、おおかた世間でアヒル口というけつたいなもの流行ったからだと推測する。それはともかく、目の前には熱々の風呂。何故、俺がこんなものを用意したかというと……

「まずあいつらを風呂に入れて溺れさせます。すると二人のうちどちらかが悲鳴を上げるはず。そこで俺が颯爽と登場するわけですよ。介抱という大義名分があるわけだから、世の野郎どもがうらやましくなるようなことだってできてしまっわけである。流石だな、俺」

「ただいま〜、やっと帰れたよー」

「ほんと、大変だったよね〜……。あれから職場の空気がへんな空気になるし」

「ほんとほんと」

「おー、おつかれさん」

丁度風呂が沸きあがったところで二人が帰ってきた。二人とも、いかにもぐったりとした表情をしていていい具合に弱っている。

「いまから夜食作るから、その間に風呂でもはいつてこいよ」

「うわー！ お風呂沸かしておいてくれたの！ ありがとう！」

「べ、べつにアンタたちのことが好きで沸かしたわけじゃないんだから！ ただ、暇だったから沸かしたただけなんだからっ！」

「フェイトちゃん、早く入ろう！」

「うん！」

見事にスルーされた。

さっさと風呂場に行く二人。俺はそれを見送ったあと、夜食を作るべく冷蔵庫へと向かう

「まあ、胃もたれしない食べ物だから……うどんでもいいか」

ふたり分のうどんとネギを冷蔵庫から取り出す。ネギを刻んでうどんを茹でる。とても簡単な作業のように思えるが茹でる時間で固さがかわってくるから意外に難しい。いまだに完璧なゆで時間にあつたことがないのである。

キャーーーーー！

ミクちゃんへのポエムを考えながら茹でていると、風呂場から叫び声が聞こえてくる。

これを……まっていた!!

火をとめ急いで風呂場へと直行する。あくまで人命救助である。

幼馴染が大変なことになっているんだ。俺は悪くないはず。

「どうした二人とも、倒れたか倒れたのか！ そうだといってくれ！」

ガラリと開けたその先には、高町なのはとフェイト・T・テストアツサがアヒルではしゃいでいた。……あれ？

「……なにしにきたの？」

「……知ってた？ 俺って前世アヒルだったからさ、仲間を助けにきたんだ」

「へー……そうなんだ」

「うん。あとさ……この状況でいうのもなんだけど、フェイトのブラ壊しちゃった。ごめんね、フェイト」

アイドルばりのスマイルを出したつもりが、ひょっとこのお面をはがすの忘れていたため失敗に終わってしまった。というか、フェイトが指鳴らしながらこっちをみてるんですけど。だったらこっちも貴様も胸を凝視してやるよ。そう思ったところで、なのはの顔がドアップで目に映し出された。

「なにか言い残すことある……?」

「うどん伸びるから、早めに食べてください……」

俺は目をつぶった。

直後訪れる鈍痛

叫ばれる罵声

そのすべてを受け入れながら、俺はアヒルさんを胸に抱く。頭の  
中にはそんな俺を見ながらも優しくほほ笑んでくれるミクちゃんの  
姿。

ああ……やっぱり俺にはミクちゃんが必要みたいだ。



#### 4・無職の朝は早い

『おはよう、ひよっとこ。起きて、朝だよ』

「……………んあ？……………もうこんな時間か。せつかくミクちゃんにす巻きにされる夢をみていたというのに……………」

ミクちゃんの抱き枕をそばに置きながら可愛い声でなく我がエンジンジエルの目覚ましを止める。おはようミクちゃん、今日も可愛いぜ。

「さて……………きょうはジョギングにしとくか」

クローゼットからランニングシャツとハーフパンツを取り出して手早く着替えを済ませ、玄関でランニングシューズを履き外へ出る。

うん、今日もいい朝だな。

突然だが無職の朝は早い。というより俺の朝は早い。まず起床時間からして頭がおかしいと思う。なんといつても5時起きだ。

といつてもこれにはちゃんとした理由があつてだな……………まず幼馴染の二人が6時には起きてくるのだ。仕事だとぬかしながら。

お前ら高校のときは寝坊して遅刻ギリギリだっただろうと言いたるところだが、これは成長の証なんだと思う。なのはの胸は成長してないけど。毎朝牛乳飲んでるのにな。まあそれはおいといて

……………二人が6時に起きるものだから俺は必然的に二人よりも早く起きて朝ごはんの準備や弁当の準備をしなければならぬ。ならもう少しだけ遅くおきてもいいじゃないかと思うだろ？けどさ、体動かしておかないと太ったりするし、それが嫌なんだよね。だから

らららちやっつて5時に起きてジョギングしたり散歩したりしているわけですよ。

「おつおつ……ひょっとこくんじゃないかえ……。　おはようなー  
……」

「じいさんおはよう。　そろそろ天国へのカウントダウンがはじまりそうだけど犬の散歩して大丈夫なの？」

「えーえー、これはわしの唯一の楽しみじゃけんのう……」

ワンワン！　ワンワン！

「……言ってるそばから犬逃げ出したぞ、じいさん。　じいさんが持つてるのリードじゃなくてTバックだからね」

「なんとっ！？　わしとしたことがうっかりばーさんのTバックを持ってきてしもつた！」

ばーさん無理しすぎだろ。　流石に若作りとかのレベルじゃねえよ。

「まあ、あんまり無理しないように気を付けてな」

あまり話し込んでいるのもなんなんで軽く手をあげて走り去ることにした。　じいさんはじいさんで楽しんでるようだし。

「さて、シャワー浴びて朝ごはん作るか」

適当に走って帰ってきた俺は、汗でべたべたしているシャツとハ-

パンを洗濯器にかけるとシャワーを浴びることにした。べつにシヤツもパンツもいま洗わなくても俺的にはいいのだけどなのはたちが嫌がるのでこうやって一人寂しく洗うことに。あ、なのはとフエイトの下着発見。とりあえず分泌液でもつけておくか……。いや、さすがにそれはやめておこう。本人たちが見ている前のほうが気持ちいいしな。

「それにしても弁当どうすっかな。意表をついて逆日の丸弁当にでもするか」

シャンプーで髪を洗い、リンスをした後バスタオル一枚でそう決意した。どんな反応をするか楽しみである。

「というわけで台所につきました。まずは弁当を作ります」

着替えたあと地底人と書かれているエプロンを着こなして台所にたつ俺。気分はすっかり奥さんである。

「さて……まずはなのはの弁当ですが、弁当箱いっぱい梅干しを敷き詰め中央に白米をそつと置いた愛情たっぷり逆日の丸弁当です」

作り始めて1分。これは俺の中でも最速のタイムである

「お次にフエイトの弁当ですが、ミートボールとからあげとポテトサラダにミニスパゲッティ、そしてごはんを敷き詰めます。とりあえずフエイトは太らせるために別の箱におにぎりを2つほど入れておきましょう」

作り始めて20分。　なかなかの出来ではないだろうか。

結構ポテトサラダはうまく作れたと思う。　まあ、作り方は意外と簡単です。　まず材料はジャガイモときゅうりとハムと卵。　コツはしっかりと粉吹きのとくに水分を飛ばすことと半熟卵のとりとろかんである。　これが意外と難しい。　それにジャガイモだって茹でるのに結構時間がかかるんだぞ？　お兄さんの秘密の魔法でそこは短縮できるけど。

そんなこんなで弁当を作り終わってお次は朝ごはんである。　食パンをトーストへ、冷蔵庫からバターといちごジャムを取り出す。　お次はハムと目玉焼きを作って、ちぎったレタスやスライスしたにんじんなどをいれ自家製のドレッシングできれいに仕上げたサラダを3人分テーパーの上のにせる。　ふう……お次は二人を起こしにいかないとな

「ウルフ11　目標地点へ到着した」

なのはとフェイトの二人部屋に足を踏み入れた俺は、ポケットにいれていた携帯を耳に押し当てながら届かない電波を発信する。

「というかアレだよな。　こんな姿してたらそりゃ世の人たちに女好きと誤解されるわ」

眼前で二人して抱き合って寝ている光景をみながらそう呟く。　なのはとフェイトの間で押しつぶされているウサギになりてえ。

だが、そうはいってられない時間帯になってきた。　そろそろ二人

を起こさないと大変なことになる。

「ということで、官能小説を朗読しながら二人を起こしたいと思います」

一度部屋に戻り持ってきたのは妹系女の子がのっている官能小説。これで爽やかなモーニングをお送りすることに。

「宗谷の腰がズンズンと真奈美を突いていく。『いやんっ！ 宗谷、もっとハゲしくう！』」

「……なにやってんの？」

「……朝の発声練習かな」

身振り手振りを加えて熱弁しようとしたところで、なのはから冷凍ビームが飛んできた。あまりの冷たさに息子が縮み上がる。

「まあ、それはそれとして。朝ごはんできてるからさっさと食べるぞ。そろそろ時間帯なんだし、隊長二人が遅刻なんて恰好悪いぞ」

「うん、そうするよ。ほら、フェイトちゃん朝だよ」

「ううん……もっとお願い……」

「任せろ！ 『真奈美、僕も限界』」

「いや、そっちじゃないから」

フェイトからのアンコールに応えようとしただけなのにバタなのは本を取り上げてしまった。まったく、これで参考書が一つ消えてしまった。

なのは寝ぼけているフェイトを起こすと、その場で本を破り捨て部屋から出ていこうとする　ところで振り返った。

「おはよう、今日も一日よろしくね」

「はいはい」

さて……送り出したあとは遊びに行くか

#### 4・無職の朝は早い（後書き）

僕はマヨネーズをたっぷり使います。

そういえば活動報告にパンツ更新と書くのもアレなので、略語としてパン通を使うことにします。あまり変わったようには思えませんが



「さて、二人のパジャマと昨日の服を洗濯機にかけたので、この時間を利用して家の掃除をしたいと思います」

マイクを持ちながらリポーター風に言ってみる。

「さあみなさん。現在私がいる部屋はあの高町なのはとフェイト・T・テスタロッサの部屋でございます。みてください、所せましとぬいぐるみが置いてあります。やはり女の子なんですね、とりあえずエロ本を置いておきましょう」

辺り一面にうさぎやカメ、猫に犬にカモメに白熊。どれもこれもチャームिंगな顔をしてやがる。こいつらが毎日毎日二人に抱っこされてると思うとうらやましくてしかたない。

「まあ、二人がいない間に物色するのもアレなんでさっさと掃除をしておおう」

クイックルワイパーで床のホコリを取りぬいぐるみには専用のスプレーをかけて丁寧に拭いていく。ついでに靴下などが入っている場所から黒のストッキングを拝借し、頬擦りする。その心地よさにうっとりしていると洗濯機が俺を呼んだ。まったく……可愛がってあげないとすぐ鳴くんだから。

そんなこんなで1時間30分ほどで家事を終わらせる。さてと……  
…今度こそ遊びに行くか

「それじゃ訓練終わりだよー、みんなお疲れ様」

『お疲れ様です！』

「おつかれ、なのは」

「あ、フェイトちゃん。おつかれさま」

長い訓練が終わると同時に別の仕事をしていたフェイトちゃんがやってきた。

「それでどうだったの新人たちは」

「うん、みんな光るものをもっているよ！」

まだ経験が少ないけど、きっと此処にいる新人たちは将来管理局を支える子たちになると思う。 私たちのように。

「あ、そうだ。 みんなにこれ渡すの忘れてたよ」

「なんですか！？ もしかしてラブレターですか！」

「落ち着きなさい、スバル。 まだ早いわ。 もっと好感度が上がってから……伝説の木の下で恥じらいながらなのはさんが渡しにくるはずよ。 ハア……ハア……テンション上がったわ……！」

「安心して、一生ないと思うから」

どうしてわたしの直属の部下は二人揃っておかしいのだろうか。

家には頭おかしいを通り越して狂ってる男性がいるというのに。

「それよりも、はいこれ。 今日から一年間使うノートです。 え  
っと、これはですね」

「なのはさんの手垢！」

「汗が染みついてるわ！」

「ちょっと話を聞いてっ!？」

ノートに頬を摺り寄せる二人をヴィータちゃんが後ろから殴って  
くれる。 ありがとう、ヴィータちゃん。

「こほんっ。 これは訓練のたびに感想を書いて提出するものです。  
見る人は私とフェイトちゃんとヴィータちゃんとシグナムさん。  
毎回毎回その感想についてコメントしていきます」

「なるほど、文通というわけですね？」

「なのはさん……いじらしく可愛いです……」

どういった解釈をすればそこにいきつくのだろうか。 というか、  
この娘たち絶対聞いてなかったでしょ。

「まあ、そんなわけですからちゃんと提出すること。 それでは解  
散！」

「あ! なのはさん、一緒にシャワー浴びましょう!」

「肌と肌をこすり合わせましょう！　大丈夫、なのはさんにならな  
にされても大丈夫です！」

「ちょっとまって、私の意見は!？」

「わーい、フェイトさんお昼ごはんですよー！」

「うんそうだね、キャロ。　訓練でお腹すいてるだろうからいっば  
い食べようね！」

「はい！」

私の可愛い娘であるキャロが可愛く頷く。

「あれ、なのはさんとフェイトさんはお弁当なんですか？」

「うんそうだよ。　彼が毎朝作ってくれるんだ。　これがなかなか  
おいしくて結構楽しみにしてたりして」

「そうそう、頭はおかしいけど料理は大抵できるよね」

家事もそれなりに出来るし、頭はおかしいけど。

「なのはさんのお弁当……なのはさんのお箸、なのはさんのお箸＝  
間接キス。　間接キス……！」

「ちょっとまってスバル!? なにいきなり私のお箸を舐めようとしてるの!?!」

「スバル、まだ早いわ! 食べ終わってからにしないと」

「あ、そうだった。ごめんね、ティア」

「あれ? 私には?」

なのはも大変だよ、家においても六課においても誰かに振り回されるような気がする……

「さて……とりあえずお腹すいたしお昼にしようよ! それじゃいただきまーす!」

パカッ

オープン 逆日の丸弁当

パタンッ

クローズ 逆日の丸弁当

「あの……なのは?」

「……フェイトちゃん。一応、聞いておくよ? 今日のお弁当の中身になかな?」

「えっと……からあげとミニスパゲッティとポテトサラダとミートボールだけど」

それを聞いた瞬間、なのはがものすごい勢いで携帯を取り出し誰かに電話をかけはじめた。

「ちょっと！ 逆日の丸弁当ってどういうことなの！？ なんでフイトちゃんのはちゃんとしていてなのはのは嫌がらせなの！」

「うわー、本当になのはさんのお弁当梅干しがほとんど占領してる」

「ここまでくると、中央にのせてある白ごはんが怒りを倍増させるわね」

「ちょっと聞いているの！ なんで逆日の丸弁当なのか聞いているの！ 私の質問に答えて！ って、留守電じゃん!？」

「落ち着いてなのは!?! 一人でノリッコミしてるよ!！」

怒りのあまりなのはが変になる。 というか、彼は留守電になんていれてあるんだろうか？

「ん？ もう一つ箱がある。 あ、おにぎりが二つ。 それになのはが好きな具だ」

もしかして彼かな？ というか彼しかこんなことする人いないけど、それにしても

「許すまじ……!！」

「なのはさん、私のごはんどろぞー!！」

「むしろ私をどうぞ！」

タイミングが少しだけ遅かったかも

5・たのしいお昼(後書き)

なのは (#・)

フェイト (\*、\*)

弁当を開けたときの二人の表情

## 6 おっさんで遊ぼう(前書き)

今回のお話で行われる行為は絶対にマネしないでください

## 6・おっさんで遊ぼう

「さて、俺の予想だと今頃なのはが電凸してきて留守電と会話したあげくノリツッコミをしている頃だと思う」

なんでわかるかって？　だってなのはだもん。　バタなのなめんなよ、小さいころなんか手足バタバタさせてダダこねてたんだからな。　そのたびにアメ玉あげて黙らせてたけど。　昔はね、愛玩動物みたいで可愛かったんだよ？　いや、いまも可愛いけどさ俺のこと殴ってくるもん。

「まあ、それを見越して俺は携帯を置いてきたから問題ない。　帰ったら怒られそうだけど俺のトークスキルでなんとかしてみよう。　まずは遊びにきたんだから精一杯遊ぶぞ」

少し大きな広場にきていた。　中央には噴水、そこから東にちょっといくと大きな芝生の遊び場があって、噴水の近くには他より一段高いへんな面積がある。　いまは大学生のあんちゃんたちがダンスの練習中である。

俺はそれらを横目にみながら持ってきたサッカーボールでリフティングを開始する。　コ　ンくんにも負けないぞ！

「しかしこのままりフティングというのも悲しいものだから、ここはひとつゲームをしようと思う。　ストラックアウトというものをご存じだろうか？　9つのマスを野球ボールやサッカーボールを使ってぶち抜くゲームである。　一昔前に流行ったような気がする」

かくいう俺も中学校時代にしたものだ。　　いまだ6枚抜き記録は破られていないらしい。　　いまの俺なら9枚抜きいけそうな気がするぜ。

しかし残念ながらここにはマスとなるものが一切存在しない……。　　いったいどうしたもののか。

「しょうがない、この前を通った人にぶち当てよう」

俺の餌食になった者は運がなかったということだ。　　顔がバレないようにひょっとこのお面もつけることに。

一人目……女子高生

「推定膝丈20cm、生足をいかんなく見せており寄せてあげるブラを着用しているな」

俺の透け視力により基本的な情報を得る。　　高校生というものは一生のうちで一番のブランド品であり人生の中でも輝けるときだと思っている。　　現役という肩書が大事なのだ。　　高校を卒業してしまふとどうしてもコスプレにしか見えなくなる。　　そう……なのはやフェイトのように。　　女子高生とはいわば熟したリンゴなのだ。　　アウトかセーフかギリギリのラインにいるからこそ、輝きを放つ。　　それはまさしく線香花火のごとく、消え去る一瞬を華やかに彩るのだ。

「こう書くとなのはやフェイト、はやてたちがババアだと言っているみたいに感じるがそんなことはない。　　線香花火が終わったあと

にやってくるのが打ち上げ花火だからである。いろんな人と出会い、好きな人と結婚し子どもを産み、育児をして子どもを成人になるまで責任をもって育て、その子どもの孫を抱き、孫の成長をめじりにシワを寄せながら見守り孫の成人を見届ける。それが終わつたあとに彼岸の川で待つているであろう夫の元へと逝く。お別れのときには沢山の人が涙を惜しんで泣くまいと上をみる。それはまさしく打ち上げ花火と同じじゃないか」

此処になのは達がいたのなら感涙しながら俺に抱きついてくるはずだ。残念なことをした、その一瞬ならば胸を揉みしだくことができたというのに。あ、ちなみにフェイトの胸ね。

「しかしながらさすがに女子高生に向かってサッカーボールをぶつけるのはためらわれる。もっとこう……ぶつけても怒られなさそうな人はいないものか。ん？ あそこにいるのおっさんじゃね？ いい的発見したぜ」

女子高生より右におっさんを発見した。なにやら書類を手に持っているぞ。

いや、まてよ？ おっさんって管理局員だよな、日本でいう警察官みたいなものだろ？ そのおっさんに向かってぶつけるということ、すなわち現行犯逮捕につながってしまうのではないだろうか。ただでさえブラックリストにのっている俺だ。こんなしょうもないことで捕まるのはいただけない。それにおっさんには何かとお世話になっているはずだ、そんなおっさんにサッカーボールをぶつけることなんてできるのだろうか？

「それでも 男にはやらなければいけないときがある。こんなことしたくないけど、食らえおっさん！ 死にさらせー！」







6 おっさんで遊ぼう(後書き)

／  
（  
ノ  
／  
（  
ノ

おっさんの本気走り

## 7・MとMと ときどきすと

「まさかおっさんがあそこまで速いとは思わなかった。鼻血垂らしながら全速力で走るから余計に怖かったぜ」

おっさんと嬉しくない青春の汗を流した俺は帰宅早々シャワーを浴びながら先ほどのことをふりかえる。道行く人が振り返ってただこれからおっさんの信用が下がらないことを祈る。

「さて、シャワーを浴びましたので夕食の用意でもしますか。今日の夕食はなのはが好きなものにします。でないと俺の頭からザクロが飛び出してしまっからです。ごめんねフェイト。絶対フェイトが好きなものも近日中に作るから」

案の定、携帯をみると着信が入っておりなのはのノリツッコミがはいていた。これはパソコンのなのは専用フォルダにいれておくことにしよう。

それはともかくまずは夕食作りである。愛用の地底人エプロンをつけ台所へ

「今日は薄切り肉のゆば巻きとわんこそばと煮物でいこうと思います。では助手のミクくん、説明を」

「はーい！ まずは材料の説明です！ ゆば巻きは豚でもいいのですが折角なので牛の薄切りを使用します。お酒とお塩に包むための大葉と一緒に食べるためのカイワレ大根を用意します。あ、ベツにカイワレはなくてもいいです。そしてちよつとしたスパイス

として黒胡椒やわさびをいれるのもありですね。湯葉巻きはお湯でもしゃぶしゃぶできるので、今回は豆乳でしゃぶしゃぶしましょう！豆乳は美肌効果やダイエットにもいいそうです、それと生活習慣病の予防にもなるみたいですね。ミクには関係ないですけどー！」

「はっはーミクちゃん。そんなことしなくても君は十分可愛いぜ」

「そ、そんなっ！ て、照れちゃいます……」

もちろん俺の一人芝居である。あまり料理を作っている最中に喋るのはよろしくないけど勝手に口が動くのだからしょうがない。

「さて、同時並行で煮物もやっていきますが、シンプルに大根だけにしときましよう。 ippそのことふるふき大根にするのもありだな」

ふるふき大根にするためには米のとき汁が必要なんだけどたっぷり水と少しのお米で代用しちゃうおう。

「わんこソバは二人が帰ってきてから作るとして、ゆば巻きも二人が帰ってきてから最終段階にはいれればいいからもうやることはないな。 久しぶりに靴磨きでもしよう」

たしか革靴が汚れていたようなきもするし

「というわけで玄関である。 とくになにもない玄関なのだが、靴箱の後ろに年上系エロ本が挟まっていたりする。 正直俺も取るこ

とができなくて焦っているのが現状だ」

さっさと読んでおけばよかった。

しゅこしゅここと革靴を磨きながら、ゲームの攻略法を考えていると外からふたり分の話し声が聞こえてくる。　どうやら帰ってきたようだ。

「ただいまー」

「おかえりんこ」

「ただいまん　あっ！　くくく！！」

フェイトが顔を赤くしながらなのはの胸に顔をうずめる。　フェイト、埋める人選間違えてるぞ。　あまりの可愛さに写メってしまう。　今週の待ち受けにしよう

「あ、そういえばなのは、俺の愛情弁当どうだった？」

「ごめん、嫌がらせしか感じなかったんだけど……、それより今度したらほんとうに怒っちゃうからね！」

「それじゃ明日はもっと愛情こめて縦一列にちくわ並べていくわ」

「人の話聞いてたっ!？」

「ごめん、フェイトの胸見た。　ほんとムッチリしてるよな」

見かねたなのはが手に持ったバックで顔を叩いてきた

「スーハースーハー、いい匂いだ」

「フェイトちゃん！ リセットシユ取って！！」

「うん！」

「ちょっ！？ なのはかけるとこ間違ってる！ 俺じゃなくてバツクだろ、そういうときは！？」

俺の存在をリセットしたいとでもいつのかこいつは。

「わ〜！ なのはが好きな料理だ！ やったあ！」

「へ、へ〜！ あんた、この料理好きだったんだ。わ、わたしはそんなの知らなかったし……ほ、ほんとうよ！ し、知ってたら……も、もっと早くに作ってたわよ……」

「だ、大丈夫？ 無理しなくていいんだよ？」

「……うん、僕大丈夫」

フェイトの優しさが心にくる

「ほらほら！ 二人とも早く食べようよ！」

「うん、そつだね!」

「それじゃ手を合わせて、いただきます」

「「いただきます!」」

みんなでしゃぶしゃぶすることに。

「そういえば、この豆乳にはなにか隠し味入れた?」

「俺の分泌液」

「「……」」

「いや、冗談だから二人とも咽喉に指つつこむのはやめてくれ」

おまえら管理局の看板娘なんだから。

それから今日一日のお互いのことを報告することに

「絶対おっさんは本部でも活躍できると思うんだ。 犯罪者とかバツバツと捕まえられるぞ」

「だから犯罪者の君を毎日捕まえてるんじゃないの?」

「失敬な、まだ予備軍だよ」

「ねえなのは。 私はインタビューするときなんていえばいいのかな?」

「とりあえず友達未満他人以上の関係ということにしておこうよ」

「なんで俺が報道されること前提で話し合いをしようとするの?」

報道される奴は俺から言わせれば一流に決まってんだろ。そんなへま犯すものか

「それにしても六課って明らかな人選ミスじゃね?」

「君は人生ミスだけどね」

「そのドヤ顔やめろ」

湯葉巻きを食べながらキリツとこちらをみてくるのは。ちよつと誇らしそうにしてるけど、いま俺の人生否定したということわかってるのか?

「それにしても今日は疲れたからお風呂入ってもう寝ようかなー」

「そうだね、私もちよつと疲れたかも」

「それじゃ俺は二人のベッド温めてくる」

席を立ったところで二人に袖をつかまれそのまま背負い投げさせる。疲れはどこいったんだ。

「後片付け、お願いね」

「まかせろ、舌で丁寧に舐めとるから」

グシャ

「なのはが履いているスリッパなら舐めればなのは味がするかもしれない……」

「フェイトちゃん！ 変態がいるっ!？」

「こっちに振ってこないでよ!？」

そんなに力いっぱい手で払わなくてもいいじゃないか。

「まあ、いつまでもこんな恰好だと近所に俺となのはの関係がバレてしまうのでそろそろ足をおろしてくれ」

「どういった関係なの？」

「M・Mプレイをする関係かな」

「それ成り立たないよねっ!？」

「ちなみにフェイトはSね。 自慢のザンバー俺のスイカバーを叩いてくるんだ」

「フェイトちゃん……」

「ちょっとまってっ!？ いまの話信じる要素どこにあるのっ!？」

フェイトがムキーってなってる間になのはが足を引っ込める。 パンツみえた！ パンツみえた！ 速報！ なのはの今日のパンツは水玉！

「それじゃ風呂はいつておいで。俺は片付けしてベッドの周辺に盗撮カメラ仕掛けておくから」

「片付けだけお願いね」

「ま……まかしとけ……」

「返事頼りなさすぎだよっ!?!」

一歩ごとに後ろを振り返る二人に溜息を吐きながら俺は台所へと向かう

「さて、箸を舐める作業にはいるかな」

これも立派な後片付けだと思っている。

## 7・MとMと とまよきすと(後書き)

どちらかというところ、なのはがSでフェイトがMな気がする

## 8・コイキングなのは

ピピピピピッ　　ピピピピピッ

静寂な空間に電子音が響く。

ピッ　　ピピッ

自己主張をするように鳴り響く目覚ましは誰かの手によってその主張をかき消された。眠たげな眼をこすりながら高町なのは体を起こす。栗色の髪にいちごパンツが特徴の女性である。時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊第5班に所属しており役職は戦技教導官。わずか19歳にして魔導師ランクSの優秀な魔導師であり誰もが認める管理局の誇るエースである。

「フェイトちゃん、起きて。朝だよ?」

「フェイトだと思った? 残念! ひよつとこちゃんでした!」

パキッ

「指がッ!? 指がああああああああ!」

なのはのすぐよこでカメラを回していた男性。ベッドの中だといふのに器用にひよつとこのお面をつけているこの男性は、高町なのは・フェイト・T・ハラウン、八神はやてらの幼馴染である。

黒髪で人類史上稀にみるうざさが特徴である。高町なのは&フェイト・T・ハラウンが借りた家に所属しており役職は家事をすること。わずか19歳にして二人に寄生していないと生きていけない

く、ミッドで起こる小さな事件の大半の元凶を占めているミッドが嘆くエースである。

「あれ？　そういえばフェイトちゃんはどうしたの？」

「べつの仕事だつてさ。なんでもロリコン宗教団体の弾圧に向かったとか。だから朝早くから出て行ったよ」

「へー、そうなんだ。フェイトちゃんも大変だね。それじゃ今日は一人で仕事にいくのか？」

「ああ、そのことなんだけどはやてからの伝言預かった。昼の1時から出勤だつてさ。昨日買ったゲームをしたいから朝はいきたくないらしい」

「六課は大丈夫なのっ!？」

なのはの悲痛な叫びが木霊する。

「それはともかく朝ごはんできてるぞ。今日はフェイトに合わせてサンドウィッチにしてみた」

「やったー!」

寝間着姿のまま、なのはは1階へと降りて行った。

フェイトは朝の新鮮な空気を胸いっぱい吸いながら我が家へと帰宅していた。朝早くから駆り出された仕事のほうも一時のケリはついたので自分はこうして帰っているわけだ。あの宗教団体が私をみたときに呟いた『あと10歳若ければ……』という言葉は忘れない。そんなことを考えているうちに見慣れた我が家へと到着、持っていたカギで玄関を開けリビングのほうへと顔をだす。

「ただいま、二人ともいま帰ったよ。って、どうしたの？」

「お、フェイトおかえり。サンドウィッチどうだった？」

「うん！　すごくおいしかったよ！」

「おかえりフェイトちゃん！　……そろそろ答えてくれないかな？　君」

「え？　なにが？」

「とぼけた顔しないでっ！　なんでコイキングになのはの名前をつけてるのか聞いているのっ！！」

テーブルを思いっきりなのはが叩く。フェイトはそのままなのはの向かい側にいるひょっとこのところまでいき後ろから画面を覗き込むことに

なのは / コイキング　LV31

「ぶっ！？」

「あ~~~~！ フェイトちゃんいま笑ったでしょ！」

「じ、ごめんねっなのはっ!?!」

「う~~~~！ ふんっ！ どうせフェイトちゃんもわたし同様にへんなポ モンに名前つけられてるもんっ！」

「ねえ、ちなみに私のポケモンは？」

「ピチューだけど」

「納得いかないんですけどっ!?!」

寝間着姿のままなのはが彼に抗議する。 あ、飴玉あげたら若干おとなしくなった。 もしかして不思議なアメかな？

「それよりフェイトは仮眠する？ いまだったらオプションとして俺がついてくるけど、ちなみに寝させないぜ」

「仮眠の意味を辞書で調べてきたほうがいいよ。 そのオプションはいらなかな。 う〜ん、あまり眠くもないし私もゲームに参加しようかな」

「オッケーオッケー。 ほんじゃなのはサクッと倒すからその間にとってくればいいよ」

「ちょっとまって。 いまのは聞き捨てならないかも。 なのはだつてずつとやってきたんだからね！」

「いつけー、なのは！ はねる！」

「えッ！？ えっと……こっつ？」

「なにしてんの？ コイキングに決まってるじゃん」

「だましたねっ！？」

今日もなのはのキレは健在で安心した。

「あれ？ 二人の戦いは終わったの？」

「うん、俺の圧勝で」

「コイキングを手持ちにいらてる人に負けるわたしって……」

どうやらフェイトがゲームを取りにいつている間に二人の勝負は終わったみたいだ。

「うわああああん！ フェイトちゃんあああん！」

「だ、大丈夫だよ！ 次は勝てるから！」

「わーい！ フェイトちゃんーん！」

「ちよつと、近寄らないでっ!？ いやあっ!？ 質量のある残像  
残しながらこつちにこないでっ!」

あまりの恐ろしさにフェイトは泣き目になりながら後ずさる。

「同じ幼馴染なのにこの対応の違いは大変遺憾に思います」

「妥当だと思います」

「その認識こそが間違っているのだっ! もっと二人とも俺に優しくしてくれ! パフパフさせてくれ!」

「願望が漏れてるよっ!？」

「……ごめん、なのは」

「胸みながら言わないでくれるかなっ!？」

二人で抱き合っているとその差がわかる。ミルタンクにフェイトとつけてもよかったかもしれない。

「んで、バタなのがポ モンやる気なくしたので俺とする? 大人のゲームする? つるのムチとか使っちゃう?」

「普通にパーティーゲームしよっか」

「あゝゝ! それじゃなのはマ オテニスしたい!」

なのはの提案でマ オテニスをすることに。

「あっ！」

なのは 右へ

ボール 左へ

「今度こそ！」

なのは 前へ

ボール 後ろへ

「サーブなら！」

なのは ダブルフォルト

ボール ジュゲム回収

「っ、次こそは！」

ガッ！ コードをひっかける音

ピターン！ なのはが転ぶ音

「……」

「もうやめるもん!」

「な、なのはっ!? つ、次こそはできるから! 私と一緒に手伝  
うからっ!」

「こいつスポーツゲームできなさもSランク並みだよな」

フェイトに泣きつくなのはをみながら思わずそう呟いてしまった。  
とりあえず俺はお昼の準備でもしてこようかな。

## 8・コイキングなのは（後書き）

僕は9歳のころより19歳のほうが好きなんです、なかなか賛同を得ることができません。

## 9・高町なのはの憂鬱

昼間のゲームを終えてフェイトと二人で出勤してきた高町なのははいつも通り自分の机で仕事をしていた。

「なのはさん、これお願いします!」

「はい。二人ともお疲れ様」

すると自分の部下であるスバルとティアナが二人揃って一冊のノートを持ってきた。なのはが一番はじめに訓練のときに渡した感想を書くためのノートである。ふと隣をみるとフェイトのほうにもエリオとキャラコが二人揃って出しにいつてるところであった。もともとこの感想を企画したのには理由がある。それは隊長陣からみた新人達の動きや様子と新人達が思っている動き方などをこのノートを通してみることによってちょっとした意見交換会の役割を果たせればと思つて企画したのだ。少しでも早く新人たちとの距離が近くなればと思つていたのだが、どうやらそれはなのはの杞憂に終わった。それがなのはにとって嬉しいのかどうかは別問題だが、それはさておき、なのははふたり分のノートをめくる。どんな小さなことでもしっかり答えてあげようと思いつながら。

スバルノート

『私は小さくても大丈夫ですから気にしないでください!』

ティアナノート

『なのはさん、シグナムさんに胸で負けてますが大丈夫ですか？』

「余計なお世話だよっ！？ なにこの嫌がらせ!？」

小さなところに対する励ましと質問に叫び声を上げながら、なのはは席を立つ。

「どうしたんだ、なのは？ 隊長がそんなことじゃ新人に示しがつかないぞ？」

「あ、ヴィータちゃん！ ちょっとこれみて！ 新人に示すどころか盛大に心配されてるんですけどっ!？」

「どれ……。 …… 大丈夫、なのはより小さい人もいるからさ」

「ヴィータちゃんにだけは言われたくないんですけどっ!？」

優しいほほ笑みでなのはの肩を叩くヴィータ。ヴィータは成長することがない（ひよつとこ命名・ロヴィータ）ので永遠に10歳程度の体なのだが本人はそれをポジティブに受け取ることになっている。俗にいう諦めの境地に達しているのだ。

「そっついえばはやてちゃんはどうしたの？ 見かけないけど……」

なのはは仕事場を見渡すが親友である八神はやての姿は確認することができない。六課設立のときは、『みんなと一緒に仕事せなサボってしまっ!』そう言ってここに机を置いたはずなのだが……

「ああ、はやてならゲームしてるけど？ なんでもボスが強くてなかなか勝てないみたいだな」

「いやいやいやッ！ みんなとか関係なくサボってるじゃんっ！？  
なんで、ゲーム>仕事なのっ！？」

「違うぞなのは。ゲーム>>>」「越えられない壁」>>>仕  
事だろ。はやての中では」

「なんのために六課を設立したのさっ！？」

今更ながらまともな友人が少ないことに頭を抱えるのは。

「もういや……なんで私だけこんな目に……」

「なのはさんが泣いてるっ！？」

「スバルっ！ なのはさんの涙をビンに詰めて！ 一滴もこぼすこ  
とは許させないわよ！」

「わかった！」

「それでなのはさん、どうしたんですか？ なにか嫌なことでもあ  
ったんですか？」

「現在進行形で起きてるよっ！」

「ブー！ ブー！」

そんなときなのはの携帯からバイブ音がする。名前を確認すると  
彼の名が。何事かと訝<sup>いぶか</sup>しむが、とりあえず電話に出ることに。

「はいもしもし?」

『おお、なのは。唐突にバナナ・マンゴー・ランドを作ろうと思っただけど、どう思う?』

「うるさいよッ!」

携帯を床に叩きつける。

「お、落ち着いてなのはっ!? 深呼吸、深呼吸だよっ!」

駆け寄ったフェイトに抱かれながら、なのははゆっくり深呼吸する。

「ふう……ありがとうフェイトちゃん。フェイトちゃんだけだよ、なのはの味方でいてくれるのわ」

「そんな……味方なら此処にだって沢山」

「スバル……なのはさんの泣き顔みてイキかけたわ」

「甘いね、私はイッたよ」

「どこにいるの? フェイトちゃん?」

「……ごめんね」

なにかを悟ったように笑う彼女にフェイトはそう返すしかできなかった。

リンデイ・ハラオウンは大型デパートの地下食料品売り場にきていた。隣にはフェイトがお世話している彼がエスコートするかたちで手を取っている。

「それにしてもなのはちゃん怒ってたけど、大丈夫なのかしら？」

「はっはっは、大丈夫に決まってるじゃありませんか。俺となのはの仲ですよ？ 困難な事件に立ち向かった俺たちですよ？」

「ふふっ、よく覚えているわよ。プレシア・テストロッサにシャンパンファイトしたあげくアリシア・テストロッサにまでかけてプレシアを本気で怒らせたのよね」

「あときは死ぬかと思いましたね」

「いつそ死んでもよかったのよ？」

「え」

フェイトやクロノが仕事で忙しくなっただけからというもの、彼はこうやってよく買い物に誘ってくる。大半は食材の買い込みなのだが、たまに服や下着を見に行くことも。正直なところ、彼が下着売り

場に行くと言備が最大級にまで上がるのでこちらとしては勘弁願いたいところなのだが。

「それより、クロノのほうはどうですか？ 最近会ってないですけど」

「エイミィと絶好調よ」

「明日速達でBL本を送りつけてやる」

「まって、なんであなたが持っているのか問い詰めたいのだけど」

「それは聞かないお約束で」

この子はまったく変わらないわよね。初めて会ったときもいまでも、変わることはない。フェイトやなのはちゃん、はやてちゃんが変わる中でただ一人変わることなく過ごしてきた彼はある意味凄いのかもしれない。

「ちなみに今日の夕食はなにかしら？」

「そうですねー、フェイトが好きなドックフードにしようかと」

「人の腕とは簡単に千切れるものなのよね……」

「ごめんなさいリンディさんっ！ 冗談ですから、冗談ですから腕を引き千切ろうとしないでくださいっ！？」

やっぱり、彼に限ってそんなことはないか。



## 9・高町なのはの憂鬱（後書き）

こうみえても僕はシリアスとか書くの好きなんですよね。けどこの作品ってギャグじゃないですか？　これはいかんと思ひまして、この作品でもシリアスを取り入れようと考えたんです。

けどいくら考えても、”おちんちんランド”意外のネタが浮かばないんですよ。

あれですか？　おちんちんランドでシリアスやれってことですか？　銀　だってシリアス回するときには真面目にやってますよ。それすら許されないんですか？　どうすればいいのかわかんないです。

皆様の紳士力のおかげで10万PV超えました。　ありがとうございます。　ざいます。　しょうもない作品ではありますが、クスリと笑って頂ける作品にしていきたいと思います。

## 10・白パン大好き スカリエッティ

仕事が終わりに就寝前ののんびりタイムをなのはとフェイトは女性雑誌を眺めながら楽しんでた。 これでも花も恥じらう19歳。いろいろと思うところがあるのだろう。

「あ、なのはの恋人はすぐ近くにいてもだつてよ？」

「フェイトちゃんこそ、ずっと傍にいた人だつてよ？」

「けど私たちの近くにそんな人いたっけ？」

フェイトの疑問によってなのはは考える。 すぐに浮かんできたのは神様が人類に苦しみを与えるために生み出した存在であろうひよつとこのお面を被った男だった。 のだが

「うん、ないよね」

「そもそもあれって人間なのかな？」

「分類上人間に入るかな。 残念ながら」

ずっと傍にいた……というのかもしれないが彼は恋愛対象にはいらないのでないだろうか。 だって無職だし、頭おかしいし。

「けど意外に高校のときとかモテてたよね。 バレンタインのチョコとか女子全員から貰ったって聞いたよ？」

「そのうちの9割が至近距離からチロルチョコ投げつけられたという結果だけだね。あときは別の意味で鼻血だしてたよ」

「残りの1割は？」

「遠くからアンダースローでチョコパイ投げられてたよ」

「……それバレンタインを口実に日頃の恨みを晴らしてるだけじゃないのかな？」

「少しだけ不憫に思うフェイト。」

「トントントント」

そんなとき、2階から彼が降りてくる音がした。あとは就寝だけであるがまたゲームでもするのだろうか？

「ご機嫌な蝶になったから、きらめく風によって彼女の元へといてくる」

「はいはい、捕まらない恰好でお願いね」

「まかせろ」

なのはは六課の猛攻撃によって疲弊しており、うんざりした顔で手を振った。彼も19歳だ、さすがにへんな恰好で深夜徘徊なんてしないだろう。そう思って振り向いた先に文字通り蝶がいた。

黒の触覚に黒い翅<sup>ほね</sup>。鱗粉を真似ているのだろうかところどころラ

メがはいっている。口には曲げたストローを咥え、足には黒のニ

ーソ。どっからどう見ても360°全方位で変態である。

「なんで自信満々に返事したのっ!? 捕まる気満々じゃんっ!?  
というかそれ私のニーソだよねっ!?」

「なのはただだと不公平だと思ってフエイトの髪を結びボンで蝶  
ネクタイを作ってみました。蝶だけに」

「そういう問題じゃないからっ! いままで一気に不機嫌になった  
よっ!」

「それお母さんに買ってもらったのに……。ひどいよ! あん  
まりだよ! もう捨てるしかなかったじゃないのっ!」

「そこまでいくのっ!?!」

流星のひょっとこも驚きのあまり声を上げる。フエイトは泣き目  
でなのはによしよしされている。

「もういいもん! 二人が構ってくれないから遊びにいくもん!  
このペチャパイ!」

「それ個人攻撃してるよね!? 二人じゃなくて一人に言ってるよ  
ねっ!? というかペチャパイじゃないもん! ちゃんとするもん  
!」

「っ、捕まっても引き取りにきてあげないんだからねっ!」

「はっはー!! そこらの二流と一緒にするではない!」

そういつてひょっとこは勢いよく玄関から飛び出したのだった。

「とはいったものするのはないんだよな、これが」

深夜の道を一人で歩く。歩きたびに翅がヒラヒラ、鱗粉パラパラ、触覚フヨフヨ、うざいことこの上ない。

「ん？ あそこにいるのは誰だ？」

ひよっとこからみた真正面の家の周辺で黒コートを着て天狗のお面を被った男がウロウロとしていた。じきにその男は家へと侵入し、白のフリルつきパンツを手にとって頬ずりする。どっかみても変態である。やがて何かに気付いたかのように男はそっと家を出てひよっとこのほうへと歩いてくる。

すれ違う二人

その瞬間、ひよっとこは声をかけた。

「まちな、あんだ」

「……なにかね？」

男は足を止める。　その手には白パンツ

「白パンツをとるとはいただけいな。　何故その横にある縞パンを取らなかった。　白と水色で可愛かったはずだ」

「ふんつ、縞パンだと？　君は何をいつているのかね？　そんな前時代的な遺物にまだ未練を感じているのか？」

「なんだと……！」

ひょっとこは思わず距離を詰める。　蝶ルックスで

「君のような者がいるから時代は足を前に出しあぐねているのだよ」

「ほう……その言い方。　まるでお前が時代を先取りしているかのような口ぶりじゃないか」

「当たり前だよ。　これでも私は天才なんだ。　時代を読むことなんて動作もないよ」

黒コートの男は一步詰め寄る。　白パンツを手を持ったまま

「何を言ってるんだ。　縞パンはその人自身を若干幼くさせ口りに魅せる効果があるんだぞ。　白パンツのときができると思ってるのか？」

「甘いね、君は白パンの凄さをわかっていない。　純白な白から生み出される染みがどれほど興奮するものなのかわかっていないようだ」

「ふんっ、まだそんな段階とはな。その段階ならば俺は5歳のときに幼馴染がおねしょをしたことよって到達しているぞ」

「幼馴染……だとッ!？」

男の目の色が変わり、体をプルプル震わせる。

「……君には幼馴染がいるというのか。それこそ人類が生み出した究極にして至高の存在である幼馴染がッ！ モーニングでは勝手に自分の部屋にはいつてきて寝顔を見ながらクスリと笑う幼馴染がッ！ 一緒に登下校したりお弁当を食べたりして、ちょっと可愛い子に目がいつてると膨れっ面になって怒ってくる幼馴染がッ！ 夜には夕食を作りに来てくれ、そのまま夜の営みまで逝っちゃっ幼馴染が君にはいるというのかねッ！」

「はっはっは、うらやましいか？」

「うらやましい!！」

なんとも素直な男である。しかしながら、この男が彼の現状を知ったらどんな顔をするのか……それもまた興味深いものがある。

「しかしなんだね……、ここらへんにも君のような若者がまだいるとは、世界もなかなか捨てたものじゃない」

「それは俺も思うよ。あなたのような人がいるとは、あなたとから趣味が理解できそうです」

「ふむ、まったくもって同感だ」

およそ人類の底辺のような二人がまるで人類の代表者かのように話す姿はみていて頭が痛くなってくる。

「そういえば、あなたのお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「私の名前は、ジェイル・スカリエッティだよ。みんなからはアンリミテッドデザイナー、無限の欲望と呼ばれているよ」

「なるほど、無限の性欲ですか」

「君の欲望は性の一方通行なのかい？」

およそ正解とっていいのではないだろうか。

「して、君の名前は？」

「俺は正義のヒーローですからね。名前は伏せています、みんなからはひよっこと呼ばれていますね」

「ひよっことくんか。それではひよっことくん、ともに道を極めていこうとではないか」

「ええ、あなたとなら極められると信じています」

そういつて、二人は固い握手を交わす。決して途切れることのない、消えることのない、男と男、変態と変態が交わした約束であった。

「よかったな、ひよっこと。お前にも友達ができて」

「それに趣味も合ってるからな。さて、今日は思いもよらない収穫もあったし俺は帰ることにするよ」

「そうかそうか、なら ちょっと交番でお茶でもせんか？」

「おっさんって忍びの家系だったっけ？」

『はい、もしもし。 高町ですけど』

「あ、なのは？ 俺だけど……」

『ん？ なんで家の電話？ って、携帯置いていったのか。 それでどづしたの？』

「いや〜……うん。 大変言いにくいことなんだけどさ、 交番まで迎えに来てくれないかな？」

『ちよなひ』



「どうもうちのバカがご迷惑をおかけしました」

高町なのは目の前にいる男性に深々と頭を下げた。連絡がきてから1時間。本気で来なくなかったのだがもしこなかったら交番の人にどれだけ迷惑をかけるか分かったもんじゃないので、嫌々ながらも引き取ることに。ちなみに水色の短パンに白のTシャツ姿である。

「いやいや、こちらで慣れたもんですからね。ただもう少しおとなしくなってくればこちらとしてもありがたいものですよ」

「とか言っちゃって、本当は俺と遊ぶの嬉しいんだろっ?」

「黙ってて」

「ぐふうっ!?!」

なのはのヒジがひよっとこのミゾに入る。体を前に傾けながら必死に酸素を取り込んでいる幼馴染を冷たい目で見ながらもう一人捕まっていた人物の所へと向かう。

「あの〜………すみません。私の幼馴染がそちらを巻き込んでしまったようで………」

「いえ、こちらでドクターがそちらに迷惑をおかけしたようで………本当にすみませんでした」

「まともだっ! まともな人にやっと出会えたような気がするっ!」

「？」

女性の対応になのはは感動して手を取る。 目にはすこしだけ涙を浮かべていた。

「あ、あの……何があったのかわかりませんが、その……頑張ってください。 えっと、これも何かの縁ですし、お互いの連絡先でも交換しますか？」

「是非！」

嬉々として携帯を取り出し互いの連絡先を交換する。

「え〜っと、ウーノさんですか。 なんだか知的な名前ですね」

「ふふ、そちらもなのはとは可愛らしいお名前ですよ。 あなたにピッタリな名前ですね」

「当たり前ですよ、なのははコイの王様になるほどの素質をもっていますからね」

「話に加わってこないですよ！？」

「いや、おびじりさん」

「後で付き合っただけだからっ！」

「そんな……こんなところで告白なんて……」

「どんな思考回路してたらそうなるのっ!？」

いつきにペースを乱され憤慨するなのは

「それよりスカさん大丈夫なんですか？　なんかひどく打ちひしがれてるんですけど」

『……せつかく取ったパンツなのに……ウーノ、なにをしてくれるんだ……』

「気にしないでください。それとパンツのほうはこちらで弁償することになりましたので」

スカリエッティは泣きながらその場に立つ

「ひよつとこくん……今日はもう立ち直れそうにないから話はまた後日にしよう……」

「お……おっ」

ひよつとこが軽く引くくらい意気消沈しているスカリエッティはウーノと呼ばれた女性に手を引かれながらその場を後にした。

「それじゃ俺らも帰るか」

「とりあえずニーソは弁償してよね？」

「わかったよ。それじゃこのニーソは俺が責任をもって処分してくよ。……なのはニーソ……ハア……ハア……」

「もう嫌だよ、この幼馴染っ!？」

きっかりニートを回収しながらなのはは交番の前で叫ぶのだった。

10・白パン大好き スカリエッティ（後書き）

スカさん書いてて楽しいです

## 11・円環の理に導かれたガジェットドローン

「あ、スカさん？ どうしたのいきなり電話なんかしてきて？」

『うむ、ちよつと遊びにこないかと思つてさ。君が喜びそうなものがたくさんあるぞ』

昼も少しばかり過ぎたころ、友人であるスカさんから電話がかかってきた。内容は自分の家に遊びにこないかという誘いであるのだが、いまからエッチなビデオを視聴したいので丁重にお断りをすることに。

「あゝ、ごめんね。いまから大事な用事があつてだな」

『その用事とはよもやエッチなビデオを視聴することではないかね？』

「スカさん、エスパーになれるよ。アンタ」

『ふつ、君の思考回路からすればそんなことだろうと思つていたよ』  
どうやらスカさんには俺の思考回路がわかるらしい。普段幼馴染たちから頭がおかしいと言われている俺だが、本当はあいつらのほうがおかしいのではないか。

『まあ、そんなエッチなビデオよりか面白いものがみれるから期待するといい』

そう言つて、スカさんは電話を切った。

「いやいや、スカさんの家の場所わからないって。……しょうがない、全知全能森羅万象の理を操るGoogle先生で調べるか」

「すみませーん、スカさんに御呼ばれしてきたんですけどー」

「はい、お待ちしておりました。こんにちは、ひよつとこさん」

「あ、ウーノさん」

先生で調べること10分、あっさりと場所が見つかったのでバイクを飛ばしていくことに。これでもバイクの免許持つてるんだぜ？ おっさんはねたりしてるけど。華麗にキリモミしながら飛んでいくおっさんはなんでいまも生きてるのか不思議でたまらない。

そして俺のことを出迎えてくれた女性はウーノさん。とっても優しくいい人みたいだ。(なのは談) ただ、こういう人ほどベツドで乱れると凄かったりする。



「よくきてくれたね、我が友よ。それにしてもよく来られたね。家の場所を教えてないというのに」

「Googleで調べたよ」

「家の情報ダダ漏れではないかッ!？」

なにやらスカさんが慌てた様子でパソコンにつけ、何かを操作しはじめた。案外せわしない人なんだな。

「それでスカさん、なにをみせてくれんの？もしかしてあの秘蔵のエロ本のこと？ だったら持って帰るからもういいよ」

「待ちたまえ、あれは私の最高に抜けるものなんだ。返してくれないか？」

「床オナでもしとけ」

ウーノさんとスカさんができると知ったいま、俺はスカさんに容赦などしない。つい先日男と男の約束をした気がしないでもないけど。

「こっちはエッチなビデオ見ながらなのはやフェイトの下着を嗅いで自慰をするという大切な用事があるんだぞ」

「君とあの娘がまだにあんな関係でいられるのかがとても不思議なのだが」

「普通ですとなのはちゃんのほうが縁を切ってもよさそうですね」

「二人に寄生しないと生きていけないからな。二人ともなんだかんだで俺を見限れないんだよ。どうだ、うらやましいか？」

「誇ることではないぞっ!？」

「あなたのためにマダオという言葉がある気がします」

マダオ「まるでダメな男

「ま、まあ、いいだろう。それで今日君を呼んだのはほかでもない。これを見てくれないか？」

「ふにゃちんですね」

「そこではないわっ!？」

そういつてスカさんは何かのスイッチを押した。すると大きな鉄の扉が開けられる。どうやら格納庫のようだ。ちょっとワクワクしながら中をのぞいてみるとそこかしこに機体があった。なんだこりゃ？

「驚いたかね？ これはガジェットドローンといってね。私が可愛い女の子を盗撮したいがために作った機体だよ。完全ステルス製で、どんなところでも侵入できるよ」

変態に技術力をもたしたらここまでのものが完成するのか。

格納庫自体がとても大きいので数も尋常じゃないほど多い。

「うっわ、ちょっとこれ面白そうじゃん！ スカさん遊ばして遊ばして！」

「あ、これっ！ こころへんには緊急用に自爆スイッチが置いてあるのだからそこらへんを変に触ったら……」

ポチッ

ゴゴゴツゴゴゴツゴゴゴツ！　　ガジェットたちが自爆する音

「……」

「残念だけど、ガジェットたちは先に逝ったわ。　円環の理に導かれて……」

「導いたのは君だろうっ!？」

スカさんが泣きながら訴えてくる。

「どうしてくれるのだっ！　私が研究に研究を重ねて作った可愛い子供たちを壊してくれて！」

「まあまあ落ち着けよスカさん。　ほら、エロ本やるからさ」

「それはもともと私のだろうっ!？　なに君が家からもってきたみ

たいになってるんだっ!？」

「オーケーオーケー、かわりに俺が地道に盗撮した秘蔵のファイル  
をあげるからそれで許してくれよ」

「……さっきの件は見なかったことにしよう」

流石スカさん、話の分かる人だ

「あ、もしもし? 警察ですか? ええ、ここに二人ほど変態が  
いるので逮捕をお願いしたいのですが……」

「「やめてくださいっ!?!」」

ウーノさんが連絡した直後、おっさんがものすごい速さでこちらに  
向かってきた

「ええい、最終防衛システムはどうなっているんだっ!?!」

「スカさん、おっさんの前ではそんなもの無意味に等しいっ! こ  
こは自力で逃げるしかないぞっ!」

「化け物にもほどがあるぞっ!?!」

「おいっ!?! おっさん多重影分身してないかっ!?!」

多重影分身をしながら俺とスカさんを追い詰めるおっさん。 この  
人は管理局の影のEースと呼ばれているに違いない。

11・円環の理に導かれたガジェットドローン（後書き）

次話はちょっとシリアス風味にしていこうと思います

## 12・墓前に捧げる一つの酒

カタカタカタ

「……………」

カシヤカシヤカシヤッ！

「……………」

カシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤッ！

「ティア、フィルムなくなっちゃったよ？」

「え？ もうなくなったの？ ちょっとまって、替えのフィルムあげるから」

「それより二人とも仕事してよッ！？ なんで上司の私が仕事してる横で平然と写真撮ってるわけっ！？」

「なのはさん！ その表情いいですよ、もう一枚！」

「なのはさん、こっちにもお願いします！」

「フンガーッ！！」

なのはが両手を上げて猫のように威嚇のポーズをとる。 今日も六課は平和である。

それを一番遠い席からオレンジジュースを飲みながらみているのは六課の部隊長である八神はやて。高校時代に、ひよつとこと色々やらかした伝説がある女性だ。はやては横でペロペロキャンディを頬張っている自分の家族であるロリっ娘ヴィータに話しかける。「そういえば、スバルはなのはちゃんに助けられたからあんなに慕ってるのはわかるけど、ティアナはなんであんなに懐いとるかしつとるっ?」

「いや、全然。大方なのは萌えとかの狂信者じゃない? ほら管理局にもいるし」

「ああ、そういやおつたな、あの変な団体。絶対に接触することなくなのはちゃんの危険になる存在であるう者たちを排除する、あの意味管理局の負の遺産やな。けど、おかしいでアイツが排除されてないやんか」

「アイツはそんなものを超越する存在だからな」

「流石はミッドが嘆くエースだけある」

思い浮かぶのはなのはのパンツやフェイトのブラに命をかける男の姿。

「それにしても気になるな……」

はやてはオレンジジュースを飲み終わりながら一人顎に手をおいた。

「いやあああああッ!? ちょっと、それ私のリップ!?!」

「か、間接キスに……！」

「私が左でスバルが右だからね」

「まあ、楽しそうだなによりやな」

はやては眼前で繰り広げられる光景を見ながら彼に送りつけようと写メをとった。

翌日

ティアナ・ランスターは一人なのはを待っていた。今日の服は黒の服に黒のタイトスカートというおよそ六課では似つかわしくない服装である。若干緊張気味に自分の上司を待つティアナのもとにコツコツと一つの足音を響かせながらとある人物がやってきた。

「あ、ティア。きょうは早いねって……その服装は？」

「あ、なのはさんおはようございます。その……今日はどうしても外さない用事があった」

そこまで言うとなのは何かを思い出したような顔をして、納得したように頷く。

「そっか……月日が経つのは早いね。うん、わかったよ。あとで私も行くからお兄さんにはよろしくね?」

その優しいほほ笑みがティアナの胸に浸透して、ゆっくりと広がる。そんな感覚を胸に抱いたままティアナは一礼して六課を後にした。

タクシーで目的地に着くまでの間、ティアナは昔を思い出す。自分が変わった日のことを、なのはに出会った日のことを、そして兄の親友と名乗った男が現れた日のことを

兄が死んだ

それは小さな幼き日に起きた突然の出来事だった。

息を切らせながら自分に報告を告げた人の胸倉を掴んだのは覚えて  
いる。そして変わることはない情報を前に崩れ去ったことも覚えて  
いる。そこからはまるでタイムワープしたかのように一瞬に何  
もかもが過ぎていった。

「おにいちゃん……」

ティアナは知らず知らずのうちに兄の名前を呼んだ。しかし墓の  
中にはいつている兄は可愛い妹の声に反応することはない。どん  
なに呼んでも叫んでも自分が狂ったところで、兄ティード・ランス  
ターが殉職したという事実はかわることはないのだ。

空は兄の死を悲しむかのように嘆くかのように泣いていた。自分  
の頬から伝わる雫が雨なのか涙なのか、もう判別できないほどだ。

ティアナが悲しみに打ちひしがれているとき、後ろから声が聞こ  
えてきた。

「情けない」

その一言で関を切ったかのようにさまざまな人たちが兄に言われも  
ない罵倒を شدした。なかには諫めようとした者もいたが、しか  
しながらその全てが無駄に終わる。腹が盛大に出たいかにもな男  
性はその全ての言葉をかき消すのだ。ティアナは幼いながらも悟  
った。この人がこの中で一番偉い人なんだろうと。誰もが彼に  
逆らえない。場を収めようとした男性もいまは黙って唇をキュッ  
と結んで耐えているだけであつた。

世の中は不条理だ

ティアナはそう思った。

そんなとき、やけに間延びした声が辺りを支配した。

「あ、すいませ〜ん。 ちょっと通してください。 あ、ダメツ！ そんなとこ揉んだらアヒンツ！ おっさん、いい趣味してるじゃねえか……。 なかなか受け入れられない道だけど頑張れよ」

「揉んどらんわ！？ いまの一瞬で私の地位を落としたことがわかってるのかね！？」

恰幅のいい男性がなにか抗議するが少年はどこ吹く風で笑っていた。端正な顔立ちの少年である。

「よお、ティード。 期末試験受けてる間になに死んでんだよ、ダッセーな。一緒に酒飲める年齢になるまで待ってくれるんじゃないのかよ……」

それはそこにいるもの全員を驚かせる言葉だった。

少年は右手で持っていたウイスキーを開け墓に上からかける。ドボドボと音をたてながら落ちる酒は処理する者が誰もおらず地面へとゆっくり浸透していく。 やがて半分ほど減ったところで少年は注ぐのをやめ、かわりに自分があお呷り

「おえツ！ 俺酒飲めないんだ……、おじさんその服かして……」

「ま、まちたまえっ！？ もう少し我慢するんだ、すぐにエチケツ

「ト袋をもってくるから！」

「もう無理……」

オロロロロロロロロロロロロロロロロッ！

恰幅のいい男性の服の中にむかつて盛大に吐いた。

それからは阿鼻叫喚の図であった。男性は急いで帰るし、それに付き従う形で参列者は帰って行った。何人が貰いゲロした人もいた。

「さて……スッキリした。 土郎さん、もっと度数が少ないのくださいよ……」

「あの……」

「ああ、こないほうがいいよ。俺ゲロったから、臭いきついと思うし。 それよりそこのおっさんは帰らなくていいの？」

少年が問いかけた先には、先程一人だけ場を鎮めようと頑張っていた男性がさつきと同じ位置にかかわらず立っていた。

「此処に市民がいる限り、俺はこの場を動くつもりはない。 それより水をやるから口をゆすげ」

「おっさん気が利くじゃん」

「おっさんじゃねえよ、まだ若いに決まってるだろ」

やがてこの二人がミツドの名物追いかけっこの主役を演じる二人になるのだが、それはまたの機会のお話にでもしよう。

「それじゃ未成年の飲酒も見逃してくれ」

その言葉に男性は答えない。 答えることができない。 少年もそれをわかつているのか笑いながら楽しんでいるようだ。

「あの……!」

「ん？ お、すまんすまん。 つい話し込んだじゃった」

少年はティアナの頭に手を乗せる。 そして子どもをあやすようによしよしとする。

「俺はティードにお世話になった身でさ。 ビックリしたぜ……いきなり亡くなるなんて」

「殉職だ。 違法魔導師との交戦でさ」

「そっか……」

「ちなみにどんなお世話になったんだ？」

「パンツ盗んだときにちょっと」

「お前これ終わったあと、交番までこい」

「そんなあっ!?!」

それは墓前で繰り広げられるコント劇、観客はティーター人だけ。

やがて少年は墓の前にどっかりと座りこむ

「なあ、嬢ちゃん。お兄ちゃんは好きか？」

「……はい」

「そっか」

隣に座ったティアナは小さく答えた。

やがてぐすぐすと小さな嗚咽が辺りを支配する

「悔しいか？ 大好きなお兄ちゃんがあんなに言われて」

「悔しいです……！ ものすごく！ お兄ちゃんは、優しくて強くて！ 私の憧れの人で……」

「俺もだよ。あそこでおどけてなかったらあいつらぶちのめすところだった。でもさ、そんなことティータは望んでいないんだよな。それで、嬢ちゃんはこれからどうすんだ？ 言っとくが、俺が引き取るなんてエロゲ的な展開にはならないからな。そんなことしたら、俺が幼馴染に殺される」

「……私は一人で生きていきます」

「金は？」

「なんとかします」

「一人はさびしいよ?」

「大丈夫です」

「今日のパンツの色は?」

「おまわりさん、この人です」

「おう」

「冗談ですからっ!?!? 手錠取り出さないでくださいよっ!?!?」

少年は慌てたように男性を静止させる。

「私……」

「ん?」

「私、大きくなったら管理局に入って……お兄ちゃんをバカにした人達を見返したいです……! 執務官になって……見返したいです!」

ポロポロ泣きながら、ティアナはふたりの前で喋った。

「魔力とかまったくダメだけど、それでも見返してやりたいです!」

「いい心意気じゃねえか。 だったら俺が天才に勝つ方法を教えてやるよ」

「……え？」

「天才つてのは99%の努力と1%の才能で成り立っている。それに引き替え凡人つてのは100%の努力で成り立っているものだよな」

「……そうですね」

「だったら、120%の努力をすればいいだけなんだよ。10%の才能をもつ奴には200%の努力をすればいい。50%の才能をもつ奴には1000%の努力をすればいい。100%の才能をもつ奴には10000%の努力をすればいいのだけの話なんだよ。理論上はこんな簡単なことなんだ。単純明快、ゆえに難しいんだけどな。そもそも上限が100%なんて誰が決めたんだよ。そんなもん100%までしかできなかった奴が決めたことだ。俺はそんなもの認めねえよ、そんなクソみてえなくならないものに自分の尺度を合わせる気はさらさらねえよ」

それはおどけることが得意な少年が見せた珍しい姿であった。

「まあ、それを嬢ちゃんができるかどうかは別問題だがな」

いつものように肩をすくめて、ちよつと挑発する。

「できますー!」

その挑発にティアナは大声で宣言した。少年がニヤリと笑う。そんなとき、遠くのほうで少女の声が聞こえてきた。

「あ、見つけたよ俊くん。もうなのはケーキだけタバスコ味に

したでしょっ！ ……っ、これは」

「よお、なのは。前に話しただろ？ ティーダさんのこと」

たったそれだけでなのははすべてを悟ったように深く頷いた。

「そっか……大変だったね」

「へっ……」

なのはは少年の傍らにいたティアナをそっと抱きしめる。それはまるで優しい母親に抱かれたときのように暖かった。なのはは抱きしめたまま、そっと自分のもっていた傘をティアナに渡す。

「風邪引いちゃうから、ね？」

微笑んだ後、男性の元へと向かったなのはは敬礼しながら喋る

「時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊第5班 一等空尉の高町なのはです。故人の死因及びお名前を教えてください」

「ハッ！ 時空管理局 首都航空隊 一等空尉 ティーダ・ランスターであります。死因は違法魔導師との交戦による殉職であります。なお、犯人は捕まった模様です」

「そうですか……ありがとうございます」

なのはは頭を下げてお礼をいうと、墓へと向き直る。

そして声高らかに宣言した

「勇気ある管理局員！ ティーダ・ランスターに敬礼！」

「……え？」

「あなたの勇気ある行動を忘れません！ あなたのおかげで沢山の市民が笑顔で日々を暮らせます！ ほんとうに、ありがとうございます！」

少年が少女が男性が、自分の兄の墓に向かって真剣な表情で敬礼する。

そのことが嬉しくてティアナ・ランスターは先ほどとは違う涙を流していた。

あれから10分後、二人が帰る時間がやってきた。

「それじゃ、ティアナちゃん。ティアナちゃんがくるの楽しみにしてるからね？」

「あの……」

「ん？」

「ティアアって呼んでくれませんか……？」

モジモジと恥ずかしそうに眼をしながらもまっすぐとなのはに言うていくる

「うん！ それじゃバイバイ、ティア」

なのははひと撫でて立ち上がった。傍らには少年が、ニヤニヤみながらティアナをみていた。

「お前つて、天然ジゴロにもほどがあるよな。まあ、それはさておき嬢ちゃん ガツカリさせんなよ？」

ニヤリと笑いながら少年は少女とともに、一つの傘を使って帰って行った。

これがティアナ・ランスターの記憶

全てが変わった日の出来事である

「お客さん、到着しましたよ？」

「あ、すみません」

過去を振り返っている間にどうやら目的地にはきたようだ。　テイアナはタクシーを降りながら思う。

初恋の人は？　そう聞かれたら高町なのはと自信満々に答えるだろう。

一番の親友は？　そう聞かれたら恥ずかしながらもスバル・ナカジマと答えるだろう。

一番会いたい人は？　そう聞かれたら兄のティード・ランスターと瞳を潤ませながら答えるだろう。

では……一番気になっている人は？　そう聞かれたらティアナは、思案顔になりながらあの日に会った少年と答えるだろう。

あれから一度も会っていないのだ。　しかしながら毎年毎年、ウイスキーと花が墓前に置かれているところからみると毎年来てくれることはわかる。

コツコツコツ

墓への道を歩き、もうすぐ兄の墓が見えてくるあたりから男性の声が聞こえてきた。

何事か？　そう思いながらティアナは少し足を速めたどり着いた先には

「悪霊退散ッ！　悪霊退散ッ！」

ひよっとこのお面を被った男性が兄の墓に向かって塩を投げつけて

いた

「なにやってるんですかー！ー！ーっ!?」

「おうわっ!?!」

男性は驚き大きくのけぞる。 ティアナは駆け寄り胸倉を掴みながら問いただす

「人の兄のお墓でなにしてくれてるんですかっ! 訴えますよ!」

「ち、違うんだよっ! スカさんから貰ったスカウターで悪霊がみえたから俺が退治しようと思って」

「その前に私があなたを退治しますよっ!」

スカウターを取り上げながらティアナは睨みつける。

「ビックリした〜……嬢ちゃんと鉢合わせするなんて」

「え?」

小さくつぶやいた声をティアナは聞き逃さなかった。

「あ、俺そろそろ行かないと。 スカさんとマ オカートする約束なんだよね」

「……へ?」

男性は慌てたように早口でそうまくしたてると、スルリとティアナ

から抜け出し来た道に戻る　　寸前でふと何かを思い出したように  
振り返る。

「嬢ちゃん、どうだ？　あのとときと比べると？」

心配するような挑発するような声に先ほどまで振り返っていた過去の  
少年と重なった。

いまでも少年は心配しているのだ。　きっと、これからも心配する  
のかもしれない。

だからこそ　　いまの自分がどんな状態にいるのか、どんな気持ち  
を持っているのか、この心配性な少年に伝えよう

「はい！　とつても幸せです！」

兄は失ってしまったけど、かけがえのない友と、大好きな人と一緒  
にいる。

そんな私はいま幸せだと実感できる。

「そっか。　まあ体のほうははまだガツカリボディだな」

「なっ！？」

少年から青年へと姿を変えたあの人は、そう笑いながら颯爽と私の  
前から姿を消した。

「なんか……かわってないなあ」

「あれ？　ティア、まだしてなかったの？」

「あ、なのはさん！」

青年が消えたところから、大好きなのはさんが顔を出す

「えへへ……はやてちゃんが体動かしたいから、代わってほしいって頼まれてさ」

「はやてさんも凄い人ですよね」

「ティア、世の中にははやてちゃんよりヒドイ人がいるんだよ？」

「あつ……そうなんですか」

というかこの人、さらりと幼馴染をヒドイ扱いしなかった？

「それより、ティードさんがティアの報告を聞いたそうにまってるよ」

「あつ、そうでした！」

そうしてお墓の前でなのはさんと二人手を合わせる。

お兄ちゃん、お元気ですか？

私は元気でやっています。　かけがえのない親友と、大好きな人。

厳しくも私を支えてくれる人達に囲まれて執務官になるべく勉強中です。　いまはまだ、経験も技術も足りませんがいつか立派な執務官になりたいと思います。　だから、だから安心してください。

あなたの妹は、10000%の努力で頑張っています

カランッ！

そのときティアナの耳には確かに聞こえた。

ウイスキーをいれたグラスに浮いている氷が溶けた音

青年が墓前に捧げた一つの酒の音、そこから嬉しそうにはしゃぐ声  
が。

12・墓前に捧げる一つの酒（後書き）

読了時間もいい具合なのでこころで一つ真面目な話を

### 13・六課へおでかけ！

『ユーノ、飯食い行こうぜ！』

『うん……行きたいけど仕事で忙しいんだよねー』

『まじか……お前が欲しがってたケモナー御用達の写真集を手に入れたんだけど』

『命に代えても時間を作るっ』

「さすがユーノ、話しの分かるやつが友人で助かったぜ」

なのは達が仕事にいつている間に、暇だったのでユーノとメールすることに。ユーノは管理局の無限書庫で働いているエリートだ。そして俺は自宅警備のエリートだ。

「ひょっとこ君、ユーノ君とはどのような人なんだい？」

「え〜っと、ケモナーですね。小さい頃に俺が色々調教してたら変な方向に進んでました」

「ふむ……なかなか興味深い」

家に遊びにきていたスカさんがお茶を飲みながらそう呟く

「というか、スカさんは何しにきたの？ 言っとくけど、なのはのパンツとかフェイトのブラは俺のだから渡さないよ？」

「いまのセリフがどれほど矛盾するセリフかわかっているかね？」

「ドクター、人のこと言えませんか？」

スカさんの横で紅茶を飲んでいたウーノさんが冷ややかな声で言うてくる。 どうしてスカさんにはウーノさんのようにきれいな人が振り向いているのに俺の場合はなのはとフェイトに魔力弾を撃たれているのだろうか。

「それにしても暇ですね」

「暇だね」

掃除も洗濯も終わったのでやることがない。 ポ モンのほうもあまり進め過ぎると二人が怒るし。 はっはっは、可愛いやつらめ。俺がネタバレしまくったせいだろうけどな。 そういえば、フェイトにネズミをペンキで黄色にしてピカチューと嘘をついて誕生日プレゼントにあげたことがあったな。 バレてリンディさんにフルボッコにされたけど。 あまりにもボコボコにされたんでクロノは怒る気がなくなって逆に介抱してくれたっけ。 誕生日といえばアシだ。 なのはの誕生日ケーキにオリーブオイルかけまくって出したら美由紀さんが横から掠め取った事件もあったな。 あれ取った美由紀さんが悪いのにボコボコにされたし。

「……おれ、ボコボコにされた記憶しかないんだけど」

どうなってんだ、俺の記憶

「お暇でしたらなのはちゃんが務めているという仕事場に行かれては？」

「それだッ！！」

ウーノさん、ナイスアイデアですよ！　いまのいままで気付かなかったけど、俺はなのはやフェイトの仕事場に行ったことがなかった。これは……幼馴染として行っておく必要があるのではないだろうか！！

「そうときまれば早速電話しよ」

携帯を取り出しはやてに電話をかける。

『ぬーべんどらすていーら？』

「あいぬすとんぺりいーや」

『久しぶりやな、宇宙一のバカ』

「久しぶりだな、銀河一のアホ」

「いやいや、まちたまえっ！？　その前の不思議な呪文はなんなんだっ！？」

隣で聞いてたスカさんが指を突き付けながら問いただす

『ん？　なんや、誰かおるんかいな？』

「んー、友人がな」

『どんな関係なんや？』

「なのはとフェイトの関係かな」

『それは大変やで』

「いったい、はやての中であいつら二人の関係はどうなっているんだらうか？」

『それにしてもどうしたんや？　うちいま仕事してんねん』

「はやてが仕事してる……だっ！？」

「おいおいおいおいおい、冗談は変態性だけにしとけ。　部隊長が嘘なんてみつともないぞ？」

『ほんとうにしてるんやっで。　シグナムの喘ぎ声を編集集中や』

「zipでくれ」

『だったらなのはちゃんとフェイトちゃんのパンチラ画像と交換やな』

「くっ……！」

「あの二人を人質にとるとは……いい度胸してるじゃねえか……！」

「あの……ドクター。　何故彼がそんな画像もっているのかは訊いたらいけないのでしょうか？」

「彼だからだよ」

その二人、うつさい。

『まあ、シグナムの喘ぎ声はちゃんと送るで。それよりどうしたんや？ 捕まったん？』

「お前らつて、俺見るたびにそれ聞くよな。そんな頻繁に捕まるわけないだろ」

といいつつ、この頃のおっさんとの勝率はそこまで誇れるものじゃないのが現状だ。 どうしたものか。

「まあいいや。 いやまあさ、今日友人と六課に遊びにいこうと思ってるんだけどいいかな？ ちょっとサプライズ的な感じにしたい」

『サプライズ？ どんな感じ？』

「俺がニップレスだけ装着した状態で登場するとか？」

『うちは友人を一つなくすんやな……』

「一つと言ってる時点で友人のカテゴリーから逸脱してるだろ」

『性奴隷？』

「いやらしい牡犬ですっ！ 思う存分ぶってくださいっ！」

まあ、なんとか六課へ行く許可は下りましたとさ。

八神はやては耳から携帯を離し終了ボタンを押した。

「ふう……久しぶりやなあ、アイツと会うんわ」

「ただいま〜！ ケーキ買ってきたよ〜！」

「おっ？ なのはちゃん、ちょうどいいところに」

ジャンケンで負けてケーキを買いに行っていた高町なのは他多数が帰ってきた。ちなみに六課は訓練0.5割、あとは好きなことと適当に書類仕事をする事になっている。何かがおかしい気がするが現状で外からの不満も内からの不満もないのでこれでいいだろう。そのかわり一人一人が訓練してくれるのはやフェイト、ヴィータやシグナムに質問しているようだし、なんとかなるだろう。

「ん？ どうしたの？ はやてちゃんが頼んだパフェならスバルがたべちゃったけど……」

「スバル、四つん這いになりいや」

「なにする気ですかっ!？」

愉悦を含んだ表情のはやてを前にしてスバルは恐怖を覚えなのはの後ろに隠れる。

「助けてくださいなのはさんっ!」

「そついいながら胸揉まないでよっ!？」

わしづかみしようとするスバルの手を振り払う。

「おゝい、なのは。あとがつつかえるから早く入ってくれよ」

「あ、ごめんね。 ヴィータちゃん」

後ろのヴィータに言われてようやく部屋に入る。その後ろからゾロゾロと新人や副隊長陣も。まるでカルガモ隊みたいだ。

全員が入って、席に座りシヤマルとなのはで人数分の紅茶を配り各々選んだケーキを食べ始めたところで、なのはがはやてに先ほどの続きを促した。

「それではやてちゃん。 さっきの話なに？」

「いやあね、なのはちゃんとフェイトちゃんに会いたって人がいるんや」

「え？ 私にも？」

チョコレートケーキをエリオとキャロにあげていたフェイトが驚きながら振り返る。

「そうそう、ちなみに男性やで」

「男性ですとっ!!」

男性の単語を聞いた瞬間にスバルとティアが席を立つ。

「ダメです、純粹で純白なのはさんに男性なんて似合いません！」

「そうですね、なのはさんはランスターの名を継ぐんですから!!」

「継がないよっ!?! いつの間に決まってるのっ!?!」

「そ、それで……なんで急に?」

フェイトが少しだけ視線をキツくしてはやてを射る

「いや〜……うちは拒否したんやけど相手側が聞かなくて……うちの権力ではどうすることもできなかったんや……」

「はやてちゃん……」

「はやて……」

顔を伏せるはやてになのはとフェイトは近づいてそっと抱きしめる。

「ごめんな、二人とも……」

「大丈夫だよ。相手側には私とフェイトちゃん断るから」

「うん、大丈夫だよ」

「そうですね、なのはさんに何かしたら私とティアがぶちのめします!!」

その瞬間、部屋にいる皆の心は一つになった

「ちなみに、その人の職業はなんなの？」

「やっぱり、はやてより権力強いならそうとうだよね……」

その二人の問いかけにははやては軽く涙ぐみながら答えた

「性奴隷や」

「「それ職業っ!?!」」

その瞬間、部屋にいる皆の心は恐怖でいっぱいになった。

13・六課へおでかけ！（後書き）

ひょっとこはついに職に手に入れたのだった

## 14・コイキングの本気

機動六課　それは八神はやてがあらゆる知人の後押しによって作られた少数人数で動ける精鋭部隊である。SSランクの八神はやてをはじめエースオブエースの高町なのは、その相棒とまで言われているフェイト・T・ハラオウン、一騎当千の力を持つといわれる守護騎士などなど、おおよそ通常では考えられない高ランクの面子が揃っている。まさに管理局のエース部隊であり、看板ともいえるであろう。

というのは、建前であり実態は180。違うものだ。まず機動六課の立ち位置というのは一言でいえば“萌え担当”である。世界というのは驚くほど広く、その広さの分だけ犯罪は絶えない。そうするとどうだろう？　お偉い人たちは毎日毎日眉間に皺しわを寄せ、空気は悪くなるばかり、局員も人員不足によって疲労困憊のブラック企業並みの勤務時間。あげくのはてには管理局員の身でありながら違法行為に走ろうとするバカも出てくる。

だがしかし　そんな管理局にも楽しみというものがある。それが六課の部隊長である八神はやてが週一で発行する六課の新聞

『乙女の秘密を覗いてみよう』

である。何故週一かというと、単純にはやてが面倒なだけである。ちなみに六課の人達は知らない。理由は簡単、怒られるからである。ふざけている？　そう思う者もいるかもしれないが、これを取り入れたことによって管理局の中も大きく変わった。まず肥えただけのデブのお偉いさんの顔が優しくなっていたのだ。そしてダイエツトするようになった。後者はどうでもいいので前者

のことだけ述べると、激務の最中、ちよつとうたた寝してしまつたせいで書類が終わつてない管理局員Aさんは叱られるの覚悟でお偉いさんの所へと向かう。するといつもは怒鳴つてばかりのお偉いさんが菩薩のような笑みで失態を許し、あるうことかAさんの仕事すらも引き受けたのだ。お偉いさんの心境としては娘が頑張っているのだから、自分もがんばろうとかそんな感じだろう。

それだけではない。絶体絶命でいまにも瀕死の局員が新聞読みたさに生還してきた、なんて事例もある。

それに伴い犯罪者逮捕率はうなぎ上りだ。

さあ、ここで問題になってくるのが当事者というか被害者になっている六課の面々なのだが、管理局員の全員が暗黙の了解・約定としてこう血判してある。

『イエス六課・ノートタッチ』

たまたま出会つたときには話してもよい。しかしながらその体に触れた瞬間、社会的抹殺と身体的抹殺の二つがまっついているということだ。そして驚くことに全員がこれに納得している。

本当に管理局は大丈夫なのだろうか？

「だ〜か〜ら〜、俺たちははやてから了承貰ってるんだってば！  
このすつとごどつこい！」

「そうだね、私たちは正式な客人として招待されている身だよ。  
君は門番程度の権力でたてつこうというのかね？」

「いや、ですから……そのお面を外していただかないかぎりにも  
中へ入れることができないわけでありまして……」

目の前で繰り広げられている光景を見ながらウーノは溜息を吐いた。

正直なところ、この門番の言っていることは正しいと思う。

上半身裸でニップレスをつけた状態の男と白衣を着て頭に紙袋を被  
った男を六課の敷地に通すのはとても危険すぎるだろう。

「なんでだよ！ズボンだつて履いてるだろ！」

その調子で服も着てくれるとありがたいのですが……

「いや、それはわかってはいるのですが……ここはあの有名な六課で  
すので次元犯罪者が来る可能性も……」

「何を言っているんだね、君は。わざわざ管理局に突っこんでい  
くバカな次元犯罪者がどこにいるのかね？」

ドクター鏡みてください。

ワーワーギャーギャーと騒ぎ立てる二人を横目にウーノは携帯を取  
り出す。

「あ、なのはちゃんですか？　いま六課の前にいるんですが」

「えっ！？　俊くん六課に来てるのっ！？」

ウーノから電話をもらったなのはは思わず普段は口にしない幼馴染の名前を口にだした。

「なのはちゃんがあのバカの名前言うなんて……よっぽどなことやで……」

長年一緒にいるはやては冷静にそう認識する。　普段は名前すら言わないのだから。

そんなはやてをよそに慌てた様子でなのはは部屋を動きながら早口で電話の相手と話す。

「え〜……ちよつと本当に困るってば……」

『すみません……私が提案したばかりに』

「えっ！？　いえいえ、ウーノさんなら大歓迎なんですけど……あのバカだと何やらかすかわかったものじゃなくて……」

なのはは、うーん、と唇をとがらせて考える。

「ちなみにいまなにしていますか？」

まあ、六課の警備は厳重だからおとなしく待っているとおもっけど……

『警備員殴って侵入したところです』

「本物のバカがいたっ!？」

なのはの叫び声と同時にけたたましく警報が鳴り響く

「え？ え？ なになに、どうしたの？」

「いやいやフェイトさん、呑気に紅茶飲んでる場合じゃあないですってばっ! 誰かが六課に侵入してきたんですって!」

クッキーを食べつつのんびり紅茶を飲んでいたフェイトにスバルが叫びながら答えるのだが

「うーん……なのはが指鳴らしてるから大体侵入してきた人はわかるかな。まあ、のんびりと紅茶でも飲みながらみてるといいよ。私となのはがお世話している相手がくると思うから。……それより、なのはと私に会いたいって人遅いね。一刻も早く断りたいのに」

そのはやてが言った男性が警備員を殴って侵入してきたバカだと知ったらフェイトはどうするのだろうか。

「は、はあ……お世話ですか？」

「うん、お世話かな」

納得したような納得してないような表情で頷くスバル

その時、やけに慌てたような声と足音。その後ろから何かを叫ぶふたり分の声が届いてきた。

なのはに視線を移すと、右ストレートを打ち込むために極限まで腰をひねっていた。

バタンツ!!

「みんな、大変だツ!! 侵入者が出たみたいだぞ!!」

「アンタだよツ!!」

「ぶへあツ!?!」

『スカさー————んツ!?!』

「……え? スカさん?」

ドアを開けた瞬間、なのはは顔面に向かって打ち込んだ。それを食らった男性はわけのわからない声を出して部屋から消えたのだが、自分の予想した相手と違ったので、おそろおそろ自分が殴った相手を確認することに。

「スカさんっ! 大丈夫か、誰にやられたんだっ!?!」

「ドクターっ！ しっかりしてください！」

みると泡を吹いて倒れている男性に必死に呼びかけている幼馴染。  
泣き目でゆすつている友人。 幼馴染が自分の存在に気付いたの  
か、こちらをみていた。

「い、いらっしやい。 機動六課にようこそ」

「気をつけるー！ コイキングがギャラドスに進化したぞおお  
おおおおおおお！！」

「ち、違うもんっ！ 不可抗力だもんっ！！」

片足を上げウインクしながら指をピンつと立てて可愛らしく言った  
なのに対して、ひよっとこはスカリエッティを抱きしめながら大  
声で叫ぶのであった。

14・コイキングの本気(後書き)

Bボタン連打

## 15・マスコット作戦

「「えー……っ!? それじゃ、はやてちゃんがさっき言った私たちに会いたい男性ってコレ!?!」」

「そうやで」

スカさんがギャラドスによってKOされてから10分、俺は床の上で正座をさせられていた。こいつらがいつには反省の意味も兼ねてらしいのだが……真に反省すべきはなのはだと思っただ。だってスカさん殴ったじゃん。泡吹いて鼻血流してたじゃん。流石の俺も警備員に鼻血は流させてないぞ。

「いや、おかげでなのはちゃんが本気で殴った映像も撮れたしよかったで」

「うう……あれは不可抗力で……その……本当はコレを殴るつもりだったのに……」

もじもじしながら怖いことを言わないでください。スカさん、俺を救ってくれてありがとう。

「まあまあ、ええやないか。コレも本気でなのはちゃん達を心配してきてくれたんやで?」

「そうだそうだ! もっと言ってやれ、はやて!」

「ごめんな、下から必死こいてパンツ覗こうとしている奴を弁護で

きんわ」

地に伏せながらなんとかスカートの中の楽園を覗こうと土下座体制でなのは達をみているひよっとこにはやては冷徹な目を向ける。その視線に気づきひよっとこは瞬時に正座の体制へと戻る。そして周囲を2・3回見回した後、袖を拭いながら溜息をついた。

「ふう……危ない危ない、バレるところだったぜ……」

「もう遅いよ、なにもかも遅いよっ！？ はやてちゃんのセリフ聞こえなかったのっ！？」

「え？ どうしました、高町なのはさん。そんなに大きな声を出してはいけませんよ？」

「誰のせいだと思ってるのっ！？」

「ちなみに、そろそろいちごパンツは卒業しましょうね？」

「個人の勝手じゃんっ！ というか、いつの間にパンツみたのっ！？」

「ごめん、当たるとは思わなかった」

「zzzうえxr d c t y 9 おい k j ゆ h y g r て s x d c f v g !  
？」

なのははバインドでひよっとこの両手両足を縛り、近距離から魔力弾を放つ。

「なんだか……なのはさん嬉しそうですね」

「これがそう見えるなら病院行ったほうがいいぞ、スバル。どうみてもあいつを抹殺しようとしてる途中だろこれ」

横にいるヴィータに話しかけるスバルだが、ヴィータはうんざりしたような様子で答える。もしかしたら、今回のようなことがしょっちゅうあるのかもしれない。

「けど……どうしよう。ねえ、ティア、あの人が同棲相手なら私たちはやるしかないんだよね……　　って、ティア？」

みると友人であるティアが指をワナワナ震わせてカタカタと体を動かす。

「あれ……もしかしてお兄さん……？　お面も一緒だし、声も一緒。え？　うそ？　あんな人類の最底辺をいつてるような人が私に気になっていたら……？」

「あの……ティア？」

相方の様子がおかしいのに気が付き、そつと触れようとする　と　ここでティアがいきなりひよつとこのお面をつけている人に向かって駆け出した。

「あの！　お兄さんですよ、ティアです！　お墓で会った！」

「ちよつとまってくれ、いきなり妹感覚で話されても困る。君が妹を名乗るなら縞パンをはいてフリフリのスカートを履き、ネクタイで可愛らしくきめてからまたきたまえ」

「いや、そうじゃなくて……お墓の前で会いましたよね!？」

「会ってないよ、俺は。君が会ったのは俺とは別の人だと思う。もっと恰好よくてもっと優しい……そんな素敵な男性だろう」

荒げるタイヤにひよっとこは冷たく引き離す。タイヤはがっくりと肩を落とし、とぼとぼとスバルたちの所へ戻っていった。

「……よかつたの？ 俊くん」

「いいんだよ、これで。嬢ちゃんの中では恰好いい男性なんてイメージが出来上がってるかもしれないしな。それを壊したくないんだ」

「でもお墓に塩撒いたんでしょ?」

「寺生まれのTさん直伝の方法だぞ」

「知らないよ、そんなの。もう……そんなことしちゃダメでしょ。次やったら私が塩撒いちゃうよ?」

「潮吹いてくれるの?」

「死を撒いてあげようか?」

レイジングハートを機動させながら俺の頬にペチペチと当ててくるのはヤクザそのものです。ギャラドスからレックウザに突然変異したぞ、こいつ。とりあえずバインドを解いてくれたので、ひとしきり見渡すことに。

「なんというか……アレだよな。六課って女多いな」

「せやなく、うちがじきじきに選んだからなく」

「ああ、なるほど。それは女が多くなるわけだ」

はやてなら無駄な男なんていらないうし、いれないだろうな。

「しかしはやて殿、こう女子おなじが多いとマスコットなるものが必要ではないか？」

「マスコットならなのはちゃんがおるで。毎日毎日、かわいすぎて萌え死にそうや」

「まあ、なのはがマスコットなのは認めるかな」

「ねえ、それって喜んでいいんだよね？ちなみにそのマスコットはどんな役をするのかな？みんなに笑顔を振りまいちゃうとか…」

「オチ担当かな」

「ひどいよ二人ともっ!？」

まあ、いいじゃないか。見てる分には面白いし。

「どっせ、アレやる？自分がマスコットになりたいとかいうんやろっ」

「べつにそんなこと思ってないけど、マスコットにしてください」  
「いかん、願望が少し漏れてしまった。」

「はやては溜息をつく。」

「ほな、うちが満足するようなマスコットの案をだしてみい。それで判断するで?」

「こんなのはどつだろう? ひよつとこハム太郎とか」

「鳴き声は?」

「デウクシ」

「18禁verは?」

「ひよつとこハメ太郎」

「喘ぎ声は?」

「ヒギイツ!?!」

「うちの負けや、採用」

「大反対だよッ!」

はやてと互いに肩を抱き合いながら健闘を讃えているところではからストップがあった。やはりなのは遊ぶのはめっちゃくちゃ楽しい。俺も息子も嬉しすぎて反り返っている。

「ところでスカさん、目を覚まさないね」

「それだけなのはちゃんの右ストレートが強かったんや」

やはりギャラドスは伊達じゃなかった。

## 15・マスコット作戦（後書き）

なんか長くなりそうな予感がする。  
あと土曜まで更新はなしです。

スカさんいまだ起きないし。

16・「速報」 スカさんが生還した

「スカさんが気絶してから1時間。そろそろスレ建てようと思うんだけど」

「ほうほう、どんなスレタイにするん？」

「「コイキングの逆襲」 スカさん余命1時間 「はねるコイは竜になり飛翔する」 みたいなスレタイでいこうかなと」

「よし、うちが建ててくる」

「やめてよっ!?!」

はやてとウキウキ気分ですレを建てようとしたところ、横から悲鳴混じりのなのは声が聞こえてきた。

「え? どうしたの、なのはさん。もといギャラドスよ」

「ちっ、ちがうってば! だ、だから……アレはそもそも間違いで……」

「ほんとに俺を殴る予定だった?」

「うん」

「おい、スレ建てよろしく」

「あいよー」

はやてが自分のPCでスレを建てようとする　　が、それをさせまいとなのはもはやての机に迫ってくるので後ろから俺が羽交い絞めすることだ。

「もうよせ……！　戦いは終わったんだ……！！　お前は頑張らなくていいんだよ！」

「ここで頑張らなかつたら私は大変なことになっちゃうよ!？」

「胸揉んでいいっ!？」

「人の話し聞いてよっ!？」

「ハア……ハア……なのはタソのおっばい……　　って、あぶなあっ!?　後ろからレバ剣飛んできたっ!　おっばい魔人がレバ剣飛ばしてきたっ!？」

「貴様を葬ればミッドの平和を守れるような気がしてな」

あながち間違いじゃないから反論できない。　　そうこうしている間になのははやての元にいつて、PCの電源を切ってしまった。  
くそっ……!　このおっばい魔人め!

「俺となのはのスキンシップを邪魔するなっ!」

「それはセクハラというものだ」

「シグシグのおっばいだってセクハラもんだろっが　　謝るから、レバ剣を投擲しようとしないでっ!？」

昔から守護騎士たちは冗談が通じないんだよな。とくにシグシグなんて全く通じないし。

ふいにフェイトと視線が合う。逸らすフェイト、見つめる俺。

「……我が家のおっぱい魔人は俺と視線を合わすのも嫌なのか……」

「ち、違うよっ!?! でも、ここで視線を合わせると面倒なことに巻き込まれそうだったしっ!」

そっついながら、キャロとエリオを後ろに庇うフェイト。お前はどんだけ警戒してるんだよ。

「べつにー、ちょっとシグシグにフェイトの胸囲の脅威を覚えてあげようと思っただけなのに。なー、ロヴェータ」

「ここであたしに振るのは宣戦布告と受け取っていいんだな?」

守護騎士一のロリっ娘は俺に向かってアイゼンを構える。

「まあまで、ロリにはロリの魅力があると高校時代に もう言わないから振りかぶらないでくれ」

ブンブンと空を切り俺の頬にまで届いてくる風を受け、両手を上げ降参の構えを取る。

「そっついえば、お前はさつきからコイツのこと“スカさん”って呼んでるけどダレなんだ、結局のところ」

そついつてスカさんを指さすヴィータ。人に向かって指を指しちやいけないつて習わなかつたのかコイツは。

「こーら、ロヴィータちゃんダメでしょ。人に指を指しちや」

「うるさい」

ボキッ

「指がああああああああああ！？」

おかしい、あいつ絶対おかしい。思考がなのはと一緒だもん。絶対おかしいぞ。

急いでシャル先生の元へ

「シャル先生、助けてくださいっ！ おっぱいとロリの相乗効果が襲ってきますっ！」

「ま、まあ……二人とも会えて舞い上がってるだけですよ。たぶん……」

「ロリ巨乳なんて認めないんだよっ！！」

「そついつ話じゃないですよね？」

困惑しながらもシャル先生は指を治してくれる。やつべえ……シャル先生、便利すぎ。シャル先生いればフルボッコにされても大丈夫なんじゃね？

シヤマル先生から治してもらい、いまだに構える二人に向かってしゃべる

「スカさんはスカさんだよ。 下着泥棒してるんだ」

「おいちよつとまで、その紹介文がすでにおかしいだろ」

「発明者なのかな？ なんか家に行ったとき大量のロボットがあった。 全部壊しちゃったけど」

「よく仲良くできてるよな」

まあ、変態同士だからな。

ロヴィータの隣にいたシグシグが疑惑の念を向けながらスカさんを見る。 どうしたんだろう？

「どしたの、シグシグミシル」

「今度言ったら前歯折るからな」

「お前らは苦痛以外で俺とコミュニケーションができないのかっ！？」

絶対アレだ。 はやてがアレなせいで守護騎士たちも頭がアレになってるんだ。

「けどよ〜……“スカ”って聞いたら次元犯罪者のジェイル・スカリエッティを思い出すんだよな〜」

ロヴィータの眩きにウーノさんの肩が一瞬ビクリと動く。ロヴィータはそのまま視線をフェイトのほうに

「そういえば、フェイトはスカリエッティのことにに関して調べてるんだよね？」

「う、うん」

「まじで？ フェイトタソちょっと教えてよ」

「あ、ちょっとまって」

フェイトは自分の机に戻ると大きなファイルを引出から取り出し、戻ってくる。それは大きく大きく膨れ上がっておりそれだけでフェイトがこれに真剣に取り組んでいるのだとわかる。ロヴィータはスカさんのことを次元犯罪者だと言っていたが……あのスカさんがそんなだいたいそれたことできるのだろうか？

フェイトはファイルを一枚めくって紙に書いてあることを読み始めた。

「え〜つと、ジェイル・スカリエッティ・・・google検索で、間抜けな次元犯罪者は？ つと打ち込むとgoogleさんからもしかしてジェイル・スカリエッティ？ と質問される。ミッド調べ 俺でも捕まえられそうな次元犯罪者 殿堂入り。つい笑ってしまふ次元犯罪者調べ 殿堂入り。ワンパンで捕まえられそうな次元犯罪者 殿堂入り」

『ぶふうっ!?!?』

そこにいた全員が思わず笑ってしまった。なのはとはやてに至っては痙攣を起こしてるほどだ。かくいう俺も笑いを抑えられない。いや、流石にgoogle攻撃は卑怯すぎるだろ。

なのはが痙攣しながらフェイトに問いかける

「フェ、フェイトちゃん……それを追いかけてるの？ あ、ダメ、笑いすぎてお腹痛い……！」

「う、うるさいなあっ！ 私だつてこんな人だとは思ってなかったよっ！？」

むしろそんな奴がどうやったら次元犯罪者になれるんだ？ フェイトが調べてるってことはアレ関係かな？

脳裏に浮かぶのは黒髪で俺のことを坊やと呼んだ女性。手を伸ばし、掴んだはずなのにそれを振り払われた女性。俺たちをフェイトに会わせてくれた女性であり、一瞬なほどの痛々しいほどの娘への愛情を魅せていた女性。あれからどうなったか分からない……けど、きつと幸せな夢を見てるんだと思う。娘さんと一緒に。

「どうしたの、気分悪い？」

「へ？ いや、なのはとフェイトとやってるところを想像してたんだ」

「頭力手割るよっ！？」

「なにいつてるんだよ。 あんなにも可愛い声で鳴いてたじゃないか」

「それ夢のことだよねっ!?　なんで夢のことを現実であつたかのように話しちゃうのっ!?!?」

みるとフェイトのほうも、必死に誤解だと主張している。ほんとこいつらの困った顔をみるのは面白い　けど、脈がないというのも考え物だ。　ここで一発イケメンなところを魅せないといけないのではないだろうか?

ということは置いて、どうやらみんなには気付かれてないようで安心した。　ほら、なんか主人公みたいになっちゃうじゃない?

ウーノさんが顔を赤くして俯いている。　そりゃそうだよな、スカさんの世間に対するアレが180°別ベクトルで有名になってる人だしな。　ウーノさん頑張れ!

皆が笑っている最中、突然ドアが開いて声が室内を支配した。

『大変です!　ミッド郊外にて犯罪者が出た模様!　なお犯人は六課に対する侮辱を行い、六課が出動するのを狙っている模様です!　どうしますか?』

「侮辱って具体的にどんなことなん?」

冷静に聞くはやて。　流石は部隊長

『はい、六課はババアが多すぎる!　とのことですよ!』

「全員、出動用意!　塵一つ残さへんで!」

『了解!』』

声を荒げながら叫ぶはやて。 流石部隊長、目が殺意に満ちている。

俺が女性たちの並々ならぬ殺意に震えていると、その殺意に当てられたかのようにスカさんが起きてきた。

「ん……ここは?」

「おはよう、スカさん。 いまから六課による犯罪者公開リンチが始まるけど、どうする?」

「……どうやってたら管理局の萌え担当を怒らせることができるんだい?」

「まあ、乙女には色々と踏んではいけない地雷があるんだよ」

ギャラドスなんか逆鱗に触ったようなもんだからな。

とりあえず比較的冷静だったシャマル先生に頼んで、見学することに。

「スカさん、そろそろ紙袋取ってくれない? 袋全体に血がこびりついてて怖いんだけど」

いまのスカさんは下手なホラーより怖いです。

16・「速報」スカさんが生還した（後書き）

今週のめだかボックスが面白かったので、やっば更新する。

安心院さんかわゆす。江迎は善吉とお幸せに

## 17・キレルはやてじい用心

なんでもシャルマル先生から聞いたところこれが六課初の出勤みたいだ。まあ、管理局の萌え担当だしふつうは出勤とかないよな。

ほんでもっていま俺とスカさんの目の前で繰り広げられている光景はなのはから新人達に贈るデバイス贈呈みたいなもんだね。このデバイスたちがこいつらの相棒になるわけだ。

「はい、これでみんなデバイスは渡ったね。これからはそれが相棒になるからみんな大事にしてね!」

『はい!』

……なんだろう、この幼稚園に訪れたような感覚は。

とりあえずみんなデバイスをもらってはしゃいでいるので、俺もなのはに近づいてデバイスをもらうことに。

「ねえねえ、なのは。俺のデバイスはないの?」

「丁度いいのがあるよ。はい」

つ綿棒

「これでアナル開発しろっていうのかよ!」

「まったく違うよっ!?! どうして皮肉がつうじないのっ!?!」



「うん、普段の俊くんを見てるようだよ」

正直、俺がコイツと同レベルとか納得いかない。俺のほうがギリギリ下回ってるだろ。

「それにしてもフェイトちゃん。俊くん抱いてて大丈夫？ 重くない？」

「うん、大丈夫だよ」

なのはが俺を抱いたまま空中制止してくれてるフェイトに声をかける。フェイトはそれに笑顔で答える。

「ごめんー、フェイト。どうしても近くて見たかったんだよ」

俺はこんな時じゃないとこいつらの活躍とか仕事ぶりとか見ることできないしさ。フェイトもそれがわかってくれるのか笑顔で首を横に振った。

「ううん、きにしないでいいよ。けど、あんまり無茶はダメだよ？ バリアジャケット着てないんだし」

「ユニクロのジャケットなら貸してもらったんだけど、それじゃダメなの？」

「いや、根本的に間違ってるから。ジャケットならなんでもいいわけじゃないから」

「というか、9歳の頃から俊くんジャケットがつけばなんでもいい

と思ってるよね。ほんと成長しないよね」

「お前の胸もな」

「フェイトちゃん、落としていいよ」

謝るんで本気で離そうとするの止めてください。

「それよりさ……はやてどうにかしろよ」

右に視線を移すと、齒ぎしりと憎悪と怒りで暗黒化してるはやてがいた。いや……まあキれるのはわかるんだけどな？ 下手したらこいつ犯罪者殺しかねんぞ。せっかく、非殺傷という素敵なものがあるんだし部隊長が殺しなんてしたら目もあてられん。

「あ……ちょっと危ないね」

「危ないにもほどがあるぞ。幼馴染から人殺しが出るなんて御免なんでもどうにかしたほうがよくな？」

「たしかに、ちょっとかけあってくるね」

なのはそのまま水平移動してはやての近くまで行く。あ……はやて言語失ってるわ。とりあえずちょっと時間がかかりそうなんでフェイトとおしゃべりすることに。新人たちとスカさんたちはヘリの中で見学。デバイス渡した意味くない？

「ところでフェイトタソ。エリオとキャラは元気にしてるかな？  
せっかく会えたのに話しをしてないけど」

「うん、大丈夫だよ。 エリオもキャラも素直でいい子だし、結構会えるの楽しみしてたみたい」

「え？ まじで？ それじゃ婚姻前の挨拶に行こうぜ」

「“それじゃ”の使い方が絶対あってないよねっ!？」

リアクションとるたびにフェイトタソのおっぱいが当たって俺のザーンバーがフルドライブしそうだ。

「おまたせ、はやてちゃんと交渉してきたよ。 私が代理で執行することになった」

「犯罪者 ! いますぐ逃げろおおおおおおおおおおお  
お! はかいこうせんがとんでくるぞおおおおおおおおお  
おおおおお!」

「ちよっ!?! やめてよっ! ギャラドスじゃないっていつてるで  
しょ!?!」

いや、お前は危険すぎるだろ。

「ほら、犯罪者なんか命乞いしだしたぞ」

「ちよっとーーーー!?! なんて私が執行になった途端土下座して  
るのーーーーっ!?!」

「……人間は賢い生き物だからな」

「納得いかないよおっ!」

もう！　なんで私だけいつもからかわれるのかな。　だいたい女の子に向かってギャラドスとかおかしくないっ！？　わたしまだ19歳だし、あんなに怖い顔してないんだけどっ！

なのはは一人犯罪者と対峙しながら幼馴染に憤慨していた。　後ろからはフェイトとひよっとこの能天気な会話が聞こえてくる。

だいたいなによ、ちよつとフェイトちゃんのアレが大きいからってフェイトちゃんに抱っこされちゃって。　ニヤニヤしちゃって。　そんなに私は嫌なんですかー！　すいませんねー、大きくなってー！　って話だよ。　それはアレだよ？　フェイトちゃんよりか大きくないけどはやてちゃんよりかはあるもん。　絶対平均だと思っもん。　それなのになにかにつけて私のこと苛めてきてさ、ほんつと小さい頃から変わってないんだから！　3歳の頃からずっと一緒なんだよ？　もっとこう……私に頼ってくるものじゃないの？　無職なんだよ？　普通私のことを頼ってさ、こう……『お願い、なのは！』　みたいな感じじゃないの？

釈然としない思いがなのはの中でふつつつと湧いてくる。

高町なのはという女性は俊がはじめて女の子と遊んだ相手である。　そしてそれからもずっと付き合っている関係だ。　だからこそ知っている。　世界で一番彼のことを知っているのはだから知っている。　彼の泣き顔も怒り顔も笑い顔も膨れっ面も死のうと

思っていたときの顔も絶望の中にいた顔も　全部知っている。  
だからこそ、俊は自分を一番に頼ってくると思ったのだが　蓋を  
開けてみればそうでもなかった。それは幼馴染として嬉しいこと  
であるのだが……どうにも面白くなかった。

あー、止め止め。　あんなデリカシーのない相手のことなんて考え  
ても無駄だよな。　さっさと終わらせてシャワー浴びよ。

なのは気付いていなかった。　溜息をついている隙に犯罪者が泣  
きながら聖母に祈りながら魔力弾を撃つたことに。

「避ける！！　ナツパ！」

「へっ？　うわあっ！？」

後ろからの声で現実に戻ったなのは目の前の魔力弾を慌てて避け  
る。　これでもエースオブエースだ。　これくらい造作もないこと  
だ。

ズガガガガガガガガガガガガッ！！　ひよつとこ全弾  
命中

『アンタが当たるんかー！ーっ！？』

「……………わ、私は悪くないよ？」

遠巻きに見ていた新人たちの突っこみと、後ろを振り向いて冷や汗  
を流すなのは。

やがて煙が晴れ、顔を下に向けているひよつとこと困惑したまま抱

きかかえているフェイトが姿を現した。

ひよっとこは何もいわずフェイトの肩を叩き、シャルマルがいる地点を指さす。

シャルマルの所に降ろすフェイト。シャルマルは既に治療の準備をしていた。

『え？ 本当は恰好よく避けて、ベータみたいになのはに言うつもりだった？ けど、フェイトと喋ってたらタイミングを逃して当たった？ そう……それは大変だったわね。予想以上に痛かったの？ ユニクロ訴える？ うん、確実に負けるからそれはやめましようか』

どうやら本当に痛かったようでその後もシャルマルが通訳のような形で会話を行うことに。

『そもそもなのはが避けるとは思わなかった？ へっぼこの癖に？』

「……わたしも魔力弾当てちゃおっかな〜……」

小さくつぶやくなのはに聞こえないはずのひよっとこが小刻みに肩を震わせる。

それが少しだけ面白くて、なのははひよっとこに聞こえるようにしやべりだした。

エースオブエース 高町なのは。 犯罪者すっぱかして幼馴染に日頃の恨みを晴らすことに専念する。 これが本当にエースオブエースで大丈夫なのだろうか？

一方犯罪者は

「誰かババアか言ってみいや！ おお？ はよ、いってみい！ 言った瞬間うちがその唇引き裂いてミンチにしてぽっこぽっこにしたるで！！！」

キレたはやてにフルボツ」にされていた。

17・キレるはやてに用心(後書き)

ちよつとだけ意地悪な、なのはでしたとき

## 18・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン！

六課の初出勤が終わり、ほとんどなにもしていない新人達や一方的に犯罪者をフルボッコにしたはやてたちがにこやかな笑顔を浮かばせながら職場で菓子を食っていた。

「いや、初出勤もちゃんとできて六課も幸先がええな」

「お前が一方的にボコって、新人たちはそれをみていただけだな」

「そういう俊くんは自滅して、シャマルさんに泣きついてただけだね」

……出勤から帰ってきてからというものの、どうもなのはからキツイ言動が飛んでくる。あれか？ りゅうのまいで攻撃力でも上がったのだろうか？

俺がシャマル先生に泣きついたことはかわらないのでここは黙って受け取っておくけど。

「にしてもあれだよな。魔力弾ってやつは痛いわ。19歳になったからもう大丈夫だろうと思ってたけど……これは成長するとかの問題じゃないよな」

「俊くんの頭は成長しないけどね」

……俺にはサッパリ理由がわからない。しかし……しかしだな。

こつ……好感度が下がっているような気がするのには確かなんだよ

な。

そっぽを向くのはにどうしたもんかと頭を悩ませていると、トッポを独り占めしていたはやてが急に顔を上げた。

「そや！ みんなで祝賀会やらへん！？ 初出勤達成おめでとう祝賀会や！」

『おおー！ー！ 部隊長がはじめて真面目なこと言った気がする』

「ちよつとまちいな。 うちはいつだって真面目やったで？」

『……………』

「なんで黙るっ！？」

それはまあ、普段のお前がおかしいからに決まってるだろ。

「でも、祝賀会ってどこでやるの？ 私たちは19歳だからまだ大丈夫だけどキャロやエリオはまだ子どもなわけだし……………お店を貸し切ってやるのは反対だよ？」

「大丈夫や、フェイトちゃん。 場所はなのはちゃんとフェイトちゃんの家でやる！ 二人のペットが一匹おるけど大丈夫やる」

「おい、誰がペット。 もっとこつ……………愛玩動物とか別の言い方があるだろ」

「いや……………そういう問題じゃないよね？ 遠まわしに俊は人間じゃ

ないって言われてるんだよ?」

フェイトが可哀相な目で俺を見てくる。

「はっは、君と一緒にいられるのなら俺は人間なんてやめてやるさ」

「でも人間じゃないなら結婚とかできへんで?」

「やっぱりまのナシでお願いします」

それは困る。めちゃくちゃ困る。どれぐらい困るかというところの息子が勃たたないくらい困る。この頃使っていないから最近スネてるんだよな、こいつ。

「というか、okを出すのは俺じゃないからなんともなく。フェイトとなのはがok出すのなら俺は何もいわないよ」

あくまで俺は居候の身。色々部屋を改造したり至る所に盗撮カメラを仕込ませたりしてるけど家長はフェイトとなのはだ。

「うーん、私は別にいいよ。キャロとエリオも行きたかったらうし。なのはは?」

「そうだね、私も別に」

『なのはさんの部屋に侵入できるなんて!! やば、私この場で絶頂しそつ!!』

『落ち着くのよ、スバル!! まだ早いわ! なのはさんが使っている枕やベット、小物用品で絶頂したほうが遥かにイけるわよ!!』

『流石だよ、ティア!』

「……わたしとフェイトちゃんの部屋に行くのは禁止でお願い。  
というか一階だけ開放ということだ」

「……打倒なところやね」

狂喜乱舞中の新人二人を見ながらはやては溜息をついた。

「え〜っと、なのはとフェイトとはやてとシャマル先生とロヴィー  
タとシグシグとザツフィーと新人4人にスカさんとウーノさん。  
うひゃ〜……結構な量を作らないといけないのではないか」

場所は移動して我が家の台所で、俺は人数を確認して悲鳴を上げて  
いた。

家に帰るまでの間にも色々と問題が起こったのだが面倒なので省略  
することだ。

後ろのほうではパーティーゲームで盛り上がっている女の子たちの  
声が聞こえてくる。

『なのはちゃん、負けたら脱衣やで!』

『えっ!?! そんなこと聞いてないよ! あ、ダメ負けちゃう!?!』

あ~~~~~!」

『ぐふふふ……さあ、脱ぐんや!』

「その役目、俺が受け持とう　　おい、なんで部屋に結界張ってんだよ!!　これじゃ見れねえじゃねえか!!」

鍋とか皮抜きとか千切りとか料理のこと全てを投げ出してエプロンを投げ出しズボンと脱ぎパンツを脱ぎ捨てながら部屋に突撃したところ、はやてがそれを先読みしていたかのように結界を張っていた。

「うおおおおおおおおおおおお!　燃えろ、俺の小宇宙!」  
コスモ

力いっぱい殴るが結界はビクともしない

『さあさあ、フェイトちゃんも脱衣の時間やで~~~~!』

『ちよ、ダメええええええ!』

「なんで俺には魔導師としての力がなかったんだ!!　なのはとフエイトが裸で俺のことをまっけているというのに……!　こんなことじゃ、男失格じゃないか!」

「その前に人間失格じゃないのかね」

「服を着ろ」

「ひよつとごさん……」

結界の前で全裸になったまま膝から崩れ落ちていると、傍で呆れ声

と悲しそうな声が聞こえてきた。前者はスカさんとザッフィー。後者はエリオである。

「ああ、結界張る前に追い出したんか。そこらへんはぬかりないんだな」

「まて、全裸のままこちらにくるな。ぶら下がっているモノが左右に揺れて気持ち悪い。まず人間として最低限の誇りを取り戻してからこちらにこい」

「そういえばザッフィーの毛でオニしたらどうなんだろう？」

「話を聞け馬鹿者っ!?!」

ワンコ姿のザッフィーに怒られた。あとザッフィーの毛でオニしたらチコが絡まって大変なことになるかもしれない。こう……飲み物を飲んだときに対外に出す所からスルリと毛がはいつてきそつだよな。

脱ぎ捨てたものを拾い履く。流石衣服。聖母マリア様に包まれているような気がして落ち着くぜ。

「にしても久しぶりだな、エリオ。元気にしてた？」

「あ、はい!」

赤髪のエリオは子ども特有の笑顔で俺の質問に答える。うんうん、この笑顔を見る限り大丈夫そうだな。

「ところでエリオはなに食いたい？夕食作るの俺だし、特別に食

べたいもの作ってあげるよ」

「えっ？ いいんですかっ!?!?」

「うむうむ、可愛いエリオのためならお兄さん頑張っちゃっよ」

「あの……それじゃ……」

少し恥ずかしいそうに顔を赤くするエリオ。　「ごめん、エリオ。」

俺、そっちの毛ないんだ。

やがてエリオは何かを決断したように言う。

「僕、お肉がいっぱい食べたいです!」

「そっかー、肉かー。俺も好きだよ、肉。　うまいもんな」

もしかして肉を沢山食べたいことを言うのが恥ずかしかったのかな？

「うーん、それじゃ手羽先とトンカツにでもするか。　おっし、お

兄さんに任せなさい!」

ドンと胸を叩く。　それを聞いてエリオが嬉しそうな声を上げる。

まあ、流石にそれだけでは健康に悪いので洋風パスタやカルパッチョとかも作ってみようかな。

「ところでエリオ。　ここにゴスロリ服とウィッグがあるんだけど……ちよっと着てみない?」

一瞬にしてエリオの顔が戸惑いの表情に変わる。

「いや、ちょっとだけちょっとだけ。ほんと数秒でいいから、ね？」

「あの……ひよつとごさん、顔が怖いんですけど……」

右手にゴスロリ服、左手にウィッグをもってハアハア言いながらエリオに迫るさまは立派な犯罪者である。

「いやさ、なのはやフェイトに着てもらおうとわざわざ買ったのにあいつら俺の前ではきてくれないしさ。このさい、エリオに着てもらおうかと」

「ザフィーラさん、助けてください！」

ザフィーラの助けもあえなく、ひよつとごに捕まったエリオはゴスロリ服を着せられたのだった。

18・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン！（後書き）

とりあえず男子パート

19・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン！（裏側）

時は少し前に遡る

「いや、ありがとうございます。なのはちゃん、フェイトちゃん」

「べつにこれくらい大丈夫だよ。私もフェイトちゃんもこういうことしたかったし」

「うん、こういうのって面白いよね！」

ひよつとこが台所で食材の確認をしている頃、大きな部屋に集まってはやてはなのはとフェイトに頭を下げていた。三人のほかにもエリオやキャロ、ティアナやスバルや守護騎士の面々、そして何食わぬ顔で参加してきたスカリエッティとウーノがいた。

「それにしてもみんなお疲れ様！ 初出勤は全員怪我もせず終わってよかったね！」

「……なのは、ひよつとこのこと忘れてねーか？」

「え？ 何言ってるの、ヴィータちゃん。そんな人いないに決まってるじゃん！」

にこやかな笑みを浮かべるなのはにヴィータはそれ以上にも言えずに黙るだけだった。

「もしかして、なのはさん怒ってるんじゃないの？」

「……それはあるかもしれないよ。 どうしようティア。 なのは  
さんの機嫌がよくないと部屋に侵入する機会チャンスがなくなっちゃうよ」  
「いや、それより雰囲気自体が暗くなっただな……」

新人二人とヴィータがコソコソと集まって会議をする。 他の者は  
困ったように苦笑い。 そんな空気をどうしようかと思案するはや  
て。

「あ、気にしないで。 普段もこんな感じの扱いだから」  
そして事実を告げるフェイト

『もう少し扱いよくしましょうよっ!?!?』

「一般人のランクにまで上がったら私たちも扱い方をかえるんだけ  
どね〜」

どうやら高町なのはという女性の中では彼の人間性は一般人以下の  
ランクに位置しているらしい。 といってもそれはなのはだけに限  
ったことではない。 おおよそ、ここにいる女性陣は彼のことを一  
般人ランクだとは思っていないだろう。 せめてミカヅキモランク  
が打倒なところだ。

「けど、ひよっとこさんってなのはさんやフェイトさんのことが好  
きなんですよね?」

「どうせ口だけだよ、口だけ。 私がなんと俊くんの口車に乗せら  
れたか」

「そういえば、なのはって子どものうちにビスコ食べてたら魔力量  
が上がるって嘘話を一人だけ信じてたよね」

「うっ……フェイトちゃん。それはいわないでよ……」

顔を赤くしながらフェイトを睨むのは。その視線を受けて自分  
がどれほど迂闊なことをしたのか悟ったフェイト。

「なんですか、その話っ！ 詳しく聞かせてくださいっ！！」

『私たちも聞きたーい！！』

ハイエナのようになのはの周囲をまわりながらインタビュアーのよ  
うに手をマイク代わりにして押し付ける新人に、困った顔をしながら  
らもなのははかわす。

「ふ〜む……それならちよっと試してみる？」

『ビスコを？』

「いやいや、ひよっとこのことや」

頭に？マークを浮かべる全員にはやてはどこから取り出した伊達  
メガネを装着して女教師のように説明しはじめた。

「あのバカは夕食の準備をしている最中や。そこでウチがこの部  
屋全体に結界を張る。当然魔力を持たないアイツは結界に入るこ  
とができないわけや」

「あれ？ でも俊くん微量だけで魔力あるよ？」

「大丈夫大丈夫、あれは“ある”うちに入らんで。ランクにすらできんし。説明を続けるで、その結界の中であたかもパーティーゲームをしているふうにみせかけるんや。そしてあいつが私達の楽しそうな声に気付いた瞬間に一芝居うつ！ 私がなのはちゃんやフェイトちゃんに脱がそうとする芝居や！ あ、もちろん芝居だから声だけでええで。もつとも……脱ぎたいなら別やけど」

『ぬーげ！ ぬーげ！ ぬーげ！ ぬーげ！』

「ちよつ！？ 脱ぐわけないよつ！ しかも仮にも上司に向かってそれはあんまりじゃない、スバルとティアっ!？」

なのはの脱がない宣言に絶望しきつた表情でフロアリングを転がるスバルとティア。 いったい彼女たちはどこに向かおうとしているのだろうか。

「まあ、そんなわけで演技に色をつけるために男には退散してもらうで。 もつとも、退散しなかつたらあのバカが厄介なことになるけど」

「ふむ、同士を怒らせるのは私としても反対なのでね。 ここは素直に従っておくでしょう。 では……エリオ君にザフェーラ君いこうか」

「さて貴様、いま卑猥な単語を口にしなかつたか？」

スカリエッティに手を引かれながら部屋の外へ出ていくエリオと自分の名前の一文字が変わっただけで卑猥な単語に早変わりしたザフェーラがスカリエッティを睨むながら出て行ったのを見届けてはや

てが結界を張る。

「さうて、まずは……本当にパーティーゲームしよつか！」

演技をするのにも限界がある。今回は音をあちらに届けないといけないのでどうしても本当にゲームをする必要がある。

「それじゃス ブラヤろうよ！ 私強いんだよ！」

やる気満々なのははやては挑発的な笑みで返す。

「ほ……なのはちゃんかねー。まあ、それならウチが軽く捻つてあげようかな」

「へ、はやてちゃんがなのはに勝てるっても？」

バチバチと火花を散らす二人。

かくしてパーティーゲームのはずが二人の真剣勝負へとかわっていった。

3分後、そこには自分のゲームの弱さを痛感しているエースオブエースの姿があった。

「えげつねえ……いつさい手を抜かなかったぞ……」

「……なのは涙目じゃないか……？」

「な、泣いてないもん！」

うっすらと目元に雫をためながらなのはが言う。

「な、なのはは頑張ったよ！ うん、すごく頑張った！」

なのはの姿をみてフェイトがさかさずフォローする。なのははそんなフェイトの胸に飛びついていく。頬に当たる豊満で豊潤な胸。それを顔面全体で味わいながら、なのははそっと自分の胸に手を当てる

「フェイトちゃんの裏切り者っ！」

「ええっ!？」

「ちょっとまで、なのは。なんであたしの所に真っ先にきた。自分の一部の膨らみを確認してからこっちにきたよな？」

「ヴィータちゃんがいるからまだ大丈夫だもんっ！」

「どっという意味だコラッ！」

自分より下の者のところにいく。人間の賢い知恵である。

「まあ、それはそれとして。そんじゃ実験はじめようか」

「そういえば、この実験でなにがわかるの？」

「……あいつの人間としての最低度かな」

その時、この場にいる誰もが思った。

『元から最低の部類だけだな……』

その空気を肌で感じたのかはやてが努めて明るい声でなのはに呼びかける。

「ま、まあなのはちゃん。とりあえず実験しとこか。色々面白いもんが見れるかもしれないし」

「え〜……それじゃあ」

「おっし、いくで〜。『なのはちゃん、負けたら脱衣やで!』  
はい、このセリフ」

「う、うん。『えっ!?! そんなこと聞いてないよ! あ、ダメ負けちゃう!?! あ〜〜〜!』 え〜つと、これでいいの?」

「おっけおっけー、上出来や。それじゃ、結界でうちら側だけ見れるように操作してあいつがどうしてるか見物しよか」

はやてが軽く指パッチンする。

そしてクリアになる視界。映し出される幼馴染の姿

オープン

ひょっとこ パンツを脱ぎ捨てようとしている最中

## クローズ

「ごめんみんな！ あいつ予想以上にバカやった！！」

一瞬で結界をもどしたはやてがみんなに向かつて土下座する。それはまさに視界に映し出された化け物。凶器を持ちながら狂喜し幼馴染の裸を見れるということに狂気した変態の姿。それはか弱い少女たちを絶望へ恐怖へどん底へ叩き落とすには十分であった。

ある者は自分の母の元へと飛び込み涙を流した。ある者はハンマーを取り出して彼の息子を叩き折ろうとしていた。ある者はこれにかこつけて最愛の人の胸を揉みだこうとしていた。ある者は顔を赤くしたまま自分の幼馴染がここまでの男だったのかと嘆き、悲しんでいた。

そうして彼が知らないうちに彼女たちの彼の認識が評価がかわっていった。

19・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン！ (裏側) (後書き)

スカさんが逮捕されないのが不思議です。

真面目回をそろそろ入れるべきかどうか迷いますね。

50万PV達成したみたいです。ほんとうにありがとうございます！

## 20・スカさんとお話し

大人三人がゆうに入れる台所で、男性3人とゴスロリ服を着た男の子1人の声が聞こえてくる。

指示を出しているのは黒髪に日本男子の平均身長をわずかばかり超えている男性である。その男は自分も手を動かしながら淀みなく他の者に指示を出していた。

「スカさん、トンカツ用の肉には八チミチを塗っておいて。そうすることによって冷めてもおいしく出来上がるから。ザッフィー、手羽先は二度揚げでよろしく。エリオはパスタもってきて」

自身はサーモンのカルパッチョを作りながら指示を出すと、そこに恐る恐るといった感じで、スバルとティアが近づいてきた。

「あのー……はやてさんが手伝ってこい、というので来たのですが……私達にできることありますか?」

「ああ、それはちょうどいい。それじゃ、このカルパッチョを運んでくれ。おい、そろそろテーブルのほうに移ってくれ〜!」

『はいー!』

「うわあっ! ティア、このカルパッチョおいしそうだよ!」

「ほんとだ……!」

あくまで男性との距離を取りながら皿を受け取ると、二人は喜色満

面でテーブルへと皿を運んでいく。男性から呼ばれた者たちはゾロゾロとテーブルへと席についた。普段はなのはとフェイトとひよっとこしか座らないのでそこまで大きいのを買っておらず、テーブルには6人しか座れないのだが

「え〜っと、来客ようにもう一つだそっか。フェイトちゃん、どこにあるっけ？」

「え？ 私知らないよ？」

『なのは〜、右奥の部屋に来客用のあるから取ってきてー』

「あ、はい！」

二人でクエスチョンマークを台所から男性の音が飛んでくる。その声でようやくどこに置いたのかの場所がわかり慌てて取りに行くことに。

「……………なんで自分の家のことなのにわからないんだ？」

「まあ、家のことは大抵アイツがやってるし。アイツのほづが詳しいやろ」

ヴィータの眩きにはやてが答える。

「おまたせ〜、テーブルもってきたからみんな座ってー！」

「ところで、なのはちゃん。席順はどうするん？」

「あっ……………どっしりっか」

ここでようやくなのははその考えに至った。主席のテーブルは6人までしか座れない。そして今日来ている者たちは合計で14人引き算すればわかると思うが、半数以上の者が主席テーブルには座れないのだ。

「まあ……こういうときは大抵年上に主席を譲るのが当然なんやけど……」

「なのはさんの横がいいです!」

「なのはさんの上がいいです! もしくは私がなのはさんの下で!」

「といってるように、新人二人が譲らるのでな」

はやて自体はこのことを嬉しく思っている。六課は自分の身内で固めた部隊だ。隊長陣たちは身内なので仲がいいのは当たり前なのだ。新人たちとの温度差がはやてには気がかりだったのだ。それもいまでは雲散霧消しているわけだが。なのはには悪いが、なのはに感謝しているはやてである。

「えっと……とりあえずティアとは一緒になりたくないかな」

「ひどいなのはさんっ!?! あの一夜はなんだったんですかっ!?!」

「どの一夜っ!?!」

ティアがなのはに突撃して抱きつく。

そうこうしているうちに、ザフィーラとスカリエッティが料理がの

った大皿を運んでくる。

『おおー！』

思わず漏らす感嘆の声。

「へへ、前みたときより結構レベル上がってそうやな」

「あいつ、料理にかんしては真剣に勉強してたもんな」

テーブルに置かれた料理をみながらはやたとヴィータが話し合う。

「……もしかして、ここまでの料理が作れるひょっとこさんて凄い人なんじゃ……？」

「うん……それは思ってきた」

新人二人が料理をみて呟くと、何人か首を縦に動かして同調する。

「こ、これっ！ か、カルボナーラです！」

『おいしいぞー、エリオ。 カルボナーラだよ』

「あ、カルボナーラです！」

若干緊張気味でぎこちない足取りで、エリオがカルボナーラを運んできた。

ゴスロリ衣装を身に纏いながら

「……もしかなくても、ここまで見境ないひょっとこさんって頭がおかしい人なんじゃ……？」

「うん……それは知ってた」

新人二人がエリオの姿をみて呟くと、全員が首を縦に動かして同調した。

ひとまず料理を作り終えたので俺もテーブルに着くことに。

「……あれ？俺の席がないんだけど」

「ああ、あつちにあるぞ」

律儀にみんなが待っている中で、ヴィータが窓の方を指さす。

そこにはダンボールで作られたテーブルがポツンと置いてあった。

コップに入ったお茶と一人分取り皿に乗せられたご飯が哀愁を誘う。

「いやいやいや、せめてそっちのテーブルに……」

『こないてくださいっ！』

「ええっ！？俺なにかしたかなっ！？」

料理を手を取ってなのは達が出したテーブルに移動しようとしたところで、そのテーブルに座っていたキャロ・フェイト・ヴィータ・エリオ・ウーノさん・スカさん・ザッファイに却下された。……あれ？ いまさっきまではここまで拒絶されてなかったのに。

そんなことを思っている間にはやてから、いただきますの音頭が行われる。それを皮切りに各々が嬉しそうに料理を食べてくれるのだが

「……うん、スバルとエリオの食欲は予想外だな」

勢いよく食べる二人を前に、俺が作った料理がどんどんなくなっていく。料理がなくなること自体はともうれしいことだ。なんと、たつて、料理は食べられてこそ意味があるんだし。しかしながら、ここまでの勢いで食べられると……

「……料理を作るほうに徹しようかな」

すでに消えつつある料理を眺めながら台所へと向かう。今回の主役は六課の面々だし、楽しんでもらえるならそれでいいや。

食べる側から作る側に早々シフトチェンジした俺のところにスカさんがやってきた。

「どうしたの、スカさん？ 酒とかタバコとかないよ？」

「いや、そういうわけじゃないんだがね。君一人では大変そうなので手伝おうと思ってる。それに、色々とあそこにいたら私も危ない身なのだよ」

「窃盗したから？」

「もっと大きなことさ」

そういいながらスカさんは隣にたつて、俺のかわりにジャガイモの皮をむいてくれる。それにしても窃盗より大きなことつてなんだろう？ 盗撮？ それとも小さい女の子に声をかけたとか？

手を動かしながらも思案する俺の頭の中に、スカさんの声が届く。

「君からみて、フェイト君やエリオ君はどうみえるかい？」

「どうみえるって？」

「こう……なんといいばいいのだろうか。その……人生を謳歌している、みたいな感じで」

「そうだなあ……二人の表情を見ればわかると思っけど、毎日楽しくそこに過ごしてるんじゃないのかな？」

「そうか……」

スカさんはそれだけ言って、作業に徹する。先ほどまでとスカさんの態度が違うのでこちらとしては驚くばかりである。何か悪い食べ物でも食べたのだろうか？

「スカさんどうしたの？ なにか悪い食べ物でも食べた？」

「いや……ちょっと思うところがあったね。君は考えたことないかい？ “もしここで〜ならば違う生き方もできたんじゃないのか

”と。 今日、六課のみんなを見ていたらそう思ってしまったね”

「まあ、それは考えたことあるけどさ」

そんなこと考えていても、仕方がない気がするけどね。 セーブやロードがついてるような生易しいゲームじゃないんだから。

「そんなこと言ってたら前になんか進めないよ。 それに実際、神様が出てきて『君は不幸な人生だったね。 私が昔に戻してあげるから、いまよりよりよい未来になるように、よりよい人生になるように頑張りたまえ』なんて言われても困るよ。 単純に面倒くさいし、思い出補正もなくなってしまう」

「ふむ……そんなもんかね。 それにしても、君にも思い出というものがあるのかね？」

「失敬な、これでもなのは達と過ごしてきたんだ。 色々な思い出はあるよ。 嬉しかったこととか、悲しかったこととかね」

「ほう……差支えなければ教えてもらうことは可能かい？」

冗談なんか一切ない気配でスカさんが聞いてくる。

「よしてくれよ。 野郎の過去話ほどつまらないものはないさ。 どうせ聞くんだったらお話し好きな女性陣の過去話でも聞くことだね。 ぶっ飛ばされる覚悟は必要かもしれないけど」

肩をすくめながらおどける俺にスカさんは苦笑を漏らす。 さすがのスカさんもあの女性陣のお話に突撃するようなことはしないみたい。

「確かに野郎の男性の過去話なんて私たちにはそこまで関係ないことだね」

そのとき、ウーノさんがスカさんを呼ぶ声が聞こえてきた。どうやらウーノさんが質問攻めにあってるみたいだ。流石は女の子だよな。

「ほら、ウーノさんがお待ちかねだぜ。頑張ってくるんだ、スカさん」

「ううむ……私はこういったことにあまり強くないのだが……」

トボトボと歩くスカさんの背中はいさだけくたびれたような、ゲソソとしてるよじに感じた。

広い台所に一人きり。後ろには華やかな女性陣の声。

もしも神様がいたら、神様は管理局の局員以上に忙しい身なんだと思う。だからこそ、あのときだって忙しかったからこそ、あんな事件が起こったのだ。

いまでも覚えている、白黒の世界から色を取り戻してくれた彼女の笑顔。モノクロ

いまでも覚えている、元気に手を振りながら飛行機にのった両親のことを。

## 21・初恋語

『白黒の世界でも、彼女だけは変わらずに俺の前で笑っていた』

祝賀会も時間が経つにつれ、終わりムードに達してきた。　　というか、一部の者から眠たいという意見が出たのでなし崩し的に終わりをむかえた。　　まだ眠らない者たちはゲームをしたりトランプをしたり好き勝手にしている。　　俺はそれを背中で感じながら食べ終わった食器を回収し、片付けることに。

今日はなんだか一人芝居をするのも面倒なので、ちょっとだけ昔のことを思い出してみよう。　　べつに誰に話すことでもないの、どこかにいる宇宙人に怪電波でも飛ばしながら。

突然だが魔法使いつて信じるか？　　少なくとも俺は信じるね。

俺の両親は魔法使いだっただ。　　正確にいうと父親が。　　“魔法使い”、そう言ってもなのはやフェイト、はやてのようにデバイスで魔法を使えるわけでもなく、かといって漫画のような不思議な超常現象を起こせるわけでもない。　　誰もが持っている、誰もが出すことのできる魔法　　ありたいにいえば笑顔なんだ。

父さんは色んな国や色んな世界の人達を笑顔にしていた。　　紛争

地帯でもパンツ一つで突っこんでみんなを爆笑の海に巻き込んでく  
だらない争いを止めさせてきた。いつも豪快に笑って失敗したと  
きだって手を叩いて笑っているひとだった。そんな父さんが俺も  
母さんも大好きだった。

当然、父さんは世界中のスターであったのでその分嫌われてもいた。  
戦争が起こることによって儲けが出る者や、戦争を引き起こした連中か  
らみれば当然のことだろう。父さんは目の上のたんこぶなわけな  
んだからな。

父さんはそんなことを気にするほどの心を持ち合わせていないので、  
“好き勝手にやらせればいい”。そう言っていた。

そんな時らしかった、土郎さんと出会ったのは。父さんも母さん  
も土郎さんも詳しく話してくれなかったからわからないけど……結  
果的に土郎さんの説得もあって俺たち家族は海鳴に引越すことにな  
ったんだ。はじめてきたときは驚いたのを覚えている。ほど  
ほどに自然があって空気がうまくて人柄の良い人たちが集まってい  
たのだから。

引越してからすぐ、俺たち家族は高町家族に挨拶にいった。  
その時だよ、なのはと出会ったのは。

「こ、こんにちは……高町なのは……です」

「え？ なに？ 聞こえないんだけど？」

「ひゃっ……」

「怯えさせてどうすんだよ、バカ」

父さんが俺の頭を叩いてくる。 いやいや、まじで声が小さくて聞こえないんだって。

「ごめんなー、なのはちゃん。ビックリさせちゃったよな。こいつは俺の息子で俊っていうんだ。なのはちゃんと同じ4歳だから仲良くしてくれるかな？」

「う、うん……」

父さんは、腰を下ろしてなのはと呼ばれた女の子と目線を合わせた後に頭をなでながらゆつくりと話す。なのはと呼ばれた女の子のほうも小さく頷いていた。

「え、俺男の子と遊びたいよ。ここらへんにも男の子いるんでしょっ？」

「男つてのはそこらへんにでも転がってるもんだが、女の子つてのは手を伸ばさないと届かないものなのさ。いいからお前も大事にしとけ」

ニヒルな笑顔で俺の頭をぐしゃぐしゃ撫でる。この大きな手が俺は大好きなんだ。

「はっはっ、まあ俊君も遊びたい盛りなんだろうな。俊君、うちの恭也と遊んできたらどうだい？」

向かい側にいた静観な顔つきのカツコイイ人が後ろに立っていた兄

ちゃんを前に出しながら問う。

「恭也、俊君と遊んでくれるかい？ 私たちはちょっと話し合いをしてくるから」

「はい、わかりました」

「あー、だったら私もなのはと一緒に遊ぼう。ねえねえ、みんなで遊ばない？」

恭也と呼ばれた兄ちゃんの隣でニコニコと見守っていた女の人が、あの小さい女の子の肩を抱きながら話しかけてきた。

「ん？ まあ、べつにいいが。俊君もそれでいいかい？」

「うーん、まあいいよ」

正直なところ、俺は恭也さんと男だけで遊びたかったけどここで俺だけが反対しても空気が悪くなるだけなので止めておいた。そして俺たちは何やら真剣に話す親たちを横目に公園に行って遊ぶことにしたんだ。

「もーいーかい？」

『まーただだよ！』

公園に遊びに来た俺たちはなののお姉ちゃんだという美由紀さん提案の元、かくれんぼをすることになった。

「もーいーかい？」

恭也兄さんの声が響いてくる。早く隠れ場所を見つけないと……！

そう思いながら辺りを見回すと、中が空洞になっている可愛らしい猫の遊具を見つけたので急いで入ることにした。絶好の隠れ場所だ。

「……………あ？」

「あーっと……………ごめんなさい、高町。すぐ出ます」

「あ、いいよ。もうおにちゃんさがしはじめてるし。いまだたらつかまつちゃうよ？」

どうやら、美由紀さんがサインを出したのだろう。きよろきよろとしながら恭也さんが公園内を散策していた。俺はそれに目を離さないように注意してゆっくりと遊具の中にはいった。

「お邪魔します……………高町」

「あ、うん……………」

高町が座っていたところに座る俺。二人とも何も喋らず、喋ろうともしない。

どれくらい時間が過ぎただろうか。ふいに横からか細い声が聞こえてきた。

「ねえ……なのほってよんで？」

「え？」

「おなまえで……よんでほしいの」

……ああ、苗字じゃなくて下の名前と呼べということか。確かに考えてみたらそうだよな、今後とも家族ぐるみでのお付き合いをしようだし、それなのに高町なんて呼んでたら誰がだれかわかんなくなっちゃうもんな。

「ああ、ごめん。その……きづかなくて」

「う、ううん。べつにいいよ。その……こんどからきをつけてくれるなら……」

「お、おう」

会話終了

この町にくるまでは全くといっていいほど女友達がいなかったのが祟ったのかまったくこの子との会話ができない。

焦る俺。なんとなくこの空気が嫌で状況を打破しようとなのはのほうを見る。なのは胸の前で大事そうに猫のぬいぐるみを抱えていた。耳は茶色で全身の色は白と黒で統一されている、可愛いけどちょっと配色がおかしくないか？ そう言いたくなるような猫だった。

「あのさ……猫、好きなの？」



それからもののはのしるちゃん談義は続いた。やれ、どこらへんが可愛いだの、ここが気に入ってるだの。正直、同じことの繰り返しだったけど、嬉しそうにはしゃぎながら、楽しそうに笑いながら喋る姿をみているのはとても心地よかった。それと同時にこの子といると自分の心が温まるような、そんな……不思議な感覚にも陥った。

やがてなのはの談義が一段落すると、砂ジャリを踏みしめる音が聞こえてきた。見つかった……！ そう思ったときには時既に遅し。美由紀さんと恭也さんが優しい眼差しで俺たちを見つけていた。

「みつけたぞ、二人とも。これでかくれんぼもお終いだ」

「あう……みつかっちゃった」

「まあ……しょうがないよ」

あれだけはしゃいでいたんだし。見つかるのもしょうがないような気がする。もしかしたら恭也さんは俺たちの話をずっと傍で聞いていて頃合いをみて出てきたのかもしれない。そう子ども心に思ってしまった。

それから俺たちは4人で手をつなぎながら帰った。恭也さんと美由紀さんを端に置きなのはと二人で仲良く手をつないだ。

公園での一件いらい、俺は高町家族が好きになった。父さんの友達である土郎さんは剣道？ 剣術？ をやっているらしく、恭也さ

んと美由紀さんもそれを習っていた。何度も何度も、俺となのは通い詰めた。というか、なのはの場合は俺が引つ張りだったんだ。木刀を振り交差に交わる姿は素直に恰好よかった。憧れてもいた。士郎さんはそんな俺の心境に気付いたのか、よく誘ってくれた。自分にはそんなことできないよ。そういう俺に士郎さんは笑いながら『できないのは当たり前だ。練習しなければ、握ってみなければできるかどうかなんてわからないからね』そう言って背中を押してくれた。恭也さんと美由紀さんが模擬戦をしている横で一生懸命見よう見まねで木刀を振ったことを覚えている。はじめは振り方すら満足にできず木刀を落としたことも覚えている。それでもなんともなんともなんともなんとも挑戦して、ようやく振れたのを覚えている。振れた瞬間に士郎さんの拍手、恭也さんと美由紀さんからの言葉。なのははしやぎ方、そして少し前から観戦していた父さんと母さんの笑顔を覚えている。

いつまでも、こんな日が続くと思っていた。

家では父さんと母さんと遊んで笑っておしゃべりして、朝になって家にまで迎えに来たのはと公園で遊んで家で遊んで、士郎さんや恭也さん、美由紀さんと一緒に稽古して夜には両家族一緒に夕食を食べる。

そんな幸せがいつまでも続くと思っていた。

ただ、運命は残酷で小さい子どもの些細な幸せもいと簡単に奪ってしまった。

それは唐突に呆気なくなんの連絡も知らせもなく合図もなく準備も

なくやってきた。

遠い国で飛行落下事故、乗客全員行方不明

そんな文字に起こすと19文字程度の文で、幸せは音を立てて音もなく見る隙も与えず見せびらかしながら崩れ去った。

5歳の誕生日を迎えるときだった。

この瞬間、俺は孤独になったのだ。

なにもが茫然と佇んでいる間に終わった。遺体なんて見つかるはずもなく、葬儀は形だけ執り行われた。それでも、葬儀にはいろんな人が駆けつけてくれた……みたいだ。ありえないほど多くの信頼関係と交友関係をもっていた父さんは色んな人に悔やまれながらお墓が建てられた。

そして問題は俺をどうするか、という議題になった。

正直どうでもよかった。父さんと母さんがいない世界なんていても同じだった。その証拠に俺の世界は白と黒で染まっていた。モノトーン越しから色々な人が俺に言葉を投げかけてくれた。そのどれもが醜悪で醜くて見境なくて穢れていて俺は首を黙って横に振るだけだった。子どもはビンカンに何かを感じれるときがあると聞く。まさに俺はそのときその状態だったんだと思う。

そんな俺の肩を強く離さないように抱いてくれた人がいた。全てを取り仕切ってくれた土郎さんだ。

士郎さんは一言

『くるか?』

そう言ってくれた。それに黙って頷いたのを覚えている。

「やだよ、士郎さん。家に残りたいよ！」

士郎は困惑しながらも冷静に俊に悟らせる。

「俊君、君の気持は痛いほどわかる。けどね、君が高町家にくるといふことはあの家には住めないということなんだ」

「なんで? ねえ、なんで? 俺があの家に残っていないと父さんと母さんが困っちゃうよ?」

小さい子どもは一つ一つのことを理解しても前後の繋がりを理解していない場合が多い。まさに俊がその状態である。

自分が高町家に行くことはわかっている。しかしそれが家にいられなくなる。ということにつなげられないのだ。お泊り会のと きと同じように思っているのだ。2・3日行けば家に帰る。その頭の中で作られているのかもしれない。

士郎はゆっくりと優しく俊の目線に合わせてしゃべる。

「いいかい、俊君。君のお父さんとお母さんはもういないんだ。

この世にはいないんだ。世界中どこをさがしたってもういない。

君もみただろ？ 葬式を」

「けど父さんも母さんもお墓の中にはいなかったよ……？ それに約束したもん、父さんも母さんも必ず帰ってくるって。ほら、このひょっとこのお面をもって待ってれば帰ってくるって」

士郎は思わず目をそらす。非常な現実には耐えられない子供に自分はどうか説き伏せればいいのか。このギリギリのところまで正気を保とうとしている子供になんとはいえればいいのか。

『俊を頼むわ。俺はちよっくら笑わしてくるからさ』

そう言っ出て行った友人。自分だって友人を失ってしまったんだ。だが、この子の場合は家族を失ってしまったんだ。一人で独りになってしまった子どもに自分はなんと声をかければいいんだろ？ なんと声をかけることが正解なんだろう。

「……そうだね、そう……しようか。お父さんが帰ってくるまでしばらくは高町家にしよう」

「うん！」

答えなんて出せるはずがなかった。こうして騙すことしかできなかった。大人は騙す生き物だ。昔TVで言われた言葉だったが、今日ほどこの言葉がしみ込んでくることはなかった。

父さんと母さんがいなくなっってから世界がおかしくなった。机もテレビも電柱も車も食器も床もガラスも色画用紙も本棚もミカンも

ゲームもなにもかも、白黒の世界になってしまった。会う人会う人、白と黒できていてまるで化け物と会話しているような気分になった。 土郎さんも桃子さんも恭也さんも美由紀さんも 全て平等に均等に化け物だった。

やはり自分は守られていたのだ。 偉大な父さんと母さんに。 だからその二人がいなくなつて守つてくれる人がいなくなつて、世界は弱い自分に牙を剥いてきた。

子どもながらにそう考えていたのを覚えている。

なにもかも嫌になった。 いっそ死にたいと思った。 自分には辛すぎる。 独りで生きていくのは辛すぎる。

だからひよつとこのお面片手に部屋の中でうずくまつた。 こうしていれば、父さんと母さんが来てくれるかもしれない。 優しい目で俺のことを抱きしめてくれるかもしれない。

土郎さんは喫茶店を作ると言っていた。 桃子さんたちが喜んでいたので覚えている。 自分には関係ないことだ。

コンコンと誰かが自分の部屋をノックする。 返事は返さない。 正確にはいうならば返事を返せない。 ここのところ喋つてなかったので、すっかり声の出し方を忘れてしまった。 どうやったら声を発することができるのか？ どうやったら横隔膜を震わせることができるのか？ 今の自分には全くわからなかった。 そして興味もほとんどなかった。 人間と人形の違いは“形”か“心”の違いだけと聞いたことがある。 もしそうならば、いまの自分はまさに人形だろう。

ゆっくりと瞼をおろす。今日もまた眠ってしまおう。そうすれば夢の中で二人に会えるかもしれないから。

そのとき、下を向いていた俺の前に白と黒で体を統一された、茶色の耳の猫が現れた。

「にゃーにゃー、こんなところでねていると風邪をひくにゃ？」

「……」

「どづしたにゃ？ だいじょうぶかにゃ？」

それは調子はずれの声だった。

その娘は、白黒の世界にいてもなお あのとときの姿のまま、俺に笑顔を向けていた。

変わらない笑顔で不変の笑顔で、どんな闇も明るく照らすようにどんな氷も溶かしてしまうように、笑顔で俺の正面に座っていた。

「……あ……」

「どづしたにゃ？」

「なんで……」

「ん？」

「……なんでかわらないの？ なんでなのはだけは……かわらないの……？」

死んでいた声が驚きによって戻ってきた。もう発することができないと思っていた声に戻ってきた。

なのは首をかしげる。

「かわらない……？ 俊くん何言ってるの？」

「だって……だって……」

この世界はモノクロで、全てが化け物になっていて生きる希望なんてなくて

震える手が、なのはへと近づく。その存在を確かめたく、その存在に触れたくて震える手でなのはへと近づく。そんな俺の手をなのははゆっくりと抱きしめてくれた。離さないように、守るように、強く強く握ってくれた。

「どうしたの？ なんで泣いてるの？ どこか痛いのか？」

「ううん……大丈夫……大丈夫だから……もう少しだけこのままに……」

なのはに触れるたびに触るたびに、暖かいものが体に浸透していく。

世界に色が満ちていく

世界が鮮やかに染められる

なのはを強く抱くたびに、握るたびに、感じるたびに、世界に色が

戻っていく。

零れ落ちる涙のしずく

溢れ出る想いの結晶

もう届かぬ親へと愛情

その全てがぐちゃぐちゃになり泣くという行為に終着される。

それでも、なのははずっと抱きしめた。泣き叫んでも喚いても黙って相槌を打ちながら聞く。

どれほど泣いただろうか、目は赤く腫れ声はかすれ鼻水で汚れている。やがてどちらからでもなく、そっと体を離す。

「おちついた？」

「……うん」

今更ながら恥ずかしくなって顔が赤くなるが、それを悟られたくない一心で顔を下に下げる。

「そのひよつと」……」

なのはが指を指す先には父さんからもらったひよつとこのお面。

いまならすんなり受け入れることができる。父さんと母さんは行方不明になったんだと。

決して死んだわけじゃない。だから、いつか会えると待っている。

「そのひょつとじ、面白いよね。なのは好きだよ、そのひょつとじ」

「そうなんだ。でも、おかしくない？ 例えば……俺がお面つけたりしても？」

「ううん、まったくおかしくないよ。だって、そのお面だけで笑える人がいるんだもん。それって、とってもすごいことだとは思うの。笑えるっていう行為は簡単なようでとっても難しいの。その難しいことをこんなに簡単にできるんだもん。それって一種の魔法みたいだね」

「魔法……」

『いいか、俊。俺たちはな、魔法使いだ。人が幸せになったとき、そこには笑顔が発生する。だが、笑顔つてのは存外難しいものなんだ。自分では笑顔を出すことは難しいんだ。だからこそ、俺みたいなやつが必要なんだよ。シリアスだってコメディーに変えて悲劇だって喜劇にかえる。そんな奴が世界には必要なんだ』

昔、父さんが言っていた言葉を思い出す。

いまならわかる。父さんの言いたかったことが。

いまの俺にはそこまでの技量なんてないけども

「魔法使い……なってみようかな」

「うん！ なのはもねこちゃんといっしょに応援するよー！」

せめて目の前にいる、初恋の相手くらいは笑顔にしようと思った

と、まあこれが俺の思い出であり、高町なのはという女の子を好きになった瞬間なんだよな。　なのはは覚えていないかもしれないけど、俺の中では大切な思い出の一つでもある。

君の中の正義のヒーローはだれか？

そう聞かれたら俺は迷わず、『高町なのは』そう答えることができる。　それくらいのことをしてくれたんだ。　例え気まぐれだとしても、彼女が俺を救ってくれた事実はかわらない。

「あれ、俊くん。　まだ洗い物してるの？」

「結構な量をみんな食べたしな。　もうしばらくはかかるかもしれない」

「ふ〜ん……手伝おっか？」

「まじで？　それなら頼む」

ゲームをしている連中から抜け出してくれたなのはありがたい申し出をしてくる。　ちよつと洗い物が多いのでこれは素直に嬉しい。

カチャカチャと食器を洗う音だけが二人を支配する。

「なあ、なのは？」

「ん？」

「昔持ってた、猫のぬいぐるみってまだ持ってる？」

あのときから、猫のぬいぐるみを見る頻度が少なくなり、ついには見なくなってしまったからな。　いまなにしてるんだらうか？

「ちゃんと実家のほうに飾ってあるよ。　誰かさんの涙と鼻水でべとべとになってるけどね」

振り向き笑顔を浮かべるのは。

「白ちゃんも大変だな」

「まっただよね」

お互い顔を見合わせながら、どちらからともなく肩をすくめる。

やっぱり、この思い出はスカさんに話すのは勿体ない思い出だな。

21・初恋語(後書き)

ねこかわいいよ、ねこ。

## 22・幼女ヴィヴィオ

わたがし雲が青色の海を悠々と泳いでいる。海には鳥が自由に滑空しており燦々と降り注ぐ太陽が肌が焦がす勢いで容赦なく襲ってくる。

俺はそんな太陽を眺めながら、庭で洗濯物を干していた。

「今日も二人のパンツはかわいいなあ……一つくらいとってもバレないのではないだろうか？」

この頃は色々と不幸が重なり、なのはとフェイトの警戒が強くなってきた。のだが、それをかいくぐって得られる下着こそ興奮するというものではないだろうか。そうに違いない。しかしここにあるものは既に洗濯してしまった下着だけ。こんなものでは俺の進るパトスを抑えることなんてできやしない。そう……使用済みの下着でない……！ 溢れ出るパトスは抑えることはできないのだ……！

そうと決まれば早速行動である。残りの洗濯物は自分のものだけなので適当に干す。ある程度シワを伸ばして洗濯バサミを使って物干しざおにかけたら、さっそく二人の部屋に行くことに。

ヴーヴー

「ん？ スカさんからじゃん。なんでこんなタイミングで。はい、もしもしスカさん？ いまから世界の滅亡よりも大事な用事があるから後にくれる？」

『おお、ひよつとこ君。突然だが幼女に興味はないかい？』

「詳しく聞こうか」

スカさんから興味をそそる単語が聞こえてきたときには知らないうちには知らない。

『うむ、ちよつと電話ではあれなので私の家に来てほしいのだが…』

…』

「んー、オツケーオツケー。すぐ行くよ」

スカさんの声が少しだけ重かったけど、どうしたんだらうか？

家の戸締りを済ましてからバイクに跨りスカさんの家へとやってくる。

インターホンを押して数分、いつぞやと同じようにウーノさんが出て迎えてくれた。

「お邪魔します、ウーノさん。スカさんはなにしてるの？」

「ちよつと外せない用事がありました……」

スリッパを差し出してくるウーノさんに頭を下げながら、ス力さん  
って暇人じゃなかったのかと考える。 おかしいなあ……俺と同じ  
無職だと思っただけだ。

ス力さんの部屋へと移動中、別の部屋から大きな丸メガネをかけた  
女性で困った様子ででてきた。

「あ、ウーノ姉様。 私の一人亀甲縛り用の縄知りませんか？ ど  
こかにいってしまったんですけど」

「クアットロ、お客様の前ですよ。 そういった発言は控えてくだ  
さい」

「これは失礼しました。 あまり他人のことなど気にしない性格な  
ので」

「そんなことだから、真夜中に一人亀甲縛りを路上で大変なこ  
とになったのでしょう」

ウーノさんが溜息とともに額に手をおく。 なのはやフェイトが俺  
のときにやる仕草と同じだ。 それが意味すること、それは『ダメ  
だ、こいつ』というわけである。

「この方がドクターがよく話に出す男性ですか。 ……なんだか無  
職のような顔をしていますね」

「そつちこそ、DMっぽい顔してるな。 調教でもしてやるつか？」

「心配なく。 あなたじゃ役不足ですわ」

「まあまあ、そこらへんにして。ひよっとこさん、ドクターがお待ちですよ。クアットロ、あなたは夕食の買い物にでも行ってください。縄は私が探しておきますから」

ウーノさんの言葉に納得した様子で、クアットロと呼ばれた女性は玄關のほうへと歩いて行った。まさかウーノさんにあんな妹？がいたとは……。

「ではひよっとこさん、行きましょう」

ウーノさんの言葉に頷きながら、スカさんの部屋へ歩いていく。

スカさんの部屋の前につくと中から1オクターブほど低いスカさんの声が聞こえてきた。

『レジアス、これ以上人造魔導師や戦闘機人の戦力運用はやめにならないかい？』

『何を言っているスカリエッティ。これ以上地上の戦力がなくなっていると思っているのか？』

『地上の戦力が危ないことは知っているよ。でも……ほんとうにこれでいいんだろうか？これが正しいことなんだろうか？』

『何を世迷言を。貴様がそれを言える立場にあると思っているのか』

？ 私利私欲のために動いたお前が』

ここからでは誰と会話しているのか、どんな会話をしているのかわからないが……真剣な様子であることだけは声の低さでわかった。

ほんとうに入っているのだろうか？ 思わず躊躇ってしまう俺とは反対にウーノさんはトビラを軽くノックし、スカさんに俺がきたことを伝える。

『おお、ひよつとこ君。 入ってくれたまえ』

「お邪魔するよー、スカさん。 ……どしたの？ なんか疲れているみたいけど」

「これくらい、盗撮目的で完徹して作り上げたガジェットのとときと比べればどうということはないよ」

そういうスカさんの表情は少しだけ暗かった。

「ふ〜ん、そつか。 それでさ、電話の件なんだけど」

「おおっ！ そうだ、そうだ！ そのことなんだけどね。 君に……というよりも六課の人達を信じて頼みたいことがあるのだ。 簡単に言ってしまうえば、幼女を一人預かってほしい。 いや待ちたまえ、ひよつとこ君っ！？ そのいますぐプッシュしそうな携帯電話をまずは置くんだけ！」

スカさんから幼女の単語が出た瞬間に、携帯を取り出しおっさんの携帯にかけようとしたのだが……そこはスカさん、俺が打ち込むよりも早く制止させる。

「え〜……だってアレだろ？ 俺に犯罪の片棒を担がせようという魂胆だろ？」

「いやいやいやっ！？ 君は私が幼女を誘拐してきたというのかねっ！？」

なにを当たり前のことを。

『ねーねー、チンク。 あそこにいる人だ〜れ？ なんだか仕事してなさそうな顔してるね』

『いくら無職そうな顔をしているからといって、指を指しながら言うのはどうかと……』

「……スカさん。 もしかして俺を攻撃するためにわざわざ呼んだの？」

「いや……そういうわけではないのだが。 チンク、ヴィヴィオ君と一緒にこっちにきてくれないかい？」

『はい』

俺とウーノさんが出入りした扉から小さい女の子の二人組が入ってきた。 赤と翡翠色の厨二チックな目の色をした天真爛漫という言葉が似合いそうな幼女がどたと俺のほうに向かってくる。

「こんにちは！ ヴィヴィオです！」

「こんにちは、ひよっとこです。 えらいね〜、自分のお名前が言

えるなんて」

ついつい頭を撫でてしまう。 ヴィヴィオと自己紹介してくれた幼女は気持ちよさそうに目を細めて笑っている。 なんだか小動物とコミュニケーションをとっているような気分になる。

「え〜っと、ウーノさんの妹かな？」

「そのこのチンクはウーノの妹だけど、君がいま撫でてしているヴィヴィオ君は違うよ。 そしてこの娘がいまさっき話題に出した女の子だ」

「この娘が？」

「うむ。 あまり長々と話しをしたくないので単刀直入にお願いするよ。 この娘を預かってくれないかね？」

その時のスカさんの目にはいつも遊び心なんて微塵も感じなかった。 スカさんは真剣なんだ、真剣に俺に対してお願いしてきたのだ。 やがて頭をゆっくりと下げる。 それにつられる形でウーノさんたちも頭を下げる。 正直、なにがなんだか全くわからない。 一人だけ感じる疎外感。 俺だけがフィールドに立っていないような……そんな感覚を覚える。

「なあスカさん。 理由は話してくれないのか？」

「いまはまだ……話せない。 ただ 私達といるよりもよっぽど幸せになれると思うんだ。 だって私は犯罪者なんだからな」

「幸せの定義なんて人それぞれだと思うけど。 それに俺だってなのはとフェイトがok出さないことには無理だよ。 あいつらの

ことだから、絶対にok出すだろうけどさ。それにこの娘自体はそれに納得してるのか？」

「それは大丈夫だよ。なにも会えないわけじゃないんだ。会おうと思えばいつでも会える距離にいるんだしね」

どうにも要領を得ない会話が続く。スカさんが何かを隠したい気持ちは伝わってくるのだが……

「ねーねー、ヴィヴィオお腹すいたー」

「ん？ あー、わるい。ビスコしか持ってないんだけど」

ポケットからビスコを取り出す。それをヴィヴィオは嬉しそうに受け取ると思いつきり袋を開けた。ことよってビスコが床へと落ちる。

止まる刻

ヴィヴィオの頬に伝わる一筋の涙。

あ、もう決壊寸前だ。

ここで泣かれても困るので予備にもってきたビスコを袋から破って手渡すことに。嬉しそうに受け取るヴィヴィオ。やはり幼女の笑顔というのは何よりも勝る宝である。

それにしてもどうするか……。これは俺一人では決めることができないし、一度帰ってから三人で話し合うとしよう。

「ちょっとだけ時間をくれ。三人で話し合うから」  
腰かけていた椅子から立ち上がったところで、なにかが自分の手を引く張る違和感を覚えて振り返る。

「ねーねー、かえるの？ ヴィヴィオもつと欲しい」

「あー、ごめんな。それ家にしかないんだよ」

「だったらヴィヴィオもいく！」

「……………ん？」

なんだろう？……いま三段飛ばしくらいで話が進んだような気がする。

「えーっと、君が欲しがってるビスコは家にしかないのはわかるよね？」

「うん！」

「それじゃ、俺が一旦家に帰ることもわかるよね？」

「うん！ ヴィヴィオもついていく！」

「まって、そこがおかしい。俺が君を連れて帰ったりなんかしたらおっさんが瞬時にやってくるから。撲殺どころの話じゃなくなるから」

流石のおっさんも釘バットで治せないから。

なんとかかして言い聞かせる。しかしそこは子ども特有の力、話をまったく聞いてくれないパワーで俺が根負けしてしまうことに。

どういう教育をしたらこんな娘になってしまっただ。この娘の将来が本気で心配になってきた。とりあえず、なのはとフェイトの二人に電話することに。

フェイトは仕事なのかつながらないので、なのはにかける。1  
コールの後に口になにかを入れたままの幼馴染の声が届いてくる。

『もふえもふえ？ ほっしたの？ 仕事中心ふあんだけど』

「菓子を食うのが仕事ってある意味すごいよな。まあ、それはいいとして大変なんだ、なのは。真面目に聞いてくれ」

『へ？ あ……うん。どうしたの？』

「目の前に将来が心配で心配でたまらない子がいるんだけど」

『現在が詰んでる俊くんよりかは大分マシだね』

「はあ……」

『えっ！？ なにその溜息っ！？ 溜息つきたいのは私とフェイトちゃんのほっただよっ！』

「誰のおかげでお前らの下着が盗まれずに済んでると思ってるんだ？」

『誰のせいで私たちの下着がなくなってるか知ってる？』

たぶん家出でもしてるんじゃないだろうか？ 俺の部屋に

「まあ、それは置いておいて。今夜は少しだけ早く帰ってきてくれ。ついでにビスコも買ってきて」

『あー、うん。それじゃなるだけ早く帰ってくるね』

通話終了ボタンを押して一息つく。

なのはたちが帰ってくるまでビスコもつかないかな？

## 22・幼女ヴィヴィオ（後書き）

今回はそこまで暴走してないです。たまにはこんなのもアリというくらいです。

あと、少しだけ休憩していいですよね？

### 23・恐怖するヴィヴィオ！ ギャラドスなのは黒い影っ！？

携帯の通話終了ボタンを押しながら、私はたったいままで会話していた人物を思い浮かべる。真面目な話だから帰ってきてほしい…そう言っていたがいったいどうしたんだろう？もしかしてついに就職する気になったのだろうか？いやいや、彼に限ってそんなことはない。だとしたらなんだろうか？

「う〜ん……大事なお話しか。もしかして私達に関係することかな？」

私達に関係することならば大分絞られてくる。夕食のこととか、月1で開催される大掃除とか、実家に帰ってゆっくり過ごすとか。

でも……声色からしてそれはないと思う。それにそれらのことから家に帰ってきたときに言えばいいのだし。

「うむむ……余計にわからなくなっちゃったよ」

「ね〜、なのはちゃん。カービーのエアライドせえへん？丁度いい暇つぶしになると思うんやけど」

「わ〜！やるやる！　　って、違うよねっ！？　　ついつい流されそうになったけど、仕事場にゲーム機持ってくるなんておかしきよねっ！？」

「ぼ〜っと携帯のディスプレイ眺めてたなのはちゃんに言われたくないで」

「眺めてないもんっ！ 誤解を招くような言い方やめてくれるっ！」  
ゲーム機をセットしながらからかうはやてに、なのはは思わず席を立ちながら否定する。

『な、なのはさん……困りますよ。お仕事の最中に私が写ってる待ち受け画像をみるなんて……』

「顔を赤くしながらこっちにこないでよっ！？ 私そっちの趣味がないっていつてるでしょっ!？」

「大丈夫です。私が教導してあげます！ 愛の共同作業で教導しましょう！」

書類を投げ捨てて迫ってくるスバルに、なのはは全力で逃げる。ドタバタと慌ただしい音が仕事場に響く

「ただいまー、いま帰ったよ」

「フェイトちゃん助けてっ！」

執務官の仕事から帰ってきたフェイトに勢いよく飛びつくなのは。フェイトは全身の体のバネを使いながら必死に受け止める。顔を上げたなのはには若干ながら涙を流した痕跡が残っている。エースオブエースに涙を流させるほどの部下の迫力と真剣度。なぜこれを訓練で発揮しないのか甚だ疑問を覚えるフェイトである。

「ど、どうしたのなのはっ!？」

「もういやだよっ！ おうち帰りたいよっ!！」

「なのはさんの泣き顔カワユス……。ぺろぺろしていいですかっ！？」

「落ちていてスバル！？ それもう犯罪者の域に達しようとしてるから！」

「フェイトちゃん、おうちかえろっよっ！」

フェイトの胸に顔を押し付けるなのは。ふとみると、はやては面白そうに自前のカメラでこの様子を撮っている。ここにその他の者がいなかったことだけがなのはにとつての救いだったかもしれない。もしこんな姿をみられたら、べつに見られてもいまままでと変わらないかもしれない。

幼子のようにフェイトに抱きつくなのはに、フェイトはトドメの一撃を食らわせた。

「でも、家に帰ったら俊がいるよ……？」

フェイトの　かいしんの　いちげき

エースオブエース　高町なのはは　たおれた

「さすがフェイトちゃんや。なのはちゃんに向かって効果抜群の一撃をためらいなく与えるなんて……恐ろしい娘やっ！」

倒れたなのはを必死に介抱するフェイトをみながら、はやてはそう呟いた。

なんとか管理局員に見つかることなくヴィヴィオを家に迎えることができた。いや、ほんとうはダメなことだと思っただけだ。

「わあ〜！ お家おっきいね！」

「だろ〜？ なのはとフェイトが頑張ってくれてるからな！」

「それじゃあ、おにいさんはなにしてるのぉ？」

「おにいさんは夢を追っかけているんだよ」

いまだたどり着かないどころか、見えてこない夢だけだ。

それでもヴィヴィオはこのフレーズが気に入ったらしく、手を叩いて喜んでくれた。

「ヴィヴィオも夢をおいかけろ〜！」

「ヴィヴィオ、夢ってのは追いかけるものじゃないんだよ。叶えるためのものなんだよ」

「でもおにいさんはおいかけてるんでしょ？」

「俺の夢はツンデレだからな」

「まだにデレを魅せてくれたことはないのだけど。」

「まあ、夢はいいじゃないか。それよりビスコ食べるか？ うまいぞ、ビスコ」

「たべるたべる！ ヴィヴィオ、ビスコ大好き！」

「そうかそうか。ビスコを食べるとなのはみたいになれるからな。頑張るんだぞ！」

「ん〜？ なのはってだ〜れ？」

ビスコを口に含んだまま、ヴィヴィオが首をかしげてくる。こういった仕草が似合うのもこの娘のすごいところだな。しかし、なのはがダレなのか、か。これは難しい。なんととっても自慢の幼馴染である。下手に貶してイメージをそこねたくないし、夕方には会うことになるのだからここはヴィヴィオが喜ぶような内容に脚色しないと……！

俺はゲームを取り出しポ モン図鑑を選択し調べる。幼馴染のイメージを貶すわけにはいかない……！！

「え〜つと、タイプは水・ひこうで入手方法はすごいつりざおかコイキングから地道に育てるのもアリかな。ものすごく凶暴でヴィヴィオみたいな娘が悪いことをすると、どこからともなくやってきて全身を引き裂いて帰っていくんだよ。口からはビームが出て

きて、そのビームはミッドを破壊するほどの力をもっているんだ」  
なのはのイメージを貶すことなく、どちらかというを持ち上げる形  
でヴィヴィオの目線に合わせて話したのだが 話し終えた瞬間に  
ヴィヴィオに泣かれてしまった。

ごめん、なのは。 ヴィヴィオが求めてたのはギャラドスなのはじ  
やなくて、高町なのはだったみたい。

23・恐怖するヴィヴィオ！ ギャラドスなのは黒い影っ！？（後書き）

ほのぼのストーリーっぽくていいですね。

24・それでも俺はやってない。 というのは嘘だ

ヴィヴィオに色々な服を着せて遊んでいたら我が家のお姫様二人が帰宅する時間が近づいてきたので、すぐ隣で楽しそうにお絵かきしているヴィヴィオに確認を取ることに。 なんの確認かというと、これから行動する予定の確認である。

「ヴィヴィオー、さっき言った通りにするんだぞー」

「うん！ えっと、金髪のお姉ちゃんのところに駆け寄ればいいんだよね！」

「そうそう。 決して栗色の髪のお姉ちゃんには近づくなよ。 触れた瞬間溶けるからな」

「あう……ヴィヴィオきをつける……」

ヴィヴィオの中ではすでになのはが、空を飛び街を破壊し目と目が合った者を虐殺していくクリーチャーへと変貌していた。 幼馴染の俺としては小さな子どもにこんな恐ろしい誤解などしてほしくないのだが……しょうがないよな。 俺もたまたまに殺されそうになるし。

ヴィヴィオが俺のズボンを掴んだところで携帯からメールを受信する音が聞こえてきた。

『もうすぐかえるよー！ あと3分くらいかな』

「よし、それじゃヴィヴィオは先に玄関先で待機しておいてくれ。俺は着替えてくるから」

「はい！」

手をあげて元気よく駆け出すヴィヴィオ。　　やっぱ幼女はかわいいな。

そんなヴィヴィオを見送りながら俺は衣装部屋へと移動して、金髪長髪のカツラに青色のカラコンをつけ黒と白のフリルつきミニスカートを履き、黒ニーソで絶対領域をつくる。

ちなみにカラコンは目を悪くするので長時間つけることはオススメしないからな。

次に軽くファンデーションを塗り、口紅で可愛さを増していく。

つけまつげで目を大きく魅せて、最後にゴムでツインテールにする。

よくツインテールにすれば“ロリ”なんて言い方をしているが俺は絶対に認めないからな。　　おまえらだよ、18禁ビデオの出演者たち。

さてさてそれは置いて、俺も準備ができたので玄関に向かうことに。

「じゃーん！　どうだ、ヴィヴィオ！」

「うん！　すっごくきもちわるい！」

ですよねー。　若干ながら俺も思っていました。　だってべつに女顔でもなんでもないからね。　イケメンだって何しても似合うわけじゃないもんねー。

ニコニコ笑顔で言葉の暴力を飛ばしてくるヴィヴィオに、冷静にな

りながら返事を返す。 あかん、股間に変な汗かいてきた。

その時、グッドタイミングなのかバッドタイミングなのか分からないが、玄關の向こう側から二人の話し声が聞こえてくる。 とても楽しそうな声だ。 その声を聞いただけで俺の心は温まってくる。

ドアノブが回る音がして二人の女性が顔を出した。 一人は可憐な光翼、フェイト・T・ハラオウン。 六課のアイドル担当だ。 としてももう一人は恐怖の権化、高町なのは。 六課のオチ担当だ。

「わ~~~~い！ おかえり~~~~い！」

「えッ!? な、なに!? なんなのいきなりッ!?」

「わ~~~~い！ 会いたかったよ~~~~い！」

「ええッ!?」

フェイトが見えた瞬間に駆け出し飛びつくヴィヴィオ。 フェイトはヴィヴィオをしっかりと柔らかく受け止めながらも盛大にテンパっていた。

「ママー！ ママー！」

「えっ!? ちょっと!? ど、どうなってるのっ!?」

テンパりながら回りをわたわたと見回すフェイトは、そのまま待機していた俺と目が合った。 俺はそれを確認して、目に涙を浮かべながら『よよよ……』と泣き崩れる。

「かなしいわっ、フェイト。私達の隠し子を忘れるなんて……私とともに過ごした情熱でイスカンダルな一夜を忘れたというの！」

「な、なのはっ！？ どうすればいいのかなっ！ も、もしかして迷子とかっ！？」

「うん……迷子なのかな。でもこの娘、フェイトちゃんに懐いてるみたいだけど」

「あなたは私の大切な初めてを奪ったのよっ！ その罪、償ってもらうしかないのよっ！」

「ちょっと、まってよなのはっ！ ほんとうに私はこんなの知らないよ……」

「うん……ねえ、もしかしてママとパパとはぐれちゃったのかな？」

「ひいっ！？ 触ったら、ヴィヴィオ溶けちゃう！ 助けて！」

「……………そのバカ、いったい何をこの娘に吹き込んだのかな？」

「シカトされたあげく、いきなり俺が犯人扱いされるの！？」

渾身の演技を全て無視されたあげく、勝手にヴィヴィオに吹き込んだ犯人にされてしまった。まったく……なのはも仕事で疲れてるんだな。

フェイトに飛びつき抱きついたヴィヴィオはフェイトの足に引っ付



必死に弁明してる彼の声をBGMにしながら私はこの女の子に話を聞くことにした。

「え〜っと、私はフェイト・T・ハラオウンです。あなたのお名前は？」

「ヴィヴィオ！」

「そう、可愛い名前だね。それで、どうしてここに居るのかな？」

「え〜っと……おにいさんにつれてこられたの！」

「なのは！ 俊を完膚なきまでに叩きのめして！」

ヴィヴィオからおおよそ聞きたくない内容を聞きだしてしまった私は、ここからなのはに聞こえるほどの音量でそう頼んでしまった。

『それ絶対に誤解だから！？ 内容とかまったく聞いてないけど1000%誤解だって断言できるから！』

既に犯罪者の言葉など私の耳には届かない。俊ならいつかやあると思っていた……。だからこそ、なのはと二人でそれを止めようとしていたのに……。最低な人間だよ、俊は！



「使い方が正しいと銀河を守るほどの力と恰好よさがあるんだよ。アレは完全に使用例が間違ってるから、マネしちゃダメだよ？」

「うん！」

ヴィヴィオが可愛く元気に頷く。

そんなヴィヴィオを片手であやしながら、この娘が何故家にいるのか後で聞いただそうと思う私であった。

24・それでも俺はやってない。 というのは嘘だ(後書き)

カラコンで目がより一層悪くなりました。 カラコンは僕には合わなかったのかな。

## 25・デッドorデッド

現在俺たちは夕食のすき焼きを食べていた。俺の顔はアソパソマン並みに腫れあがっており手なんて肩から上にあがらない状態になっている。おかしい。絶対におかしい。幼馴染というものは素敵でエロエロな展開になると相場が決まっているはずなのにこの二人はデレというものが一切ない。これは俺がエロエロなことをするゲームの世界ではなかったのか？

だがそんなことを言ってもはじまらない。いまにこのテクニクでこの二人が乱れる姿が目に見えぬ。そう……俺に懇願する姿がな！

「白菜の追加はまだかな？」

「あ、いますぐにもってきます」

……もう少しだけ、もう少しだけの辛抱だ……！

冷蔵庫から白菜を取り出して食べやすい大きさにカットし、食卓へと戻ってくる。

「白菜もってきました」

「ねえ、たまごもないんだけど」

「あ、少々おまちください」

向かい側のなのはがテーブルでコンコンと卵を割る仕草をしながら、

低い声で言ってくる。俺はその声に反応してすぐさま冷蔵庫に向かい卵をとってくる。

「どうぞ、なのは大明神さま」

「……はあ。ちゃんと反省してるの？」

「それはもう、猛反省してます。フェイトの砂丘よりも高く谷間よりも深く」

「……君の中の反省が何なのか知りたい」

卵を受け取ったなのは頬杖をつきながら上目使いで俺を見てきたのに対して、俺も誠心誠意答えたのに溜息が返ってきた。あんまり溜息ばかり吐くと幸せが逃げるぞ？

「はいヴィヴィオ。熱いから気をつけてね？」

「うん！ ヴィヴィオ、きをつける！」

なのはの隣にいるパツキン二人が仲良しそうにする光景が視界にはいる。パツキン（大）がパツキン（小）のお椀をとって鍋の中から肉と野菜を均等によそって渡す。パツキン（小）はそれを両手で受け取りながらニコニコ笑顔で復唱する。なんとも微笑ましい光景である。

「完全にハブられてるな」

「は、ハブられてないもん！ ちょっと君の相手をしていただけであって……本当は私にもこれくらい懐いてるもん」

「ほぐ。 さっきは溶けるとまで思われていたのに？」

「そ。 それは誤解だから大丈夫なの！ みててよね！ ヴィヴィオ、私が卵割ってあげるよ？」

「あう……あ、ありがとう……」

ニコニコ笑顔でヴィヴィオのお椀に俺からもらった卵を割ろうとするのにはヴィヴィオはお礼を言いながら、少しかお椀を自分のほうに引き寄せた。これが意味すること、それはヴィヴィオがなのはから卵を受け取りたくないということだ。

ヴィヴィオの態度を見て、笑顔を張りつかせたままなのははゆつくりと体を引いた。 まあ、あんな態度みせられたらしょうがないよな。

「……いまの光景は見てなかったことにしといたらいいの？」

「……うん」

消沈したまま首を縦に動かすなのは。 ちなみにフェイトはそんな二人のやりとりをみてオロオロするばかりである。

そもそも席順からして避けられてるということに気付かないのか？

いまの席順はこのようになっている。

俺

ヴィヴィオ・フェイト・なのは

どう考えてもヴィヴィオはなのはを避けているだろ。俺？俺は安定の一人だよ。みんなどう思う？家という空間で考えるなら両手に華だよ。でも横という空間で考えるならスツカラカンだよ。

まあ、そんなことは置いていて。

「エースオブエース破れたり、だな」

「こんな負け方嫌なんだけど……」

具が何も入っていない空のお椀をカツカツと刺しながら、なのはは一人で愚痴り始めた。

とりあえずそつとしておくことにして、冷蔵庫からうどんを取り出してくる。

「そもそも、俊くんがヴィヴィオにへんなことを吹き込まなければこんなことにはなっていないんだよね。そう考えると私の不幸はいつも俊くんが絡んでるような気がするんだ。ううん、べつに俊くんを責めるつもりなんて全くないんだよ？でもさ、たまに思うよね。俊くんはなんでなのはをイジめるんだろうって。毎日、人の下着盗んでさ。頭おかしいよね。ううん、でも俊くんが頭がおかしいのは知ってるよ？子どもの頃からの付き合いだからね。一番長い付き合いだもんね。でもさ、たまに納得いかないことってあるんだよ。こっちにも意地つてもものがあるしね。これもね、大変なんだよ？あっちへフラフラ、こっちへフラフラ、怒ってもヘラヘラしちゃってさ。どれだけ私がディバイン・デスタ

「撃とうと思ったことか。けど、俊くんはそんなことおかまいなし。そもそもデリカシーがないんだよね。いまどきデリカシーのない男なんてモテないんだよ?」

台所から戻ってきたところで、ちょうどなのはの愚痴が一段落したみたいなので声をかけることに。

「なのは、うどん食う?」

「たべる!」

さつきとは打って変わった表情で目をキラキラさせながら肯定するのは。うんうん、わかるぞその気持ち。すき焼きのうどんって美味いよな。ところで愚痴ってどんな愚痴なんだろうか? どうせ俺に対する嫌味なんだろうけどさ。

うどんを三玉いれて蓋をすることに。

その間に俺は二人に話しをすることにした。もちろんこれからヴィヴィオをどうするかについての話だ。

「さて、二人とも。まずはヴィヴィオがここにいる理由を話す。そのうえでこれから俺たちのする行動を決めていくことにしたいんだけど、異論はないよな?」

「うん」

二人が肯定する。ヴィヴィオだけは器に残った食べ物に一生懸命で話に参加していない。けど、それが一番いいのかもしれない。

「それじゃ、まずなんでヴィヴィオがいるのかだが」

かいつまんで、要約してわかりやすく話していく。スカさんから預かったこと。ビスコの魔力でここについてきた。案の定、なのはもフェイトもビスコ辺りでもって微妙な顔をしていたのだが。

「まあ、俺が話せることはこれくらいかな。俺自身もスカさんからそこまで聞いてない、っていうか聞こうとしてもダメだったよ」

「もしかしてスカさんって多忙な人なのかな？ てつきり俊くんと同じ無職だと思ってたけど」

「というか、スカさんってスカリエッティに似てるよね」

「フェイトの気のせいじゃない？ それって次元犯罪者なんだろう？ スカさんにそこまでできるとは思わないけど」

「……それもそうだね」

「とにかく、ヴィヴィオは此処で預かるってことで異論はないんだよね？」

俺の問いに二人とも頷く。わかってはいたけど……ほんと二人とも優しいよね。

だがここで大きな問題が一つでてくる。

その問題とは

「土郎さんやリンディさんになんて説明すればいいんだろうか……」

「「あつ……」」

預かっているだけとはいえ、ヴィヴィオはここで生活していくことになるんだ。スカさんは期限については何も述べなかった。ということは、最悪の場合、一生なんてことにもなりかねない。だとしたら様々な問題が出てくる。

やはり早めに話しておくべきだろうか……。

「やっぱり、話しておかないとまずいよね。最悪でもリンディさんには話しておかないと」

「いやいや、リンディさんだけじゃダメだろ。土郎さん達だって俺たちのこと心配してるんだから。だからこそ、俺たちはしょっちゅう海鳴にも帰って無事であることを伝えてるんだし」

「でも……お母さんになんて説明すればいいの？」

フェイトの言葉で軽くシミュレートしてみることに。

「あら、なのはちゃんとフェイト、久しぶりね。ついでに無職の君も」

「いつも思うのですが、俺にはリンディさん厳しいですよね」

「あなたが死んでくれたら優しくするわよ」

まったく意味ないですよ、それ。

玄関の前で軽くはない世間話をする。なのはとフェイトのおかげで若干リンディさんの顔にも優しさがある。俺単体のときは般若のような顔してるのにな。

「それで？ なにか困ったことでもあったのかしら？ 三人で訪ねてくるなんて」

「あ、そのことなんだけどね、お母さん？ ちょっと話しておきたいことがあって……」

フェイトのよそよそしい態度にリンディさんもなにか違和感に気付いたようだ……フェイトが喋っているので口を挟まないようだ。

「えっと 子どもをね、紹介しようと思って」

「死ぬな、俺が」

「うん、俊は死んじゃうね」

「フェイトちゃんの言い方も悪いとは思っけど」

三者三様の言葉を述べながらも俺たちが到達した答えは一つ。俺がリンディさんに殺されるという結末だ。俺自身もそんな未来が容易に想像できるわけで、死ぬしかないわけで、なんとも困ったことになった。

「それじゃなのはほうは？」

「うちもダメだと思うよ？　ねえ、俊くん」

なのはが俺に振ってくる。　俺はそれに大きく頷いた。

「そもそも髪からして違うしな。　それにもしそんなこと言ったものなら、俺は士郎さんと恭也さんに殺されるよ。　なのはのこと溺愛してるし。　ヴィヴィオの年齢はだいたい5歳くらいだろ？　逆算すると14歳だぞ？　そんなこと士郎さんや桃子さんが許すはずないだろ。　どこの14歳の母だよって話になってくる」

「……それじゃいつそのこと、話さないっていう選択は？」

「それはもつとダメだよ、フェイト。　俺たちはまだ19歳。　日本では未成年の部類に入ってしまうから、やっぱり士郎さんやリンデイさんには話したほうがいいと思うんだ。　ヴィヴィオはペットとは違うんだ。　やはりそれなりに報告とかも必要になってくるよ」

「うっっん……でも、報告した先に待ってるのは俊くんの死」

そこが一番の悩みだよな……。　もつとこう……。　ギャルゲやエロゲみたい簡単にいけばいいんだけど。

「くっくっん……」

三人が悩む中で、当人であるヴィヴィオだけが

「うっどん食べようよー！」

元気に発言をしてるのであった。

25 デッド・オーダーデッド(後書き)

次回は甘々にしていきたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6663y/>

---

パンツ脱いたら通報された

2011年12月11日18時46分発行